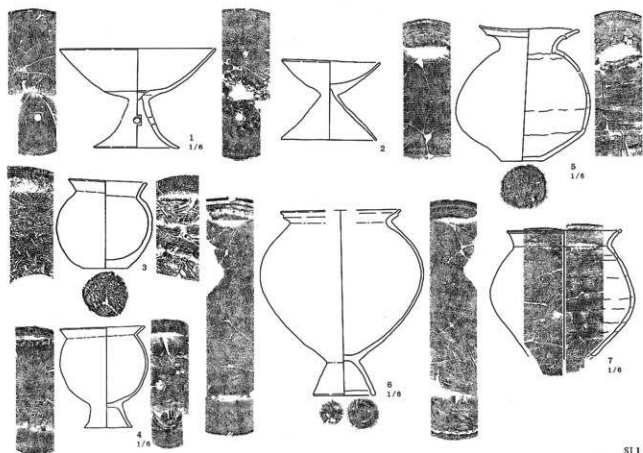
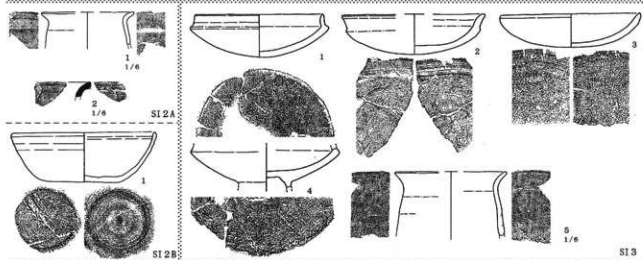




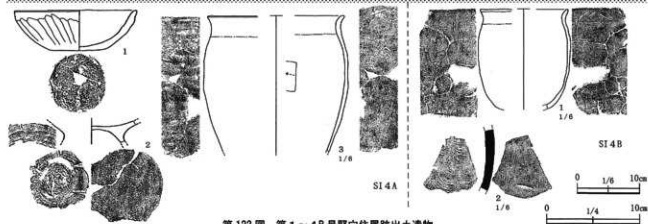
SI 1



SI 2A

SI 2B

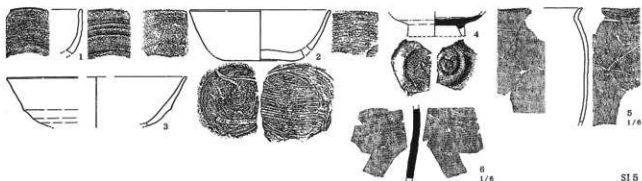
SI 3



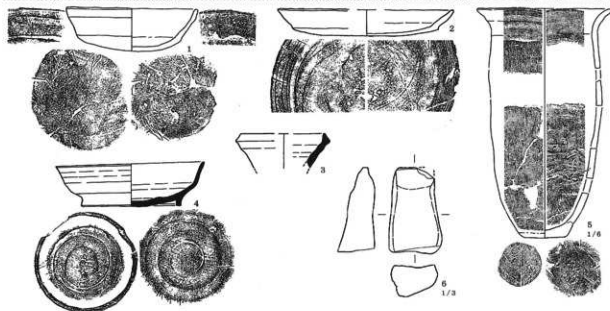
SI 4A

SI 4B

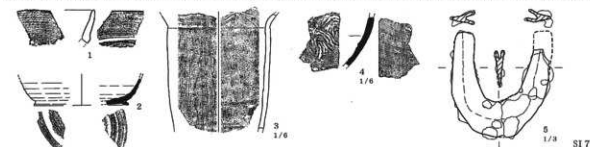
第 122 図 第 1～4B 号竪穴住居跡出土遺物



SI 5



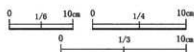
SI 6



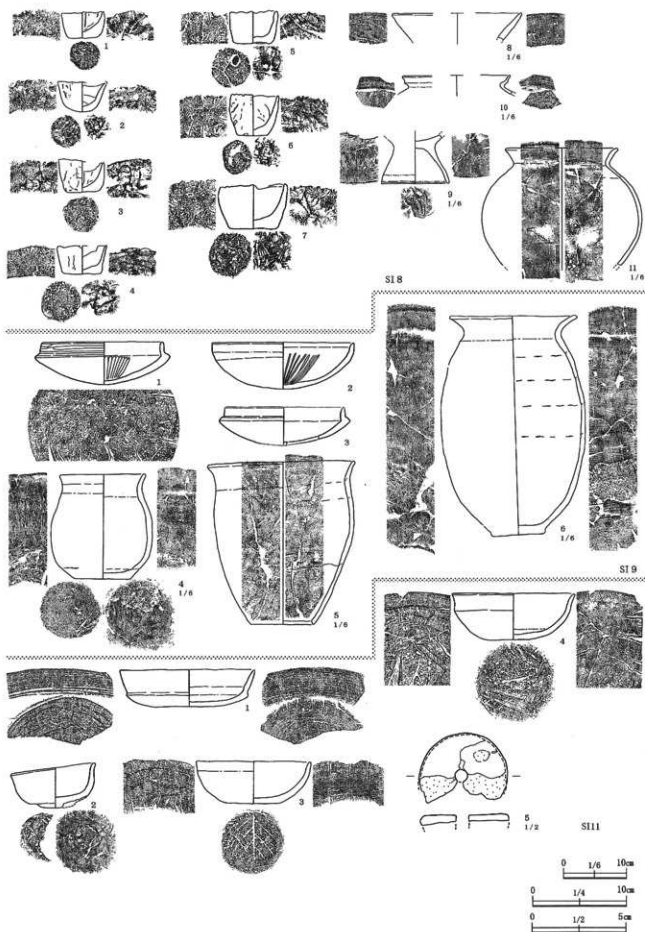
SI 7



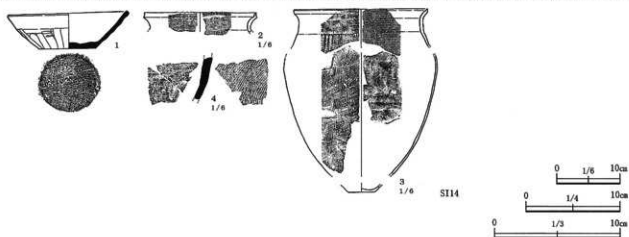
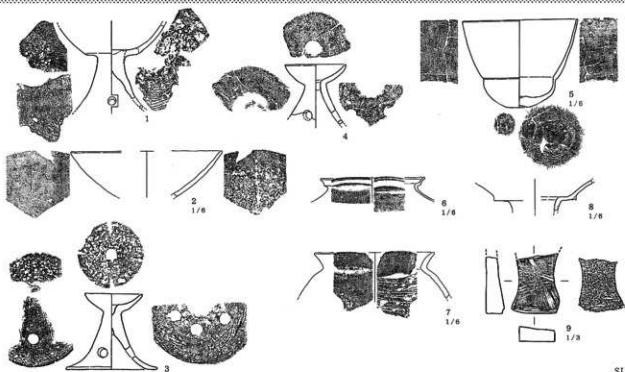
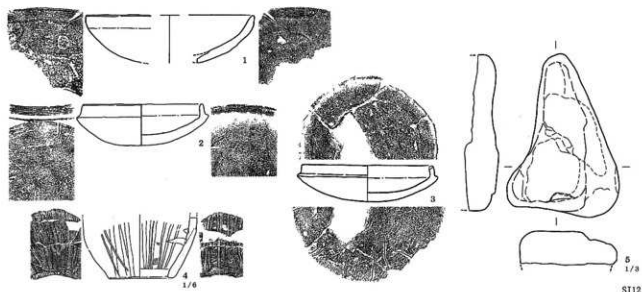
SI 10



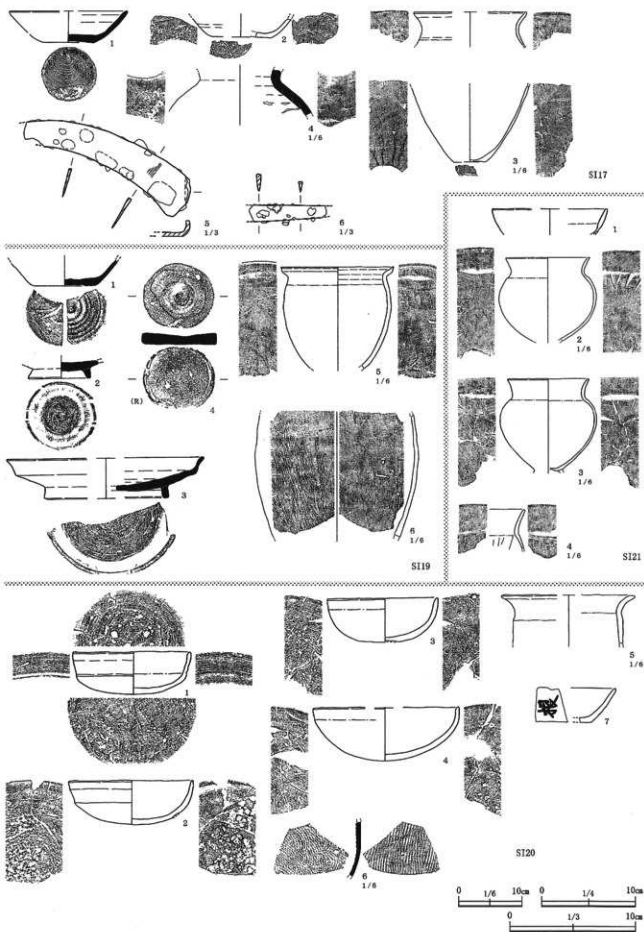
第 123 图 第 5 ~ 7 · 10 号竖穴住居跡出土遺物



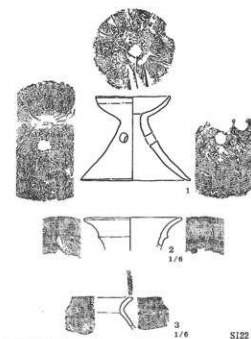
第 124 图 第 8・9・11 号竖穴住居跡出土遺物



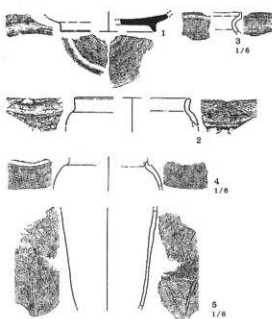
第125図 第12～14号竪穴住居跡出土遺物



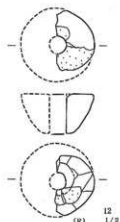
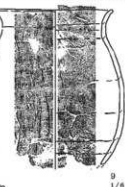
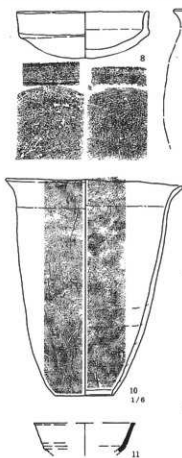
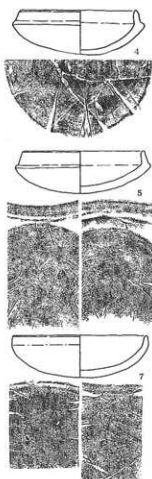
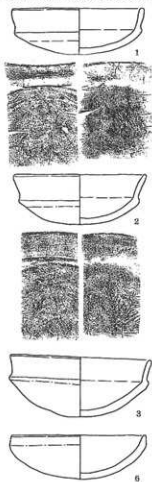
第 126 图 第 17・19～21 号竖穴住居出土遺物



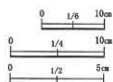
S122



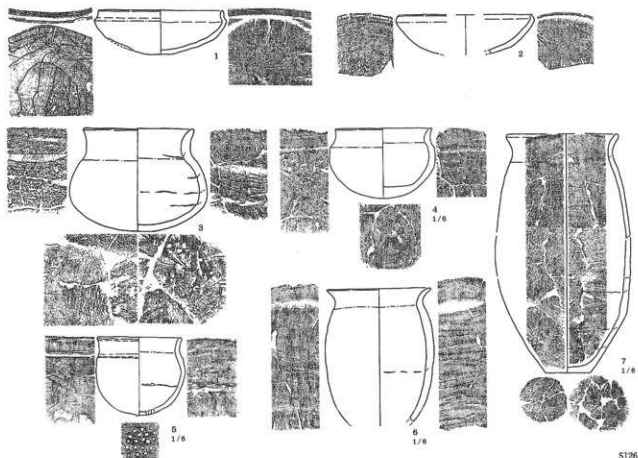
S124



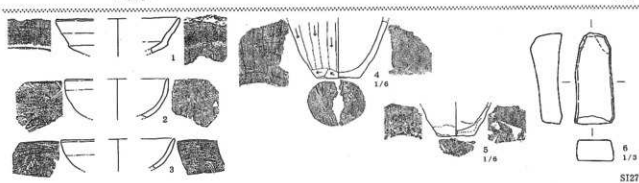
S125



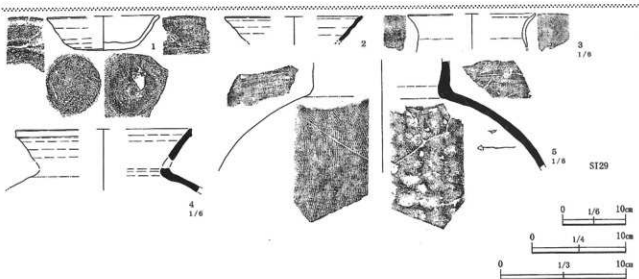
第 127 图 第 22・24・25 号聚穴住居出土遺物



SI26

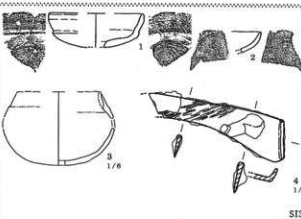
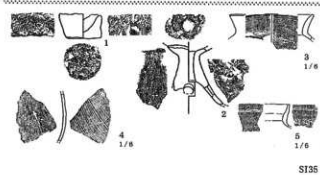
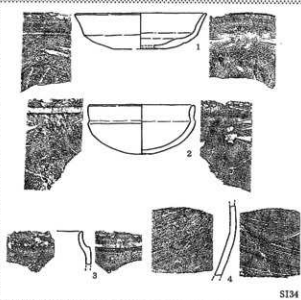
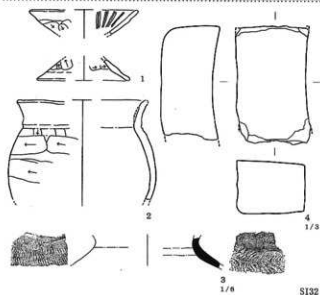
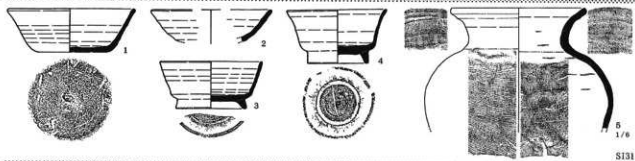
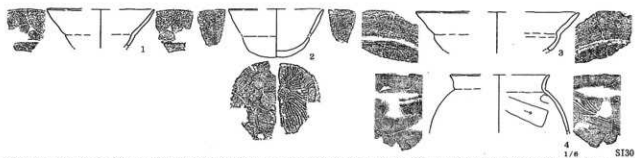


SI27

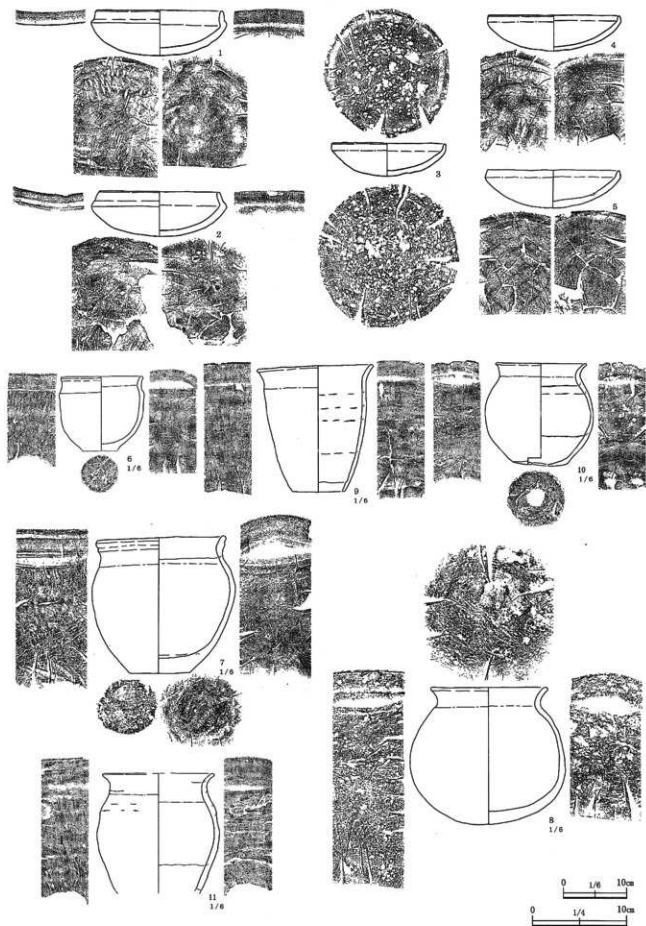


SI29

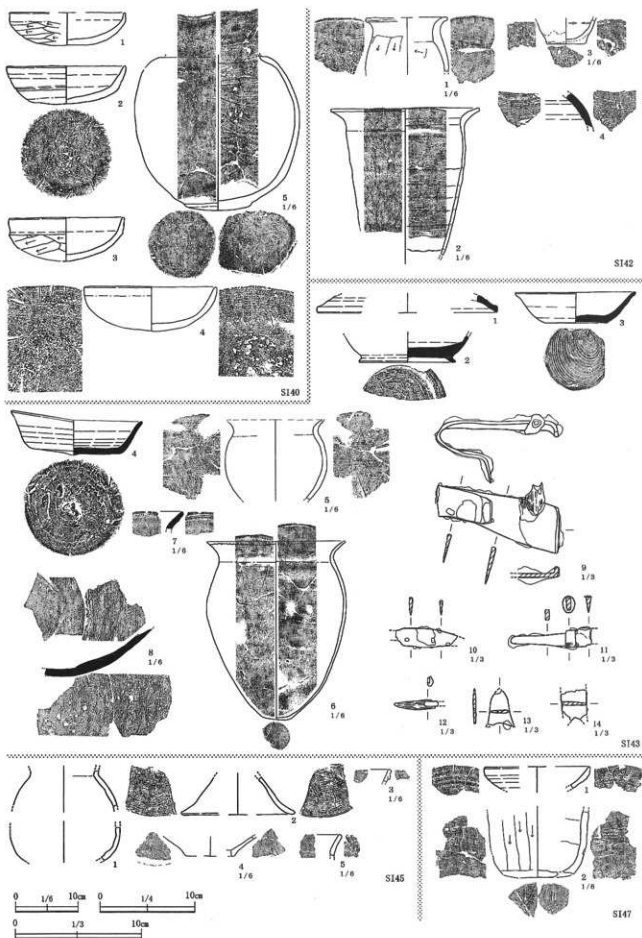
第 128 图 第 26·27·29 号竖穴住居跡出土遺物



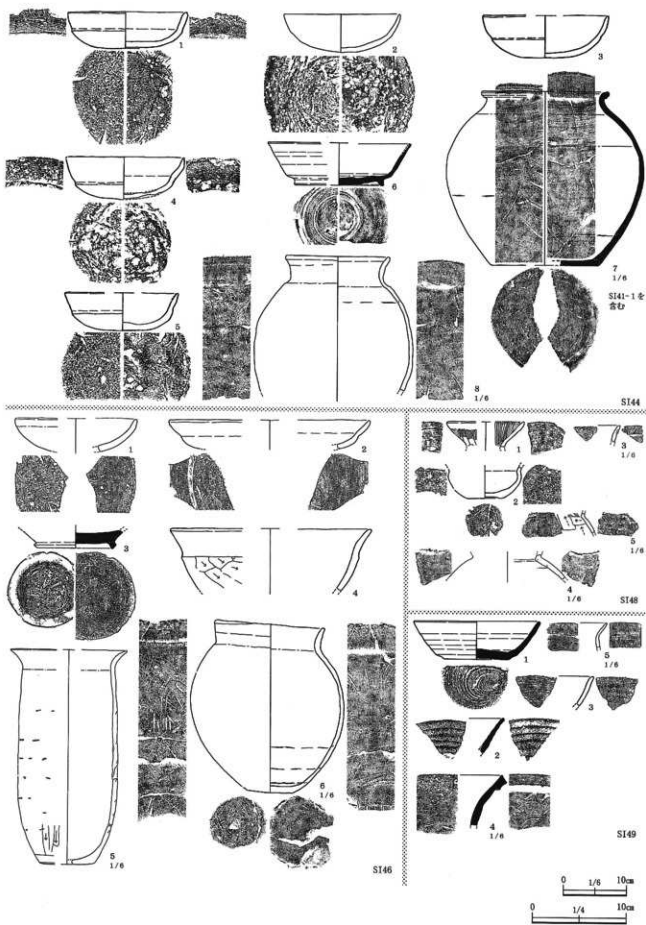
第 129 图 第 30 ~ 32 · 34 ~ 36 号竖穴住居跡出土遺物



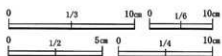
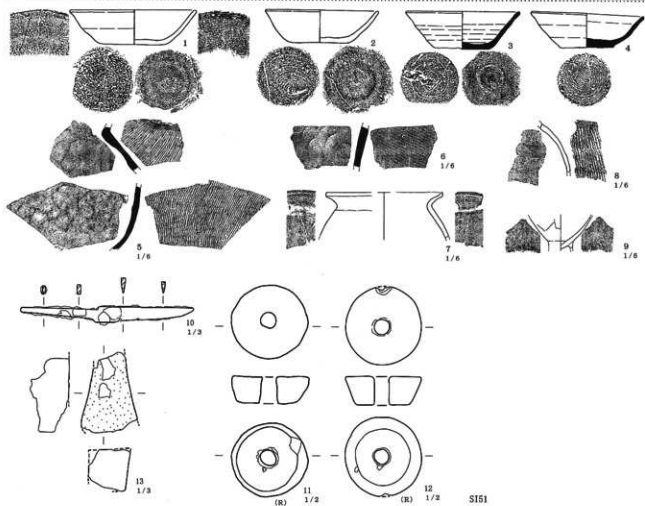
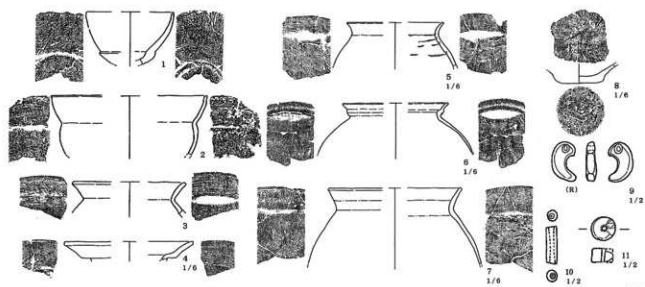
第 130 图 第 33 号窑穴住居跡出土遺物 (1)



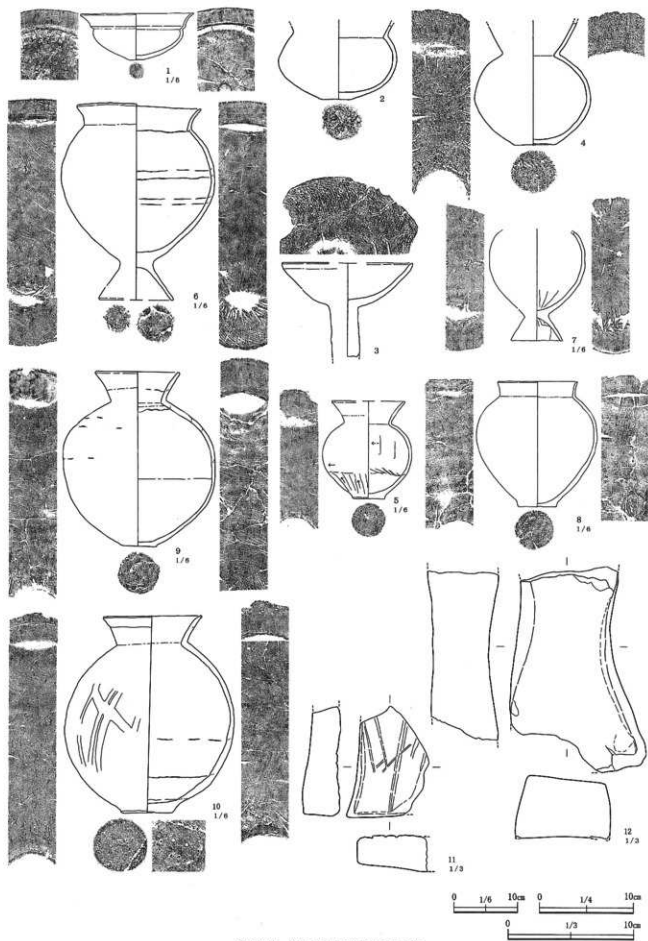
第 132 图 第 40・42・43・45・47 号竖穴住居跡出土遺物



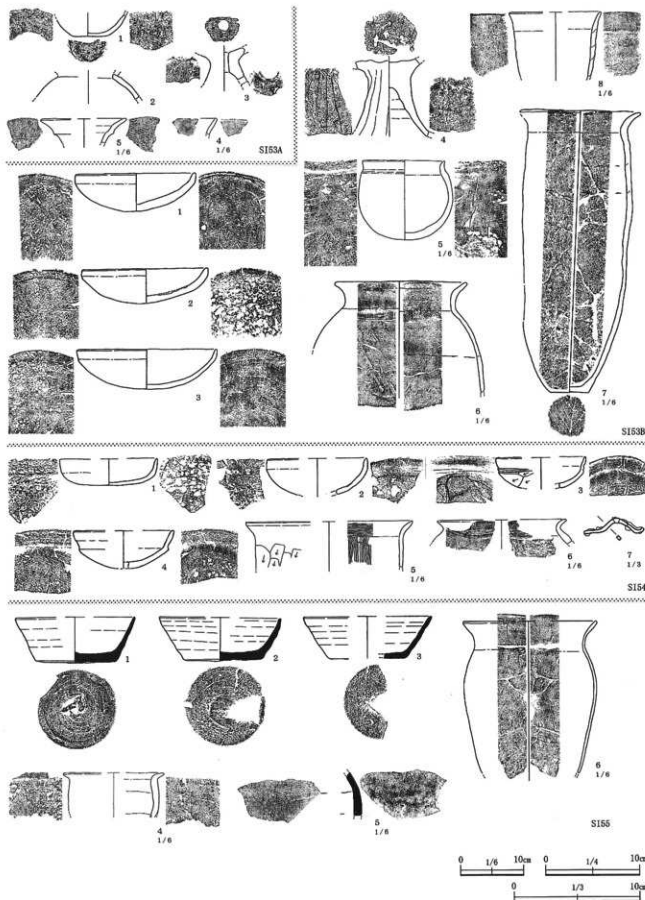
第 133 図 第 44・46・48・49 号竪穴住居跡出土遺物



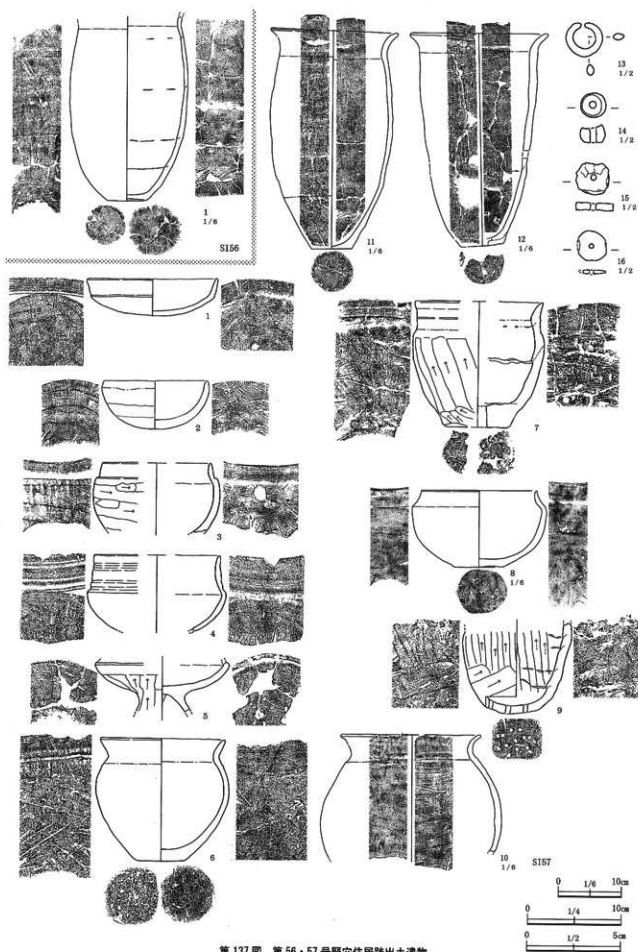
第 134 图 第 50・51 号竖穴住居跡出土遺物



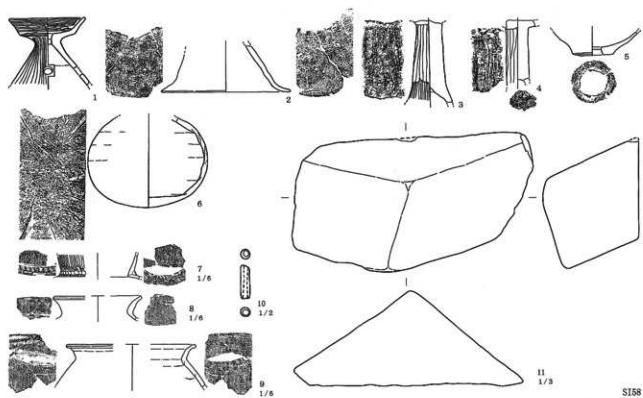
第 135 图 第 52 号竖穴住居跡出土遺物



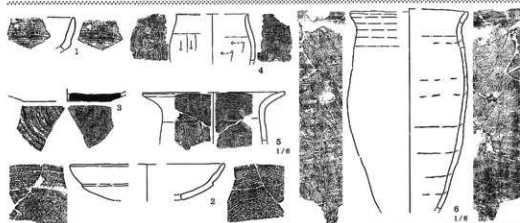
第136图 第53A~55号竖穴住居跡出土遺物



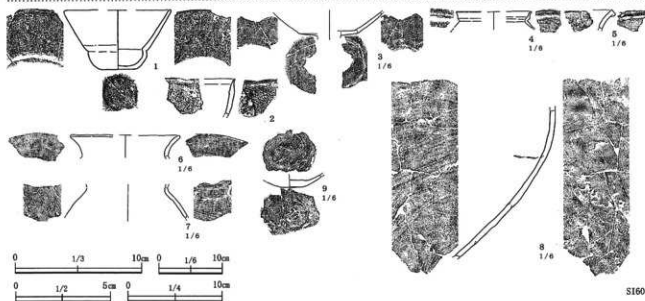
第 137 图 第 56・57 号竖穴住居跡出土遺物



SI58

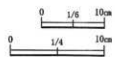
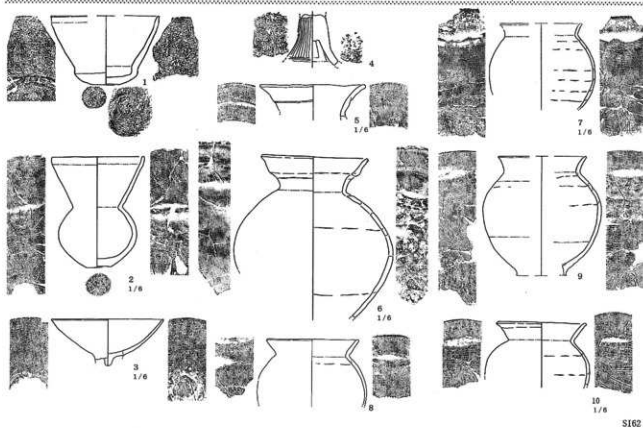
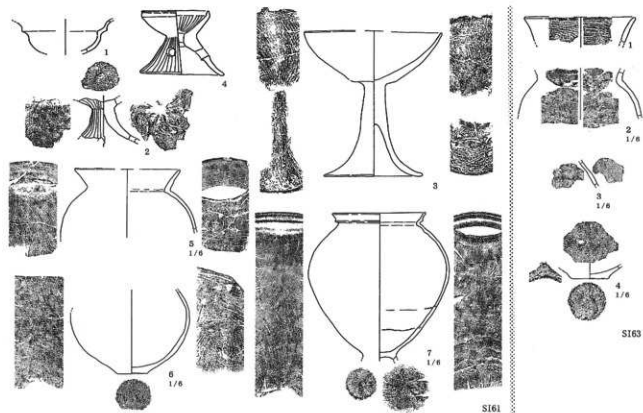


SI59

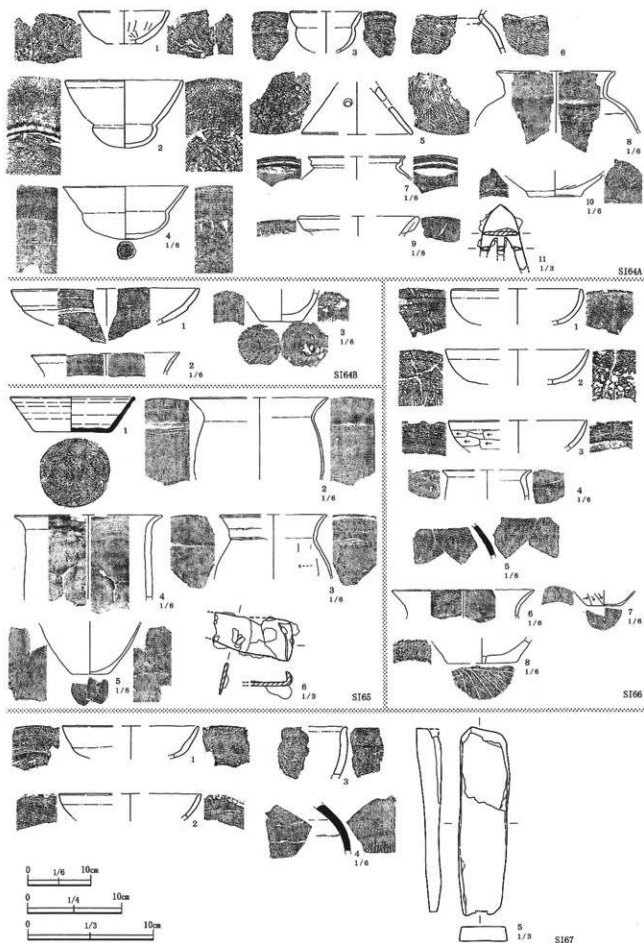


SI60

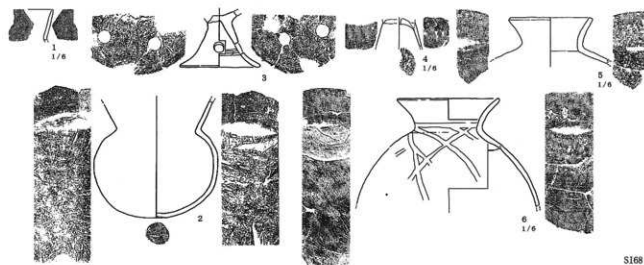
第138图 第58~60号整穴住居跡出土遺物



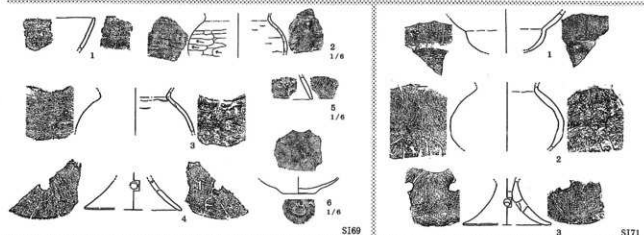
第 139 圖 第 61 ~ 63 号竈穴住居跡出土遺物



第 140 图 第 64A ~ 67 号竖穴住居跡出土遺物



SI68

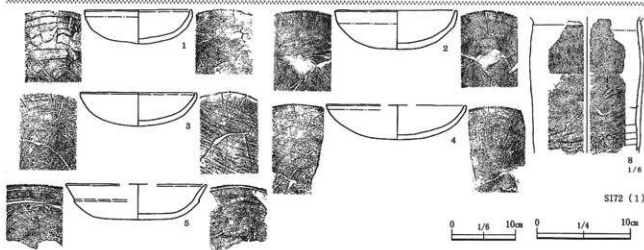


SI69

SI71

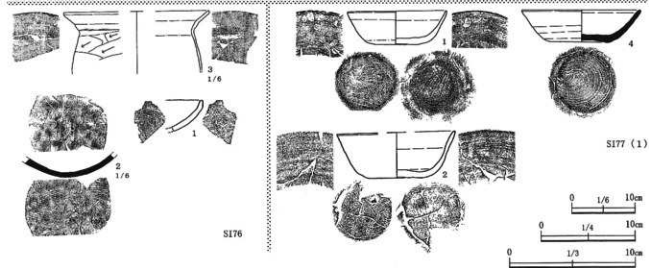
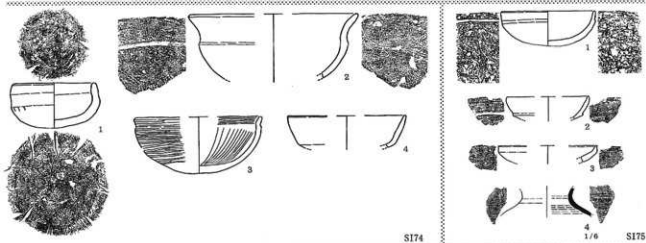
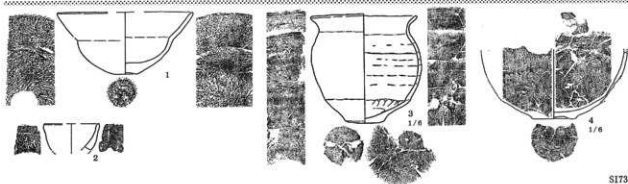
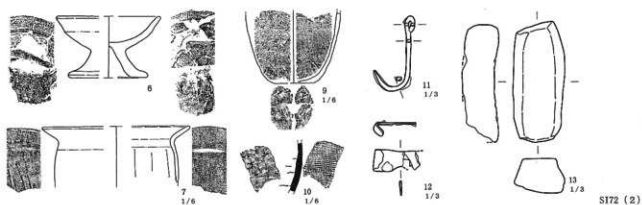


SI70

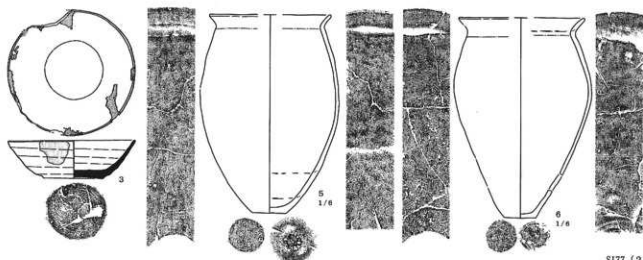


SI72 (1)

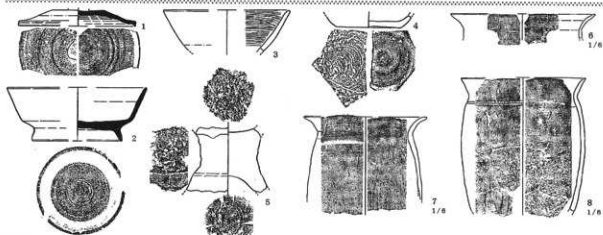
第141圖 第68～72(1)号竖穴住居跡出土遺物



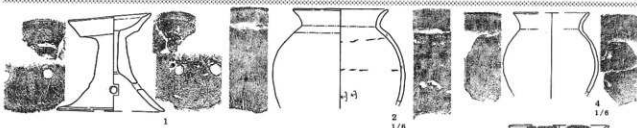
第 142 図 第 72 (2) ~ 77 (1) 号竪穴住居跡出土遺物



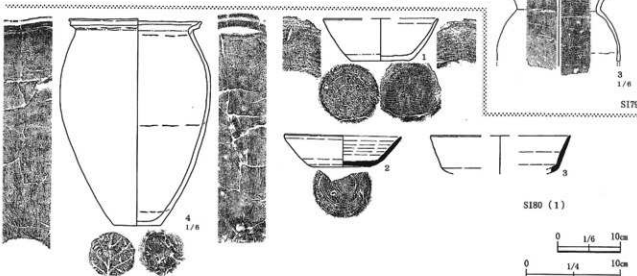
SI77 (2)



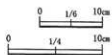
SI78



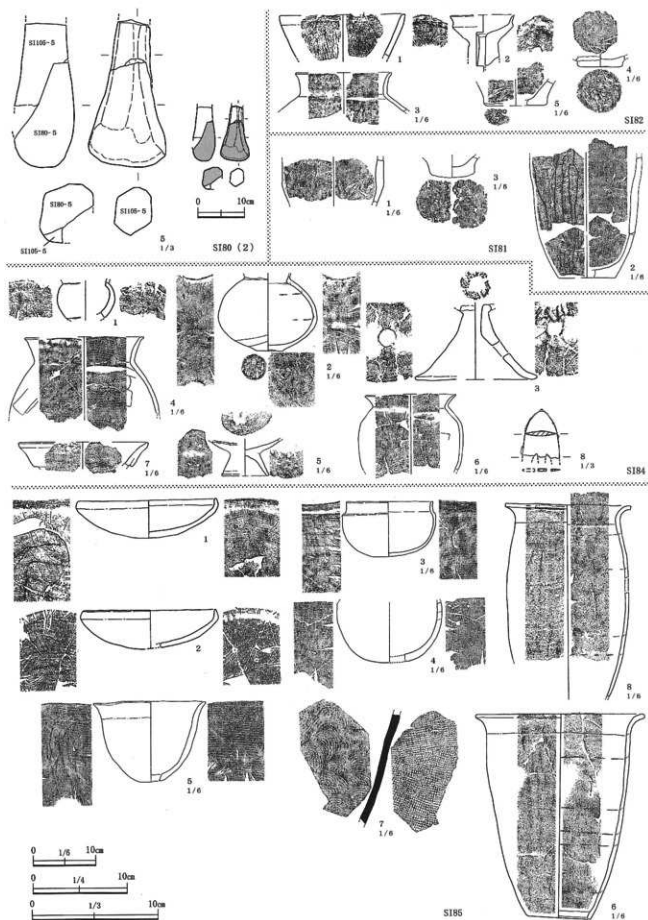
SI79



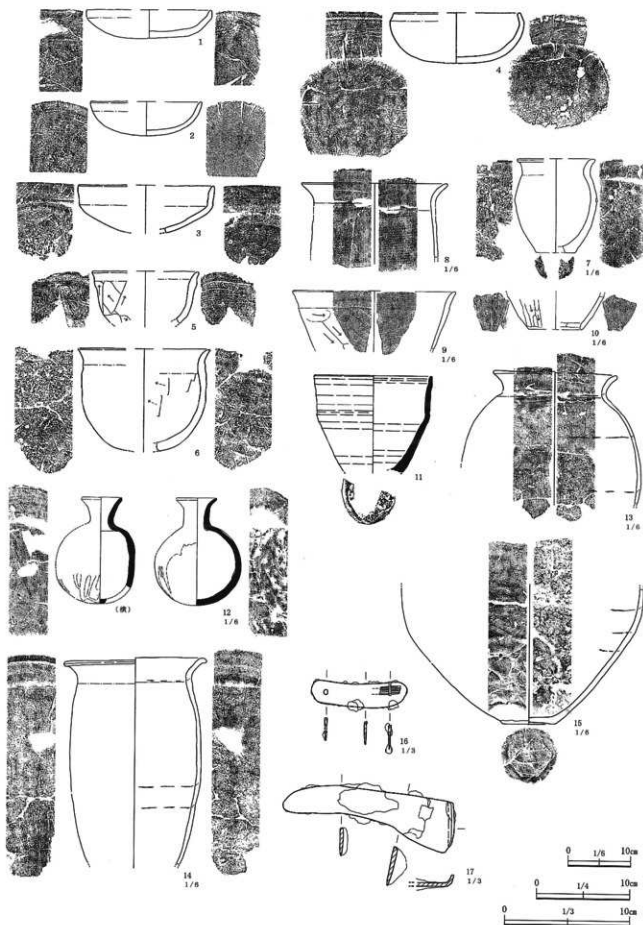
SI80 (1)



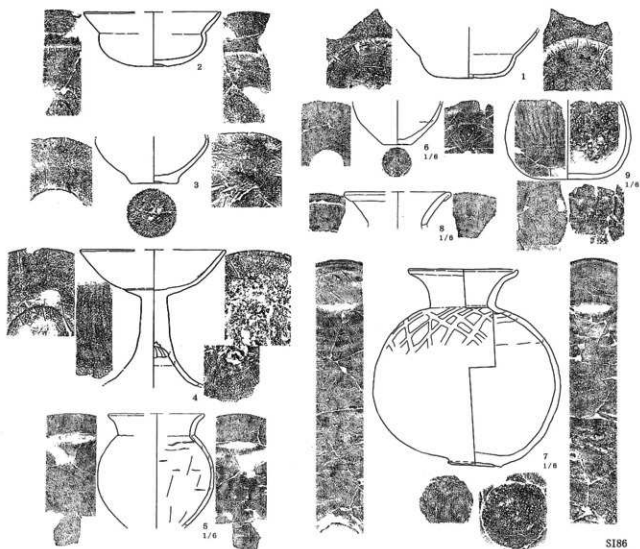
第143图 第77(2)~80(1)号竖穴住居跡出土遺物



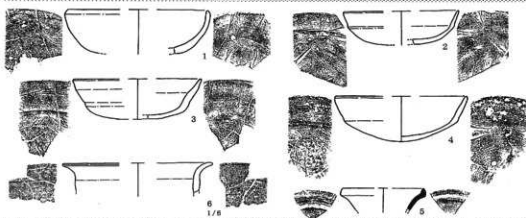
第 144 図 第 80 (2) ~ 82・84・85 号竪穴住居跡出土遺物



第 145 图 第 83 号竖穴住居跡出土土遺物



SI86



SI87



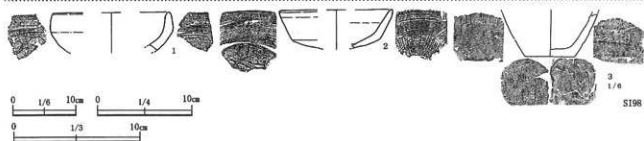
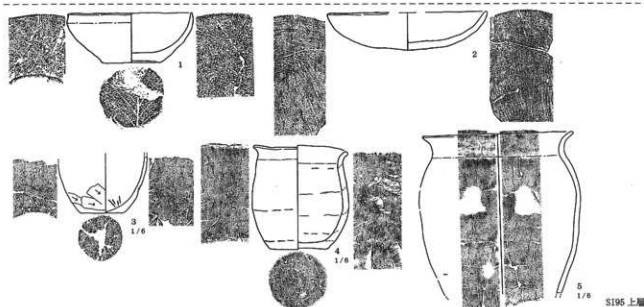
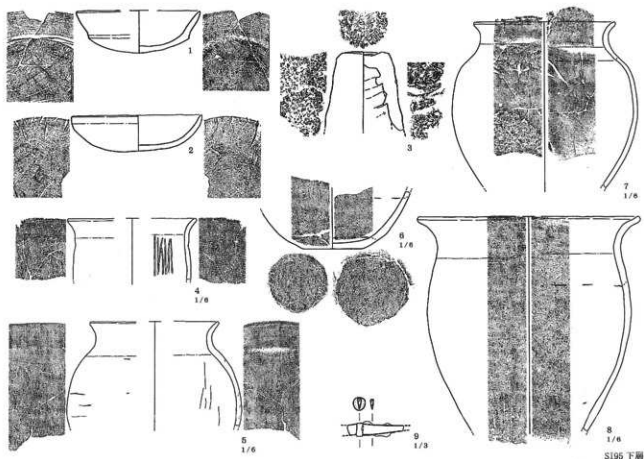
SI88



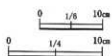
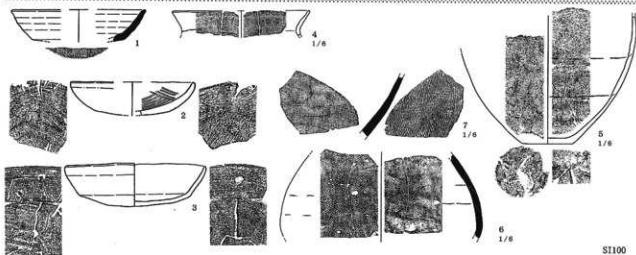
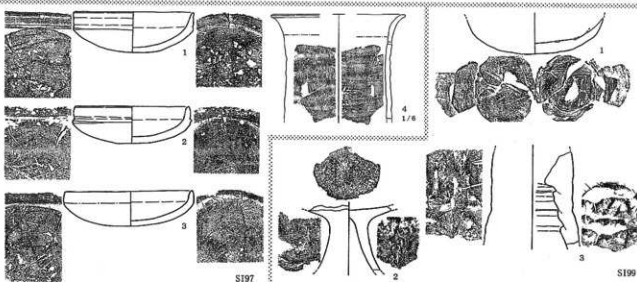
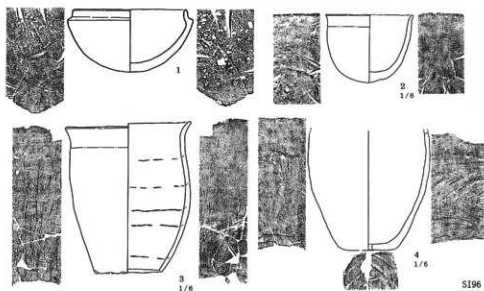
第146图 第86~88号竖穴住居跡出土遺物



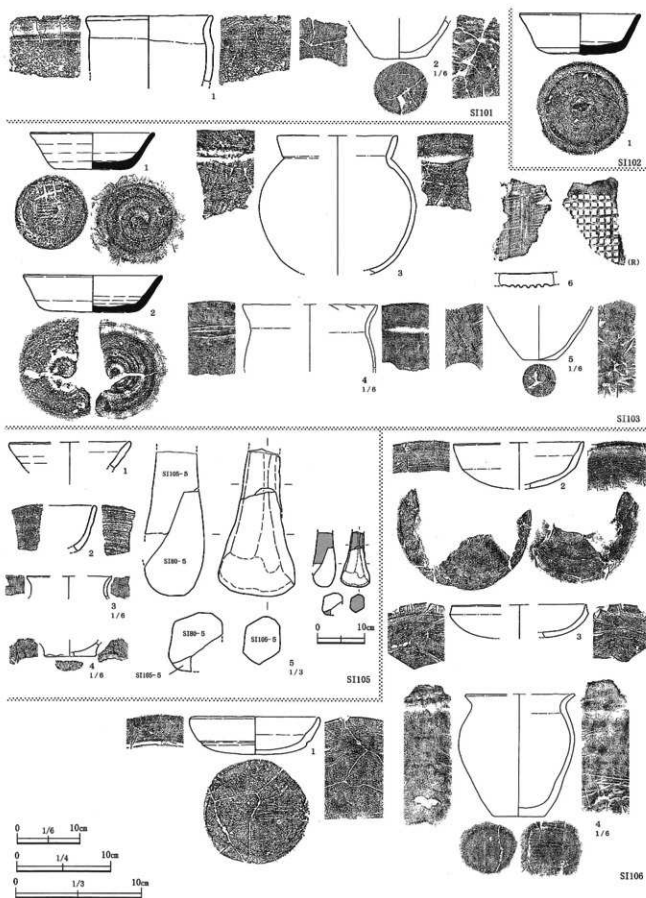
第 147 图 第 89 ~ 92 · 94 号竖穴住居跡出土遺物



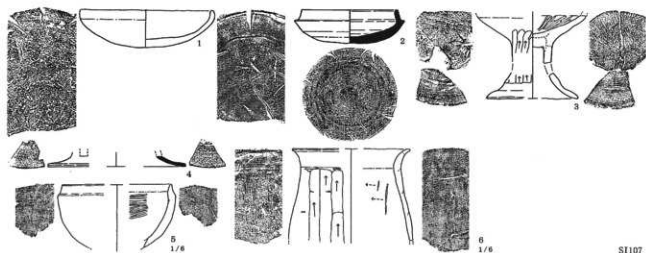
第 148 图 第 95・98 号竖穴住居跡出土文物



第149图 第96·97·99·100号竖穴住居跡出土遺物



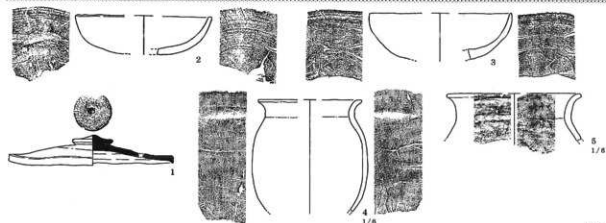
第150图 第101~103·105·106号竖穴住居跡出土遺物



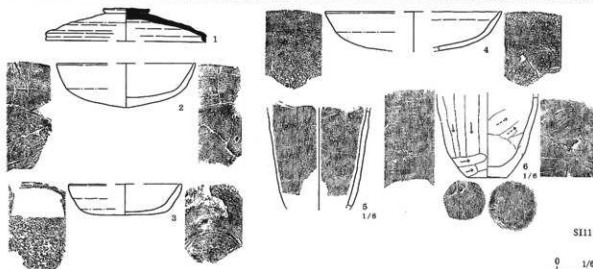
SI107



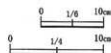
SI108



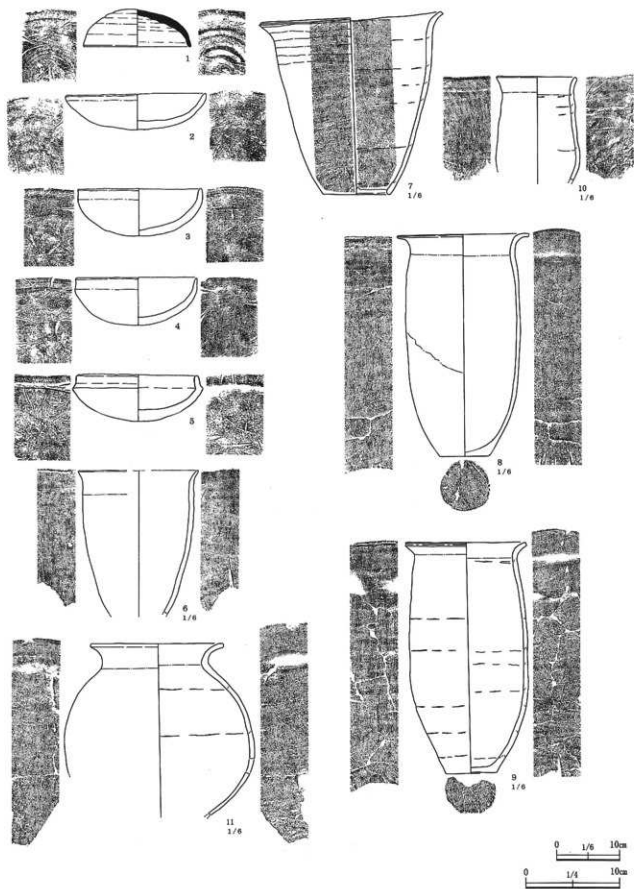
SI110



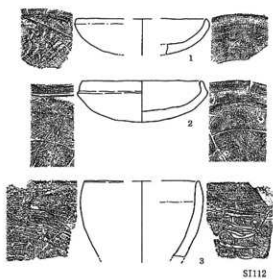
SI111



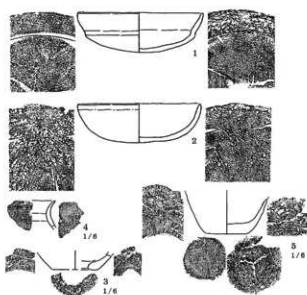
第 151 图 第 107・108・110・111 号竖穴住居跡出土遺物



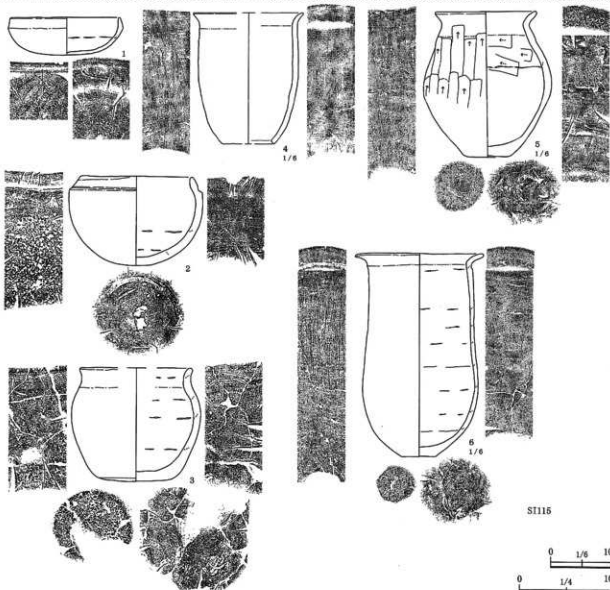
第 152 图 第 109 号竖穴住居跡出土遺物



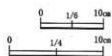
ST112



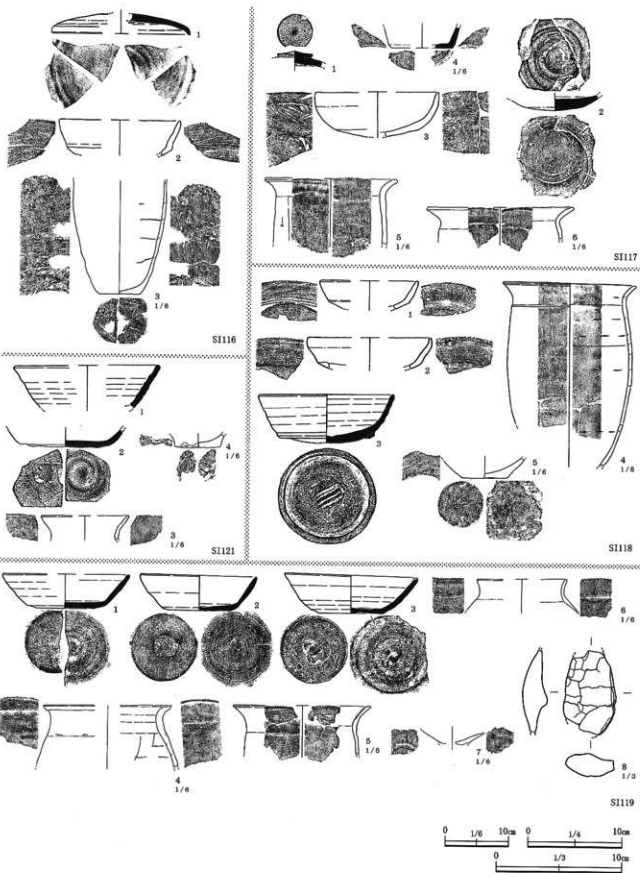
ST114



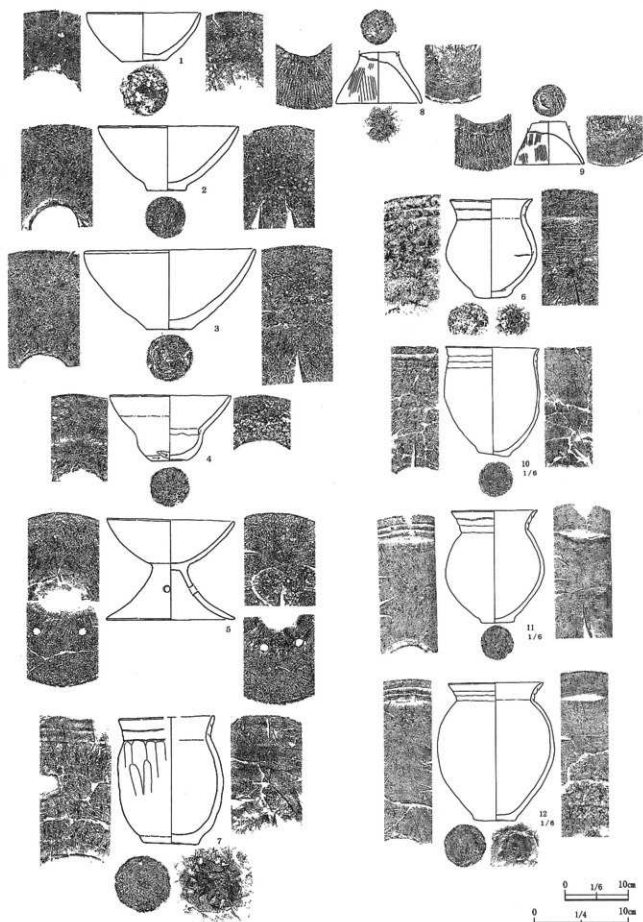
ST115



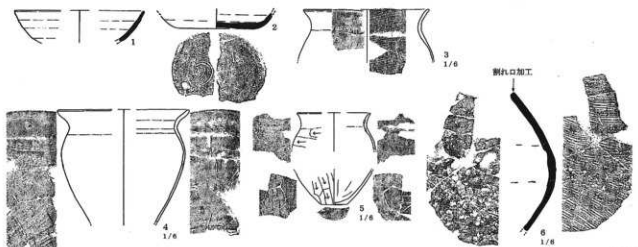
第153図 第112・114・115号竪穴住居跡出土遺物



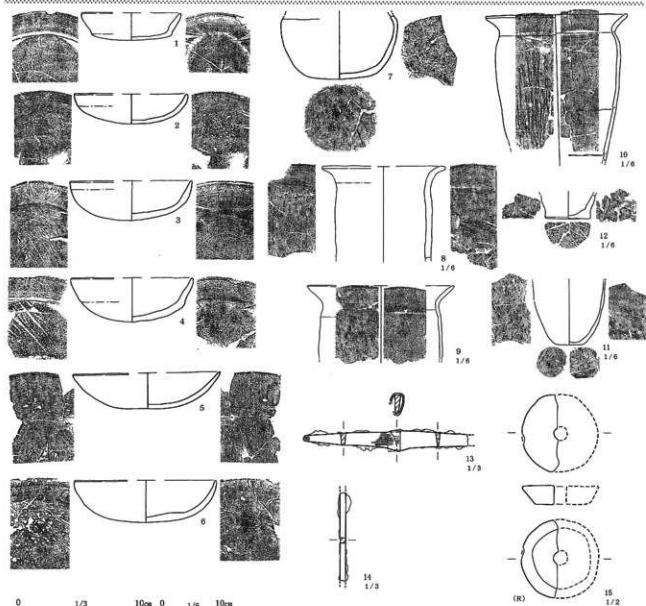
第 154 图 第 116 ~ 119・121 号竖穴住居跡出土遺物



第 155 圖 第 120 号堅穴住居跡出土遺物



SI123



SI124

第 156 図 第 123・124 号竪穴住居跡出土遺物



第157図 第125号竪穴住居跡出土遺物

第2節 掘立柱建物跡・櫓跡

今次調査では、計36棟の掘立柱建物跡が確認された。第4号掘立柱建物跡を除き遺物の出土がなかったことから、個々の所属時期は明確に難しいが、所在位置や遺構の状況から、古代から中世にわたるものと推察される。第15・16・33号掘立柱建物跡は欠乏。

第1号掘立柱建物跡（第158・210図、図版16）

遺構 9G・9H・10G・10Hグリッドに位置する。規模・形状は1×2間の北東・南西棟で、側柱式と思われたが、ロの列とへの列に柱間方が確認され、変則的な総柱式。棟方位はN-5° 30' -Eを示す。桁行は北西辺が4.2m、柱間は南西より2.2m+2.0m、南東辺が4.1m、柱間は南西より2.2m+1.9mでともに不均等。梁行は北東辺、南西辺ともに3.2m。柱間方は径30～80cmの円形もしくは楕円形で、現存の深さは20～40cm、それぞれの底面に掘り直しの痕跡が認められ、同位置での建て替えがあったと考えられる。遺物の出土はなかった。

第2号掘立柱建物跡（第159・210図、図版17）

遺構 9E・9Fグリッドに位置する。北東隅が第3号土坑と重複し、これを切る。規模・形状は1×2間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-8° 30' -Wを示す。桁行は西辺が4.0m、柱間は北より2.1m+1.9mと不均等、東辺が4.2m、柱間は北より2.1m+2.1mの間隔。梁行は北辺、南辺ともに2.1m。柱間方は径50～80cmの円形で、現存の深さは40～50cm、底面が段壁りのものが目立つ。遺物の出土はなかった。

第3A号掘立柱建物跡（第160・210図、図版17）

遺構 9Gグリッドに位置する。南西隅が第2号墳と重複し、これを切っていた（第3節参照）。北西隅で第3B号掘立柱建物跡の柱間方と接するが、新・旧関係は不明である。規模・形状は1×1間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-30° -Wを示す。桁行は北辺、南辺ともに3.7m。梁行は西辺、東辺ともに3.5m。柱間方は径30～40cmの不整形円形もしくは長方形で、現存の深さは20～30cm、底面は平坦。遺物の出土はなかった。

第3B号掘立柱建物跡（第160・210図、図版17）

遺構 9Gグリッドに位置する。北西隅が第3A号掘立柱建物跡の柱間方と接するが、新・旧関係は判然としない。規模・形状は1×1間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-3° -Eを示す。桁行は西辺が2.2m、東辺が2.4mと変則的。梁行は北辺、南辺ともに2.0m。柱間方は径40～70cmの楕円形で、現存の深さは20～25cm。遺物の出土はなかった。

第4号掘立柱建物跡（第161・190・211図、図版17）

遺構 24S・24T・25S・25Tグリッドに位置する。規模・形状は2×2～3間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-58° -Wを示す。桁行は北辺、南辺ともに5.9m、北辺の柱間は西より3.3m+2.6m、南辺の柱間は西より1.9m+2.2m+1.8mと変則的でともに不均等。梁行は西辺が4.2m、柱間は北より2.2m+2.0mで不均等、東辺が4.1m、柱間は北より2.1m+2.0mのほぼ等間隔。柱間方は径30～70cmの円形で、現存の深さは20～90cmと差が大きい。柱間方の現存の深さは平均60cmであるが、南辺の2基（ロ3・ニ3）は20～30cmと浅く、他とは異なる性格と推察される。桁行の柱間が異なるのは、南辺に出入口を設けたことによるものと推察され、浅い2基の柱間方はこれに関連すると考えられる。本跡の遺構確認作業中、須恵器の長頭版（1）が出土した。

遺物 須恵器の長頭版（1）を図示した。口縁部と肩部を欠損し、推定高20cm強で、底径6cmと小振りである。底部糸切り後付高台。

第5号掘立柱建物跡（第162・211図、図版17）

遺構 26T・26Uグリッドに位置する。規模・形状は2～3×3間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-1° 30' -Eを示す。桁行は西辺、東辺ともに6.6m、柱間は北より2.2m+2.2m+2.2mでともに等間隔。梁行は北辺、南辺ともに4.3m、北辺の柱間は西より2.2m+2.1mのほぼ等間隔、南辺の柱間は西より1.8m+0.9m+1.6mと変則的で不均等。また、南側に確認された4の柱間方は、間仕切もしくは束柱の可能性をもつ。柱間方は径25～40cmの円形で、現存の深さは20～80cm、南辺のロ5・ニ5の柱間方を除くと、深さは平均60cmで、この2基の柱は明ら

かに他とは異なる用途・性格のものであったと推察される。遺物の出土はなかった。

第6号掘立柱建物跡 (第163・211図、図版17)

遺構 26U・27Uグリッドに位置する。規模・形状は2×3間の南北棟で、総柱式。棟方位はN-7°30'-Eを示す。桁行は東辺が長く、西辺が短くなっており、北辺が著しく変形する。東辺が7.6m、柱間は北より3.4m+?+?、西辺が6.8m、柱間は北より2.4m+2.2m+2.2mと西辺は不均等。ロ3・ハ3の柱間方は、確認調査時のトレンチで削平されてしまった可能性が高く、イ列南寄り柱間2.2mに近いものと推察される。梁行は北辺が4.6m、柱間は西より2.5m+2.1mの不均等、南辺が4.5m、柱間は西より2.2m+2.3mとほぼ等間隔。柱間方は径30～40cmの円形もしくは楕円形で、現存の深さは40～60cm程で平均50cmである。遺物の出土はなかった。

第7号掘立柱建物跡 (第164・210図、図版17)

遺構 14M・14Nグリッドに位置する。規模・形状は2×2～3間の南北棟で、総柱式。棟方位はN-8°-Eを示す。桁行は西辺、東辺ともに4.0m、西辺の柱間は北より2.0m+2.0mの等間隔、東辺の柱間は北より1.6m+1.0m+1.4mと不均等。梁行は北辺が3.4m、柱間は西より1.6m+1.8mの不均等、南辺が3.5m、柱間は西より1.8m+1.7mとほぼ等間隔。柱間方は径40～70cmの円形もしくは楕円形で、現存の深さは40～80cmで平均60cmである。ロ1～ロ3、ハ2の柱間方は掘り直しの痕跡が見られ、同位置での建て替えもしくは部分補修が行われたと考えられる。また、西辺と東辺での柱間の違いは、東辺に出入口が設けられた結果と推測される。遺物の出土はなかった。

第8号掘立柱建物跡 (第165・211図、図版17)

遺構 32Jグリッドに位置する。位置的には第8B号掘立柱建物跡と重複しているが、柱間方などの直接的な重複はなく、新・旧関係は不明である。規模・形状は1×1間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-81°-Eを示す。桁行は北辺が2.5m、南辺が2.6m。梁行は西辺、東辺ともに2.1m。柱間方は径30～50cmの円形で、現存の深さは30～50cm。遺物の出土はなかった。

第8B号掘立柱建物跡 (第165・211図、図版17)

遺構 32Jグリッドに位置する。前述の通り位置的には第8A号掘立柱建物跡と重複するが、新・旧関係は明確にし難い。規模・形状は1×1間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-10°-Wを示す。桁行は西辺が2.1m、東辺が2.6mと変則的。梁行は北辺が1.8m、南辺が1.9m。台形に近い平面である。柱間方は径40～50cmの円形で、現存の深さは20～30cm。平面形が整い、柱間方がやや深い第8A号跡から本跡に建て替えた可能性が考えられる。遺物の出土はなかった。

第9号掘立柱建物跡 (第166・211図、図版17)

遺構 32Kグリッドに位置する。位置的には内側の中央やや西寄りに第10号掘立柱建物跡、内側の東寄りに第24号土坑と重複するが、柱間方などの直接的な重複はなく、新・旧関係は明確にし難い(第4節参照)。規模・形状は1×3間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-71°-Wを示す。桁行は北辺、南辺ともに6.1m、柱間は西より2.1m+2.0m+2.0mでともにほぼ等間隔。梁行は西辺、東辺ともに3.6m。柱間方は径30～40cmの円形で、現存の深さは30～70cmで平均50cmである。遺物の出土はなかった。

第10号掘立柱建物跡 (第166・211図、図版17)

遺構 32Kグリッドに位置する。位置的には第9号掘立柱建物跡と重複するが、直接的な重複はなく、新・旧関係は不明である。規模・形状は1×1間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-84°-Wを示す。桁行は北辺、南辺ともに2.0m。梁行は西辺、東辺ともに1.8m。柱間方は径25～35cmの円形で、現存の深さは70cmといずれも深い。建物の規模の割には深く掘りこんでいた。遺物の出土はなかった。

第11号掘立柱建物跡 (第168・211図)

遺構 33L・34K・34Lグリッドに位置する。南側で第29号土坑と重複するが、直接的な重複はないものの、遺構の形状などから土坑が新しいと考えられる(第4節参照)。規模・形状は1×2間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-66°-Wを示す。桁行は北辺が5.2m、柱間は西より2.5m+2.7m、南辺が5.0m、柱間は西より2.7m+2.3mでともに不均等。梁行は西辺、東辺ともに3.3m。柱間方は径30～50cmの円形で、現存の深さは30～50cm。遺物の出土はなかった。

第12号掘立柱建物跡 (第169・211図、図版17)

遺構 29M・29N・30M・30Nグリッドに位置する。北東部が第1号円形周溝遺構と重複し、これを切っていた(第7節参照)。また、南東部に確認調査時のトレンチがありロ3が失われていた。規模・形状は2×2間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-77°30'-Wを示す。桁行は北辺、南辺ともに3.9m、北辺の柱間は西より1.9m+2.0mのほぼ等間隔、南辺の柱間は不明。梁行は西辺が3.2m、柱間は北より1.7m+1.5mで不均等、東辺が3.3m、柱間は北より1.7m+1.6mのほぼ等間隔。柱間方は径25～45cmの円形で、現存の深さは25～40cm。遺物の出土はなかった。

第13号独立柱建物跡 (第167・211図、図版17)

遺構 32N・32Oグリッドに位置する。規模・形状は1×1間の北西・南東棟で、側柱式。棟方位はN-44°-Wを示す。桁行は北東辺が2.4m、南西辺が2.3m、梁行は南東辺、北西辺ともに1.7m。柱間方は径35～40cmの円形で、現存の深さは0.7～1.0mと建物規模の割には深く掘りしていた。遺物の出土はなかった。

第14号独立柱建物跡 (第170・211図)

遺構 31I・31J・32I・32Jグリッドに位置する。規模・形状は1×1間の北西・南東棟で、側柱式。棟方位はN-48°30'-Wを示す。桁行は北東辺、南西辺ともに2.6m。梁行は南東辺、北西辺ともに1.2m。平面形は平行四辺形。柱間方は径30～40cmの円形で、現存の深さは40～45cm。遺物の出土はなかった。

第17号独立柱建物跡 (第171・211図)

遺構 26S・27S・27Tグリッドに位置する。規模・形状は1×1間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-30°30'～31°30'-Eを示す。北辺の2基の柱間方1×1は掘り直しが見られ、僅かに北に拡張していた。拡張後のA期の桁行は西辺、東辺ともに2.8m。梁行は北辺が2.35m、南辺が2.5m、拡張前のB期の桁行は西辺、東辺ともに2.6m。梁行の北辺は2.3m、南辺はA期と同じ2.5m。柱間方は径40～45cmのほぼ円形で、現存の深さは30～65cmと建物の割には深く掘りしている。遺物の出土はなかった。

第18号独立柱建物跡 (第172・210図)

遺構 15M・15Nグリッドに位置する。東辺、南辺が第3号竪穴住居跡と重複し、これを切っていたと思われるが、本跡の存在に気付かず第33号跡の覆土の掘削を行った為、柱間方は失われてしまった(第1節参照)。規模・形状は遺存部分から2×3間の南北棟で、側柱式と推定される。棟方位はN-1°-Eを示す。桁行は西辺が6.0m、柱間は北より1.8m+2.3m+1.9mと不均等で中央が広い。梁行は北辺が4.5m、柱間は西より2.2m+2.3mのほぼ等間隔。柱間方は径20～30cmの円形で、現存の深さは20～50cmとバラツキがあり、平均45cmである。遺物の出土はなかった。

第19号独立柱建物跡 (第173・210図)

遺構 15Mグリッドに位置する。規模・形状は2×2間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-0°30'-Eを示す。また、確認された計8基の柱間方のうち1・1・2を除く6基は掘り直しの痕跡が認められ、ほぼ同位置・規模の建て替えが行われたと考えられる。建て替えは西辺がそのままで、北・東・南の三方へ僅かに拡張されていた。拡張後のA期の桁行は北辺、南辺ともに3.7m、柱間は西より1.8m+1.9mでともにほぼ等間隔。梁行は西辺が3.4m、柱間は北より1.6m+1.8mで不均等、東辺が3.7m、柱間は北より1.8m+1.9mのほぼ等間隔。柱間方は径30～50cmの円形で、現存の深さは40～70cmで平均50cmである。拡張前のB期の桁行は北辺が3.5m、柱間は西より1.7m+1.8mのほぼ等間隔。南が3.7m、柱間は西より1.8m+1.9mのほぼ等間隔。梁行は西辺が3.2m、柱間は北より1.6m+1.6mの等間隔、東辺が3.6m、柱間は北より1.8m+1.8mの等間隔。柱間方は径20～50cmの円形、現存の深さは36～70cmとバラツキがある。遺物の出土はなかった。

第20号独立柱建物跡 (第174・212図、図版17)

遺構 35V・35W・36V・36Wグリッドに位置する。北辺が第37号土坑、東辺が第38・39号土坑、西辺が第33号溝跡と重複し、第37号土坑との関係は判然としないが、他はそれぞれ本跡より新しい(第4・8節参照)。規模・形状は2×3間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-1°-Wを示す。柱間方1・2とへ2の中間に確認されたロ2は部分的間仕切りもしくは床束の可能性ある。桁行は西辺が7.1m、柱間は北より2.2m+2.4m+2.5m、東辺が7.3m、柱間は北より2.3m+2.6m+2.4mでともに不均等。梁行は北辺が4.6m、柱間は西より2.2m+2.4mで不均等、南辺が4.4m、柱間は西より2.2m+2.2mの等間隔。柱間方は径30～60cmの円形で、現存の深さは45～80cmとバラツキがある。遺物の出土はなかった。

第21号独立柱建物跡 (第175・212図、図版17)

遺構 37U・38Uグリッドに位置する。南側が第31・32号溝跡と重複し、これらに切られていた(第8節参照)。北半部で位置的に第22号独立柱建物跡、第44・45号土坑と重複するものの、柱間方などの直接的な重複はなく、新・旧関係は明確にしない(第4節参照)。規模・形状は2×2間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-2°-Wを示す。桁行は西辺が5.3m、柱間は北より2.4m+2.9m、東辺が5.2m、柱間は北より2.5m+2.7mでともに不均等。梁行は北辺、南辺ともに5.1m、北辺の柱間は西より2.5m+2.6mのほぼ等間隔、南辺の柱間は不明。柱間方は径30～50cmの円形で、現存の深さは20～40cm。遺物の出土はなかった。

第22号独立柱建物跡 (第175・212図、図版17)

遺構 38Uグリッドに位置する。前述の通り南西部が第21号独立柱建物跡と位置的には重複するものの、直接的な重複関係はなく、新・旧関

係は明確にしない。また、西辺中程で第45号土坑と重複し、柱間方12が切られていた（第4節参照）。規模・形状は2×2間の南北棟で、総柱式。棟方位はN-7°-Wを示す。桁行は西辺が4.9m、柱間は北より2.5m+2.4m、東辺が4.7m、柱間は北より2.4m+2.3mでともにほぼ等間隔。梁行は北辺が4.2m、柱間は西より1.8m+2.4m、南辺が4.1m、柱間は西より1.8m+2.3mでともに不均等。柱間方は径25～35cmの円形で、現存の深さは10～50cmとバラツキがあるが、四隅は40～50cmで確りしている。遺物の出土はなかった。

第23号掘立柱建物跡（第176・212図、図版17）

遺構 38Wグリッドに位置する。北西隅が第36A号溝跡、中央部が第33号溝跡、南東隅が第35号溝跡と重複し、これらに切られていた（第8節参照）。規模・形状は2×2間の南北棟で、側柱式と思われるが、東柱となる口2に相当する部分が第33号溝跡に切られており、総柱式の可能性も全く否めない。棟方位はN-6°-Eを示す。桁行は西辺が4.5m、柱間は北より2.3m+2.2mでほぼ等間隔。東辺が4.6m、柱間は北より2.3m+2.3mで等間隔。梁行は北辺、南辺ともに3.2m、柱間は西より1.6m+1.6mでともに等間隔。柱間方は径30～40cmの円形で、現存の深さは40～80cmとバラツキがある。遺物の出土はなかった。

第24号掘立柱建物跡（第177・212図、図版17）

遺構 40X・41Xグリッドに位置する。位置的に北西隅が第35号溝跡と重複するが、直接的な重複関係はなく、新・旧関係は明確にしないものの、近隣の他の遺構の事例から、本跡が古いと考えられる（第8節参照）。規模・形状は1～2×4間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-14°-Eを示す。桁行は西辺が9.2m、柱間は北より2.1m+2.3m+2.4m+2.4m、東辺が9.5m、柱間は北より2.2m+2.2m+2.8m+2.3mでともに不均等である。梁行は北辺、南辺ともに2.9m、南辺の柱間は西より1.5m+1.4mでほぼ等間隔。北辺は妻柱が確認されなかった。柱間方は径25～40cmの円形で、現存の深さは20～60cmとバラツキがある。遺物の出土はなかった。

第25号掘立柱建物跡（第178・212図、図版17）

遺構 39X・40Xグリッドに位置する。北側が第35号溝跡と重複し、これに切られていた（第8節参照）。また、斜面地に立地する為、南東隅の柱間方3は確認されなかった。規模・形状は1×3間の東西棟で、側柱式と思われるが、ハ2の存在から総柱式もしくは部分的な床張りの可能性も否めない。棟方位はN-8°30'-Wを示す。桁行は北辺、南辺ともに5.8m、北辺の柱間は西より2.3m+2.2m+2.3mでほぼ等間隔。南辺の柱間は西より2.2m+2.4m+2.2mで不均等。梁行は西辺、東辺ともに3.1m。柱間方は径18～60cmの円形で、現存の深さは30～60cmとバラツキがある。遺物の出土はなかった。

第26号掘立柱建物跡（第179・212図、図版17）

遺構 38Q・39Qグリッドに位置する。位置的に東側で第55号土坑と重複するが、直接的な重複関係はなく、新・旧関係は明確にしない（第4節参照）。規模・形状は2×2間の南北棟で、総柱式。棟方位はN-9°-Wを示す。桁行は西辺が4.9m、柱間は北より2.3m+2.6mと不均等、東辺が4.8m、柱間は北より2.4m+2.4mで等間隔。梁行は北辺が4.8m、柱間は西より2.5m+2.3mでやや不均等、南辺が4.9m、柱間は西より2.4m+2.5mでほぼ等間隔。柱間方は径40～50cmの円形で、現存の深さは20～50cm、東柱の口2以外は平均40cm。遺物の出土はなかった。

第27号掘立柱建物跡（第180・212図、図版17）

遺構 39Q・40Qグリッドに位置する。位置的には中央や東寄りでは農業関係の溝跡の掘り込み及び第58号土坑と重複するが、直接的な重複関係はなく、新・旧関係は明確にしない（第4節参照）。規模・形状は1×3間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-72°-Wを示す。桁行は北辺、南辺ともに7.2m、北辺の柱間は西より2.4m+4.8m、南辺の柱間は西より2.4m+2.5m+2.3mで不均等。北辺のハ1は農業関係の掘り込みで切られたものと推察される。梁行は西辺が4.2m、東辺が4.1m。柱間方は径20～50cmの円形もしくは楕円形で、現存の深さは20～60cmとバラツキがある。また、北東隅のハ1、北西隅のハ1の柱間方は掘り直しが見られ、部分的な補修が行われたものと推察される。遺物の出土はなかった。

第28号掘立柱建物跡（第182・212図）

遺構 39Q・39Rグリッドに位置する。位置的に西端部で第56・57号土坑、北西部で第69号土坑と重複し、これらより古いと推察される（第4節参照）。規模・形状は1×3間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-64°-Wを示す。桁行は北辺が7.2m、柱間は西より2.6m+2.3m+2.3m、南辺が6.7m、柱間は西より2.2m+2.9m+1.6mでともに不均等。梁行は西辺が3.5m、東辺が3.2m。柱間方は径20～40cmの円形で、現存の深さは20～30cm。遺物の出土はなかった。

第29号掘立柱建物跡（第183・212図、図版18）

遺構 41Rグリッドに位置する。北西隅から南東隅にかけて第78号土坑と重複し、これに切られていた（第4節参照）。規模・形状は1×2間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-18°-Wを示す。桁行は西辺が4.0m、柱間は北より1.9m+2.1m、東辺が4.1m、柱間は北より1.9m+2.2mでともに不均等。梁行は北辺、南辺ともに3.1m。柱間方は径30～50cmの円形で、現存の深さは20～35cm。遺物の出土はなかった。

第30号独立柱建物跡 (第181・212図、図版18)

遺構 41Q・42Qグリッドに位置する。位置的には西半部から南辺中程にかけて第62・64～66・75号土坑が重複している。直接的に重複するのは第66号土坑のみで、本跡を切っているが、他の土坑との新・旧関係は不明である(第4節参照)。規模・形状は1～2×2間の北西・南東棟で、側柱式。棟方位はN-53°-Eを示す。桁行は北辺が4.7m、柱間は南西より2.0m+2.7m、南東辺が4.9m、柱間は南西より2.1m+2.8mでともに不均等。梁行は北東辺が4.5m、柱間は北西より2.1m+2.4mで不均等、南西辺が4.1m、南西辺の裏柱は確認されなかったが第62・64号土坑との重複部分にあった可能性も否めない。柱掘方は径30～40cmの円形で、現存の深さは20～40cm。四隅に比べ妻柱はやや浅い。遺物の出土はなかった。

第31号独立柱建物跡 (第186・212図、図版18)

遺構 41S・41T・42S・42Tグリッドに位置する。位置的には東辺が第79号土坑と重複するが、直接的な重複関係はなく、新・旧関係は明確にしない(第4節参照)。規模・形状は2×2間の東西棟で、総柱式。棟方位はN-74°30'-Eを示す。桁行は北辺が5.1m、柱間は西より2.5m+2.6mとほぼ等間隔、南辺が5.0m、柱間は西より2.5m+2.5mの等間隔。梁行は西辺が3.5m、柱間は北より1.7m+1.8m、東辺が3.7m、柱間は北より1.8m+1.9mでともにほぼ等間隔。柱掘方は径30～40cmの円形もしくは楕円形で、現存の深さは20～40cm。遺物の出土はなかった。

第32号独立柱建物跡 (第184・212図、図版18)

遺構 40Q・41Q・41Rグリッドに位置する。位置的には西辺が第70・71号土坑と重複するが、直接的な重複関係はなく、新・旧関係は明確にしない(第4節参照)。規模・形状は1×2間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-24°30'-Wを示す。桁行は西辺が4.2m、柱間は北より2.0m+2.2m、東辺が4.4m、柱間は北より2.0m+2.4mでともに不均等。梁行は北辺、南辺ともに2.5m。柱掘方は径35～40cmの円形で、現存の深さは20～40cm、北側が浅い。遺物の出土はなかった。

第34号独立柱建物跡 (第187・212図、図版18)

遺構 40S・41R・41Sグリッドに位置する。規模・形状は2×2間の南北棟で、側柱式。なお、イ2とハ2の中間よりイ2寄りに1基認められ、変則的な総柱式の可能性もある。棟方位はN-19°-Eを示す。桁行は西辺が4.7m、柱間は北より2.4m+2.3mでほぼ等間隔、東辺が4.6m、柱間は北より2.4m+2.2mで不均等。梁行は北辺が3.7m、柱間は西より1.8m+1.9mでほぼ等間隔、南辺が3.6m、柱間は西より1.8m+1.8mの等間隔。柱掘方は径20～45cmの円形で、現存の深さは20～35cm。遺物の出土はなかった。

第35号独立柱建物跡 (第188・212図、図版18)

遺構 42S・43Sグリッドに位置する。規模・形状は2×2間の南北棟で、側柱式。棟方位はN-9°30'-Wを示す。桁行は西辺が3.8m、柱間は北より1.8m+2.0m、東辺が3.6m、柱間は北より1.9m+1.7mでともに不均等。梁行は北辺が3.5m、柱間は西より1.8m+1.7mでほぼ等間隔、南辺が3.4m、柱間は西より2.1m+1.3mで不均等。柱掘方は径25～50cmの円形もしくは楕円形で、現存の深さは20～40cm。遺物の出土はなかった。

第36号独立柱建物跡 (第185・212図、図版18)

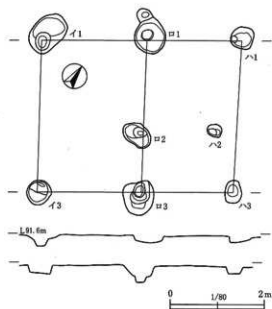
遺構 43Rグリッドに位置する。規模・形状は1×1間の東西棟で、側柱式。ほぼ同位置での建て替えが行われている。A期は棟方位がN-89°-Wを示す。桁行は北辺、南辺ともに2.8m。梁行は西辺、東辺ともに2.0m。柱掘方は径30～50cmの楕円形で、現存の深さは30～40cm。B期は棟方位がN-88°-Wを示す。桁行は北辺が2.5m、南辺が2.3m。梁行は西辺、東辺ともに1.7m。柱掘方は径40～50cmの楕円形で、現存の深さは20～25cm。A期からB期への建て替えと思われる。遺物の出土はなかった。

第37号独立柱建物跡 (第189・212図、図版18)

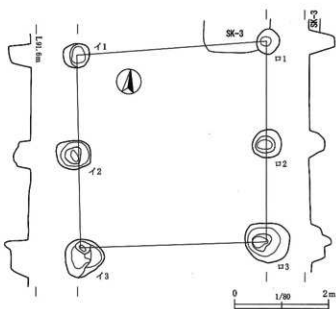
遺構 43Sグリッドに位置する。規模・形状は1×1間の東西棟で、側柱式。棟方位はN-74°-Wを示す。桁行は北辺、南辺ともに1.6m。梁行は西辺、東辺ともに1.4m。柱掘方は径20～30cmの円形で、現存の深さは20～30cm。遺物の出土はなかった。

第1号横跡 (第191・211図)

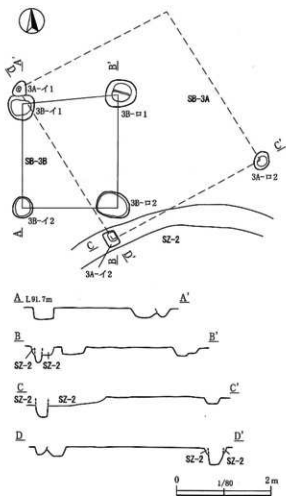
遺構 33K・33Lグリッドに位置する。第11号独立柱建物跡の南側約4mに確認された。本跡の軸線と第11号跡はともにN-66°-Wで平行する。規模・形状は長さ7.1m、柱間は3間で、西より2.3m+2.7m+2.1mと不均等である。柱掘方は径20～30cmの円形で、現存の深さは45～70cmである。位置的に第11号跡に関連する施設と思われるが、断定は難しい。遺物の出土はなかった。



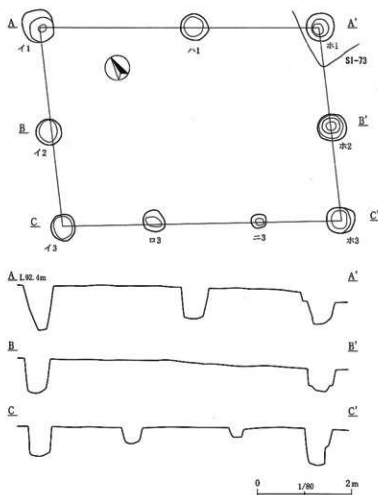
第158图 第1号掘立柱建物跡



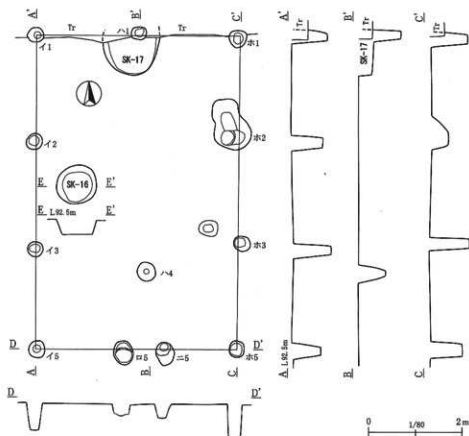
第159图 第2号掘立柱建物跡



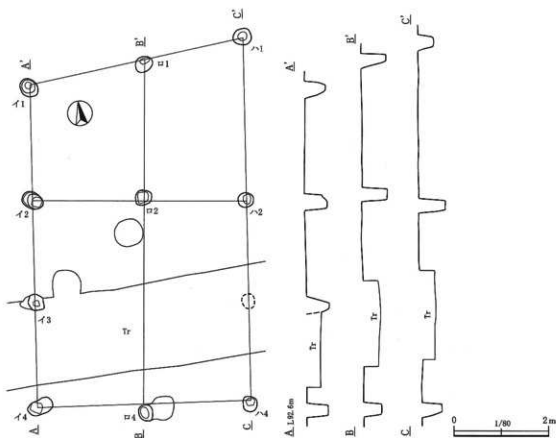
第160图 第3A・3B号掘立柱建物跡



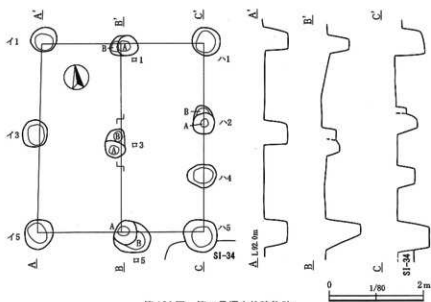
第161图 第4号掘立柱建物跡



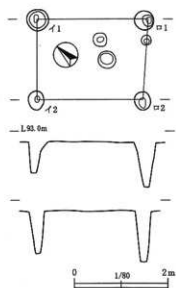
第162图 第5号掘立柱建物跡、第16・17号土坑



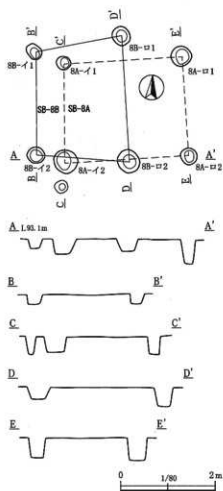
第163图 第6号掘立柱建物跡



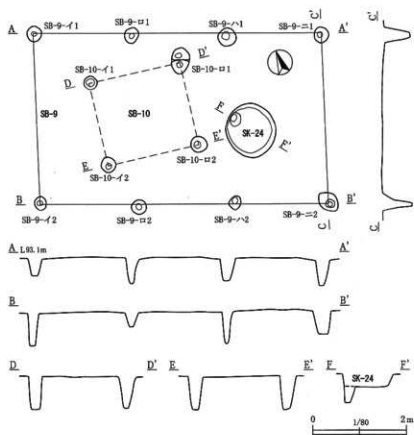
第164图 第7号掘立柱建物跡



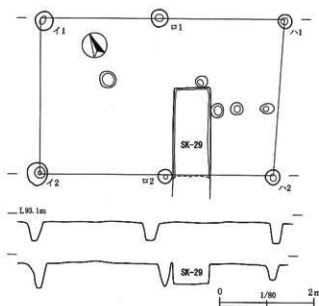
第167图 第13号掘立柱建物跡



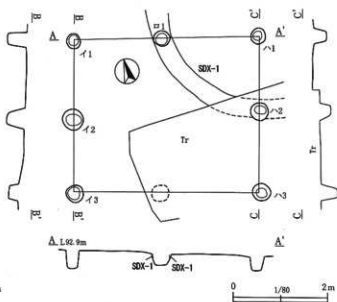
第165图 第8A・8B号掘立柱建物跡



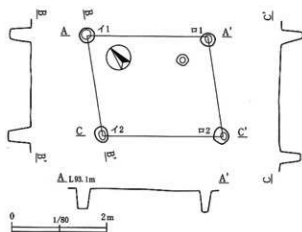
第166图 第9・10号掘立柱建物跡、第24号土坑



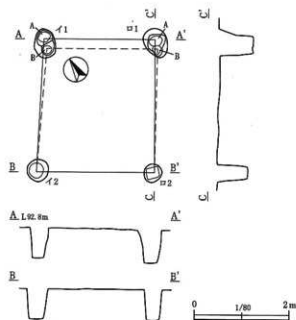
第 168 图 第 11 号掘立柱建物跡、第 29 号土坑



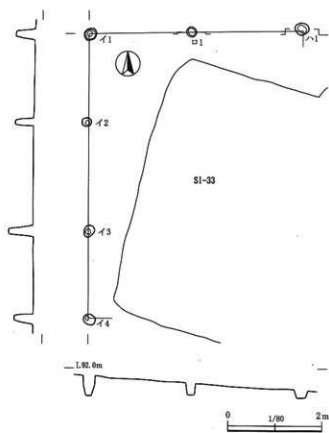
第 169 图 第 12 号掘立柱建物跡



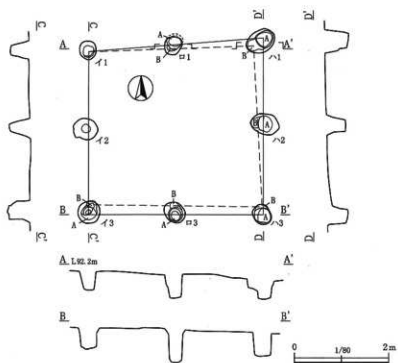
第 170 图 第 14 号掘立柱建物跡



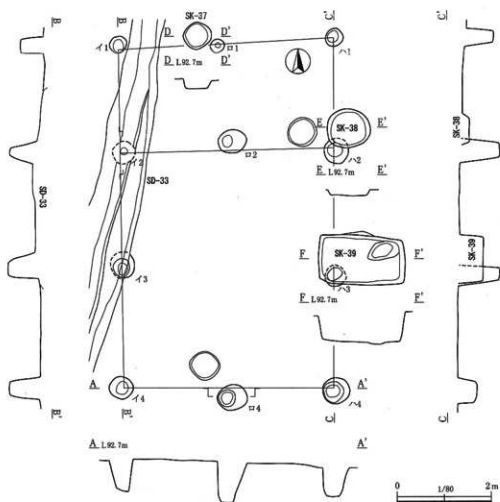
第 171 图 第 17 号掘立柱建物跡



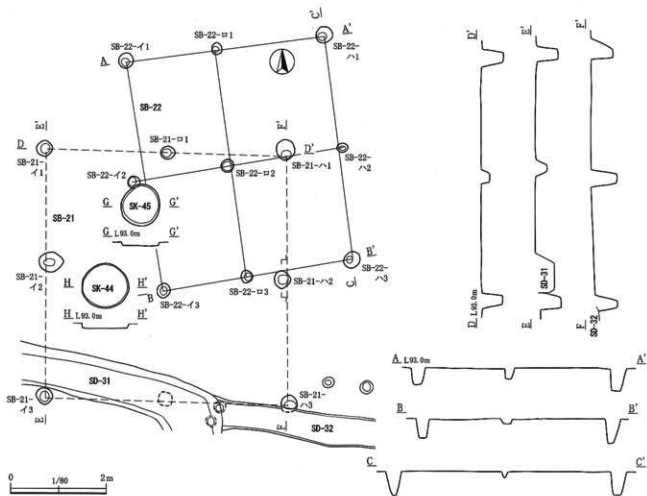
第 172 图 第 18 号掘立柱建物跡



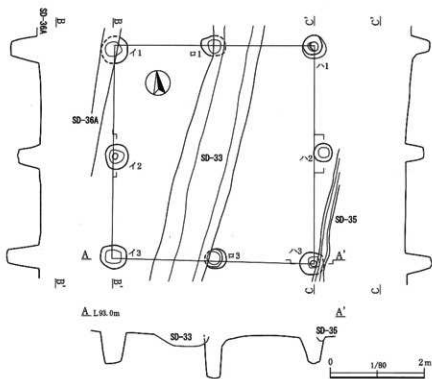
第 173 图 第 19 号掘立柱建物跡



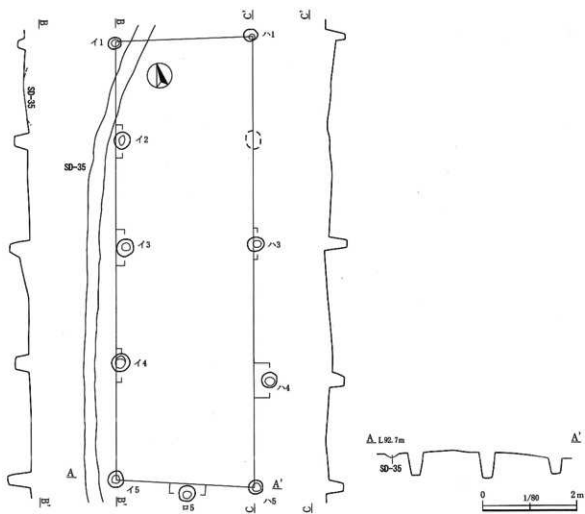
第 174 图 第 20 号掘立柱建物跡、第 37 ~ 39 号土坑



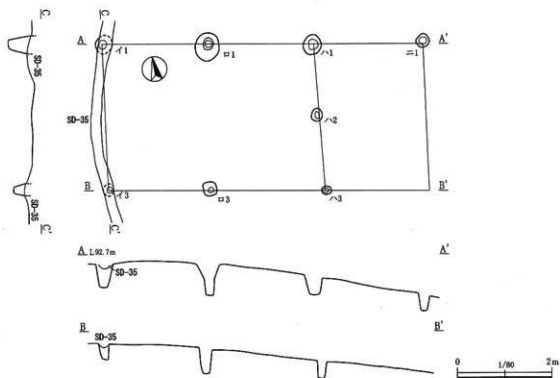
第175图 第21·22号掘立柱建物跡、第44・45号土坑



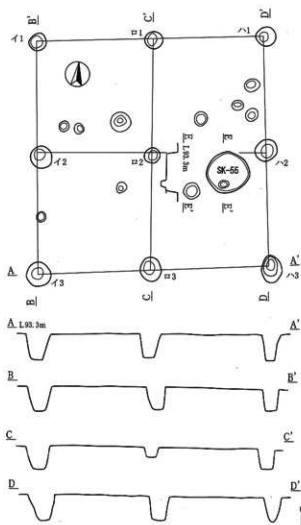
第176图 第23号掘立柱建物跡



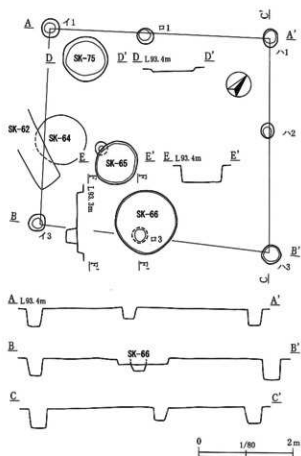
第 177 图 第 24 号掘立柱建物跡



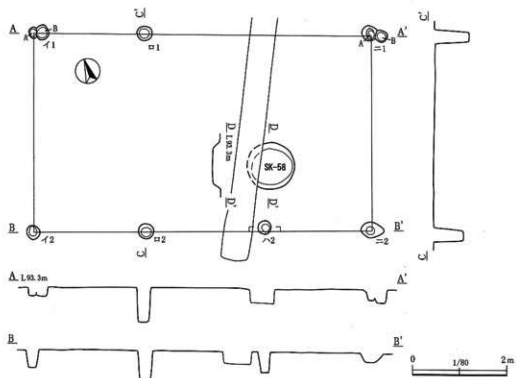
第 178 图 第 25 号掘立柱建物跡



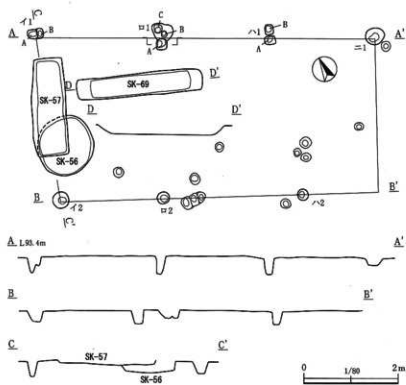
第179图 第26号掘立柱建物跡、第55号土坑



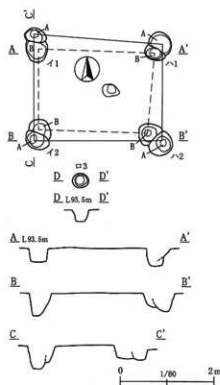
第181图 第30号掘立柱建物跡、第65・66・75号土坑



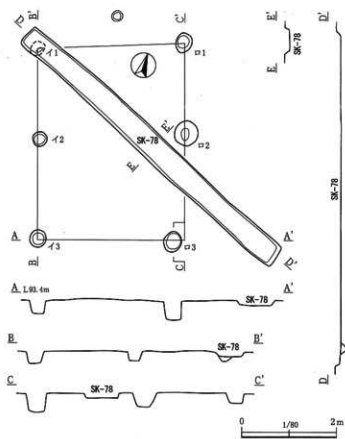
第180图 第27号掘立柱建物跡、第58号土坑



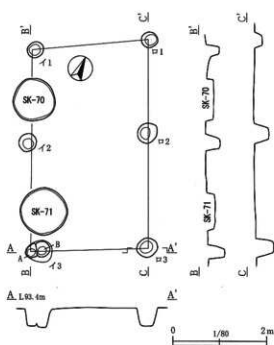
第182图 第28号独立柱建物跡、第56・57・69号土坑



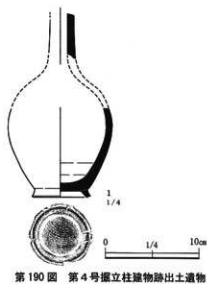
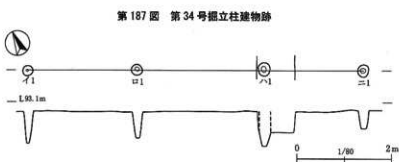
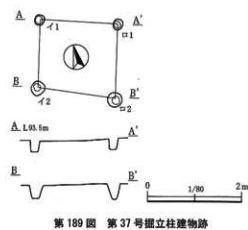
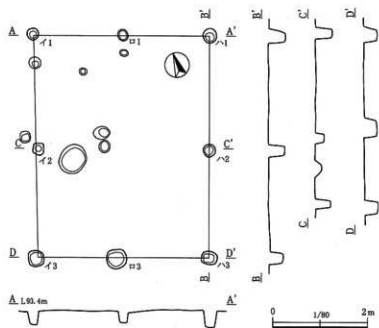
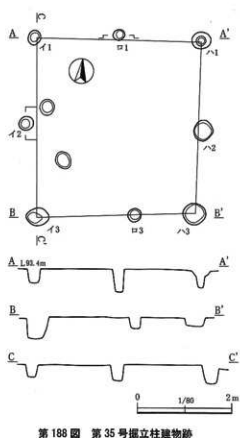
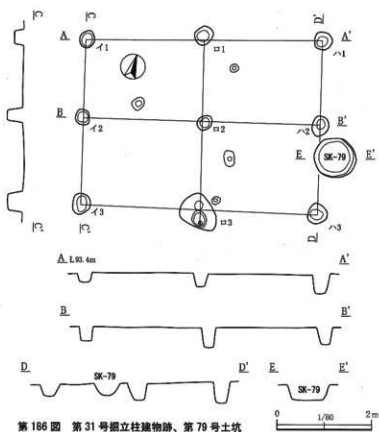
第185图 第36号独立柱建物跡



第183图 第29号独立柱建物跡、第78号土坑



第184图 第32号独立柱建物跡、第70・71号土坑



第3節 古墳

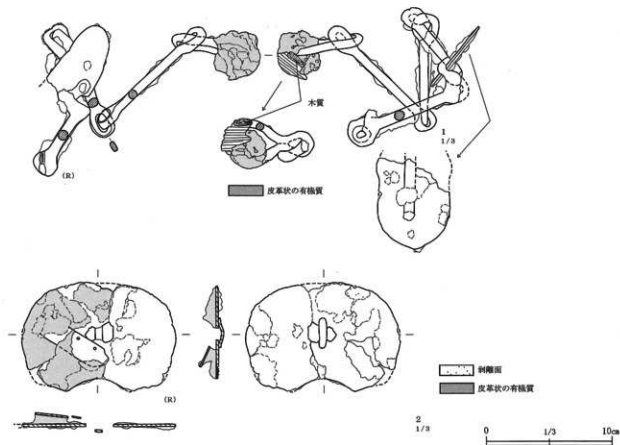
調査区の南東端において、古墳2基が確認された。第1号墳は後世の溝群によって削平されていて、周溝と主体部の一部を確認したに過ぎない。第2号墳は後世の溝に切られていたが、周溝と主体部と考えられる土坑が確認された。第1～3次の調査において第2号墳に類似の遺構は見られたものの、他はいずれも主体部が確認されておらず、円形周溝遺構とした。

第1号墳 (第192～196・210図、図版3・18・19・29)

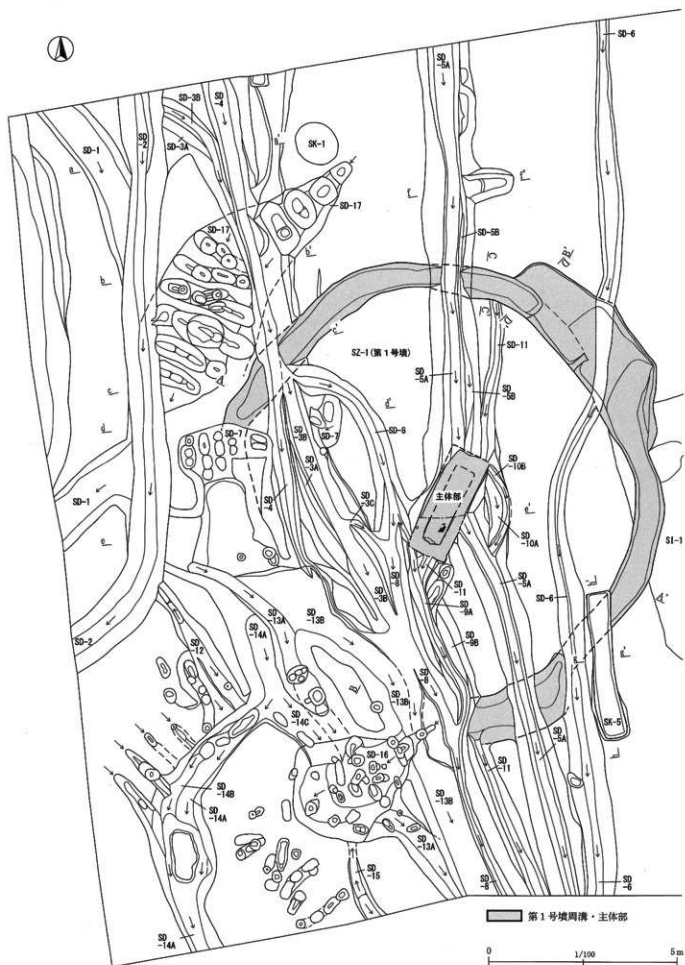
遺構 8C・8D・9C・9Dグリッドに位置する。東側で第1号壙穴住居跡と重複し、これを切る(第1節参照)。南東部で第5号土坑と重複してこれに切られていた。さらに、第3A～11・13B号溝跡と重複し、これらに切られていた(第8節参照)。前述の通り後世の溝群との重複や水田化に伴う削平によって墳丘の封土が失われており、周溝や主体部も遺存状態が悪かった。外部施設は周溝が確認されたが、南西部は後世の溝群との重複によって痕跡すら認められなかった。遺存部分から推定される墳丘の規模・形状は、径10.5mの円墳である。しかし、北東部の周溝に接して、幅0.7～1.0m、長さ5.8m程の張り出し状の部分が見られ、周溝のみ帆立貝型の可能性もある。周溝は幅0.6～1.4m、現存の深さは20～40cmで、壁はやや外傾する。覆土は遺存状態のやや良好な北東部(第193・194図D-D')では4層に分層され、張り出し部分を周溝が切っているように観察されたが、平面的には別遺構とは断定し難い状況であった。この部分の覆土はローム粒・塊を多く含み、人為的埋設と考えられる。

主体部も中央から北側の3分の2程が後世の溝群(第5A・5B・8・9A～11号溝群)によって切られていた(第8節参照)。主体部の中軸線はN-27°-Eを示す。南北2.9m、東西1.1mの長方形で、現存の深さが65cm程の墓壇の底面の中央に、長さ2.5m、幅0.55mの長方形に20～25cm掘り込んで木棺を埋納していたと推察される。土層観察(第195図)からは径50cm以上の木棺であったと推察される。また、南端の小口部分と両側面に白色粘土が遺存していたことから、割竹形の木棺と考えられる。遺存する木棺部分の南東部より鉄製品が1点出土した。鉄製品内湾槽円形鏡板付巻と考えられる。なお、墓壇の底面及び側面に掘削時の工具痕が認められた。幅約20cmの工具を使用したと判断される。

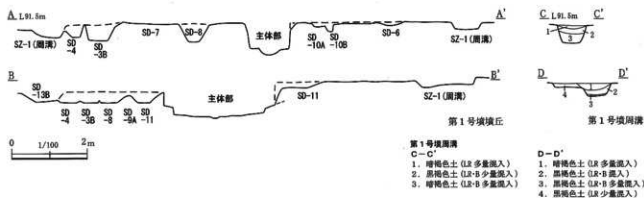
遺物 鉄製品の棺本体(1)と破損し分離した一方の鏡板(2)を図示した。周囲には木質や皮革状の有機質の付着が認められたが、これらについては遺存状態が不良で詳細は不明。一方の引手には別造りの瓢形の引手臺が残る。2の鏡板は最大幅12.3cm、現存高8.6cm、立脚部分は欠損するが、埋納時には既に欠損していた可能性もある。片面に幅1.8cm、長さ5.8cm程の小孔をもつ鉄片が付着しており、吊鉤金具と思われる。あるいは、直接小孔を通して金具を取り付けていた可能性も否めない。また、もう一方の鏡板は、最大幅はこれに近いものの現存高が5.7cmと低く、内湾部分が明確でない。破損した為に補修していたことにより大きさが異なる可能性が高い。



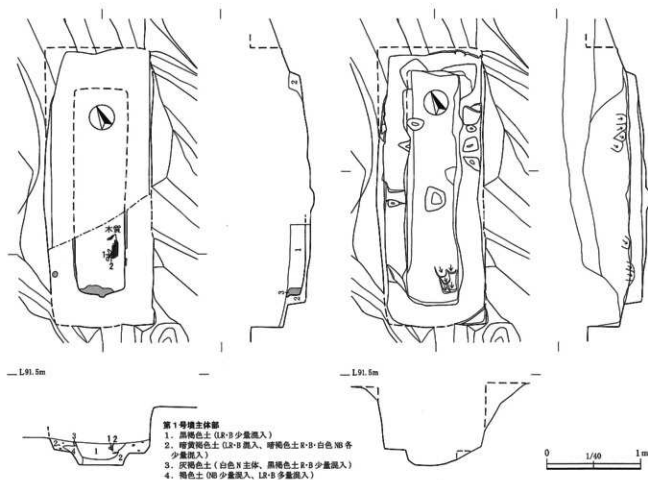
第192図 第1号墳主体部出土遺物



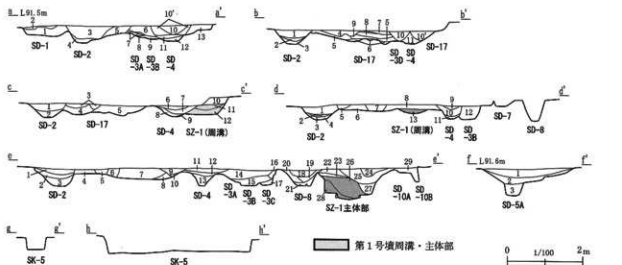
第193图 第1号墳境丘、第5号土坑、A区南西溝跡群



第194図 第1号墳墳丘・周溝



第195図 第1号墳主体部・掘方



A区西溝跡群

a-b'

1. 暗褐色土 (L土主体、暗褐色土B混入)
2. 暗褐色土 (L土混入)
3. 黒褐色土 (L土・軽石R各混入)
4. 暗褐色土 (L土少量混入)
5. 暗褐色土 (L土・軽石R各混入、砂質で硬く締まる)
6. 暗褐色土 (5層とはほぼ同じだが、やや灰色強い)
7. 第6層に類似するがL土多い
8. 暗褐色土 (砂質だが粘性強い)
9. L土と砂質土の混合土
10. 黒褐色土 (L土少量混入)
11. 黒褐色土 (L土混入)
12. 黒褐色土 (10層より粘性あり)
13. 黒褐色土 (L土R混入)

b-b'

1. 黒褐色土 (L土・軽石R各混入)
2. 黒褐色土 (1層に近似するやや砂質)
3. 黒褐色土 (1層よりL土を多く混入)
4. 暗褐色土 (L土・軽石R各多量混入、砂質)
5. 黒褐色土 (粘性あり)
6. 暗褐色土 (L土少量混入、硬く締まる)
7. 黒褐色土 (L土少量混入)
8. 黒褐色土 (L土・軽石R各混入、砂質)
9. 暗褐色土 (L土混入)
10. 暗褐色土 (10層よりL土多い)
11. 黒褐色土 (L土・軽石R各多量混入、砂質)

c-c'

1. 黒褐色土 (L土・軽石R混入)
2. 暗褐色土 (L土・軽石R各多量混入、砂質)

3. 暗褐色土 (L土・軽石・砂R各多量混入、硬く締まる)
4. 暗褐色土 (L土・R・黒褐色土R・軽石R各混入)
5. 灰褐色土 (L土混入、硬く締まる)
6. 黒褐色土 (L土少量混入)
7. 暗褐色土 (L土・軽石R各多量混入、砂質)
8. 黒褐色土
9. 黒褐色土 (L土・軽石R混入)
10. 暗褐色土 (L土多量混入、L土少量混入)
11. 黒褐色土 (L土R少量混入)
12. 黒褐色土・L土の混合土

d-d'

1. 黒褐色土 (L土・軽石R各混入)
2. 黒褐色土 (軽石R混入)
3. 暗褐色土 (砂質)
4. 暗褐色土 (L土・軽石R各混入、砂質)
5. 暗褐色土 (L土・軽石R各混入)
6. 黒褐色土・灰褐色土Rの混合土
7. 暗褐色土 (L土・軽石R各混入)
8. 黒褐色土 (部分的にL土・軽石R各混入)
9. 黒褐色土 (L土少量混入)
10. 暗褐色土 (L土・軽石R各多量混入)
11. 黒褐色土 (粘性あり)
12. 灰褐色土 (粘性あり、硬く締まる)
13. 暗褐色土 (L土R多量混入)

e-e'

1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色土 (L土R混入)
3. 暗褐色土 (L土・軽石R各多量混入、砂質)
4. 黒褐色土 (L土少量混入)
5. L土 (黒褐色土R少量混入)
6. 暗褐色土 (L土多量混入)

7. 黒褐色土 (L土・軽石R・砂R各混入、砂質)
8. 黒褐色土 (7層より砂R多く混入)
9. 灰褐色土 (L土R混入)
10. 黒褐色土 (L土R混入、砂質で粘性あり)
11. 灰褐色土
12. 灰褐色土 (L土R多量混入、軽石R混入)
13. 灰褐色土
14. 灰褐色土 (L土R多量混入、軽石R少量混入)
15. 黒褐色土 (L土・軽石R・砂R・砂R各混入)
16. 暗褐色土 (L土多量混入)
17. 暗褐色土 (砂質)
18. 暗褐色土 (L土多量混入、灰色土R混入)
19. 暗褐色土 (L土多量混入)
20. 暗褐色土 (L土R混合土)
21. 暗褐色土 (L土・灰色土R各混入)
22. 暗褐色土 (L土多量混入)
23. 黒褐色土 (L土R多量混入、軽石R・砂R各混入)
24. 暗褐色土 (L土混入、軽石R少量混入)
25. 褐色土 (L土R少量混入)
26. 黒褐色土 (L土R少量混入)
27. 暗褐色土 (L土R混入、黒褐色土R混入)
28. 暗褐色土 (L土・暗褐色土R・白色土R各混入)
29. 暗褐色土 (L土・軽石R各混入、砂質)

f-f'

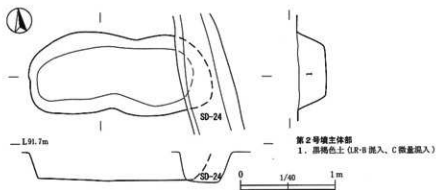
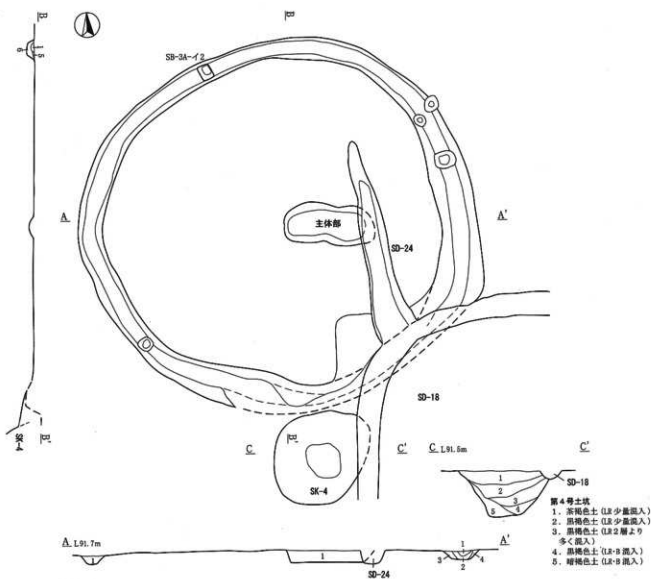
1. 黒褐色土 (L土混入) (SD-5A上位の硬質層)
2. 暗褐色土 (非常に硬く締まる) (SD-5A上位の硬質層)
3. 暗褐色土 (L土・黒褐色土R各混入) (SD-5A覆土)

第196図 第5号土坑、A区西溝跡群

第2号溝 (第197・210図、図版19)

遺構 8G・9Gグリッドに位置する。水田化に際して削平を受けており、封土は全く遺存していない。また、北部で第3A号掘立柱建物跡、南東部で第18号溝跡、中央やや東寄りで第24号溝跡と重複し、これらに切られていた (第2・8節参照)。遺存部分より推定される墳丘は径が7.0～7.2mの円墳で、周溝を含めた径が8.0～9.0m。周溝は幅0.45～1.0mで、現存の深さは18～22cm、壁は外傾する。北西部の周溝は幅狭で、南東部はやや幅広になっていた。覆土は西側では単層、東側は4層に分層され、自然埋没と考えられる。溝内の中央やや東寄りに墓壁と見られる土坑が確認された。副葬品は認められなかったが、位置及び規模・形状から、主体部 (墓域) と推定される。

主体部は、東端が第24号溝と重複し、これに切られていた (第8節参照)。長径195cm、短径80cmの不整形円形で、現存の深さは30cm、長軸方位はN-85°-Wを示す。覆土は単層で、ローム粒・塊混じりで、炭化物粒を少量含み、人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。



第197図 第2号墳・主体部、第4号土坑、第18・24号溝跡

第4節 土坑 (第16・36・71・162・166・168・174・175・179～184・186・193・196～201・206・210～212図、第3表、図版4・

6・17～21・29)

今次調査では、縄文時代から近・現代にわたる各種の土坑が多数確認された。これらのうち82基の土坑を第3表に示した。土坑の分布は、A～C区全般にわたるがA区北端部からB・C区にかけて多く認められた。また、縄文時期を特定し得る遺物の出土した土坑は第1・14・32号土坑の僅か3基で、第14号土坑が古墳時代前期、第1・32号土坑が古墳時代後期と考えられる。土師器片や鉄片の出土した土坑もあるが、他の大部分は縄文時期を特定出来ない状況である。なお、遺物の出土はなかったものの、第4・11・40・41・42号土坑は、覆土及び形状等から縄文時代の土坑と判断される。第4号土坑は、東端が第18号溝跡と重複し、これに切られていた（第8節参照：溝跡との重複は以下同）。規模・形状が径245×192cmの不整形円形。断面傾斜状で、現存の深さは198cm。覆土は5層に分層され、締まりが強く、人為的埋設の後自然埋設と考えられる。第11号土坑は、規模・形状が径150×140cmの円形。断面井戸状で、現存の深さは190cm。覆土は4層に分層され、締まりが強く、人為的埋設と考えられる。第10号竪穴住居跡の床面下より確認された（第1節参照：竪穴住居跡との重複は以下同）。第40号土坑は、規模・形状が径150×125cmの楕円形。横断面がV字状で、現存の深さは130cm。覆土は3層に分層され、締まりが強く、人為的埋設と考えられる。第41号土坑は、北西部が第36号溝跡と重複し、これに切られていた。規模・形状が径170×100cmの楕円形。横断面がV字状で、現存の深さは150cm。北西端が塊り込み状で、本来は南東端も同様の形状であったと思われる。覆土は3層に分層され、締まりが強く、人為的埋設と考えられる。第42号土坑は、規模・形状が径175×70cmの長方形。断面箱状で、現存の深さは61cm。底面には径8～10cm、深さ25～30cmの小ピットが9基確認された。覆土は2層に分層され、締まりが強く、人為的埋設と考えられる。これらのうち、第4号土坑の性格は判然としないが、第11・40～42号土坑は所謂「陥穴」と考えられ、第11号土坑は後期、第40～42号土坑は早期頃と推察される。

古墳時代前期の第14号土坑は、東半部が古墳時代後期の第7号竪穴住居跡に切られていた。規模・形状が長さ134cm、幅88cmの長方形。断面が箱状で、現存の深さは143cm。下部よりほぼ完形に近い土師器の壺（1）、甕（2・3）が出土している（第201図、図版29）。覆土は3層に分層され、最下層の第3層は底面を敷いたもので、第2層中より土器が出土した。第1・2層とも人為的埋設である。壺・甕という器種から陶器品としては難く、性格は不明である。古墳時代後期の第1号土坑は、規模・形状が径122×102cmの楕円形。壁は僅かに外傾し、現存の深さは49cm。覆土は6層に分層され、中位より土師器の坏（1）が出土（第201図）。人為的埋設と考えられる。同じく古墳時代後期の第32号土坑は、規模・形状が径76×70cmのほぼ円形。壁は僅かに外傾し、現存の深さは12～17cm。覆土は2層に分層され、ローム・炭化物粒混じりの第1層より土師器の坏（1）が出土（第201図）。人為的埋設と考えられる。

第3表に示した82基の土坑のうち縄文時代のもと考えられる5基の土坑を除いた77基の平面形状は、円形、楕円形、不整形円形、不整形、長方形、隅丸長方形である。長方形は、長軸が短軸の4倍以上のAと以下のBとに大別される。それぞれの内訳を見ると、円形が43基で全体の56%を占め、楕円形7基で9%、不整形円形1基1.3%、不整形2基2.6%、長方形（A）5基6.5%、長方形（B）18基23%、隅丸長方形1基1.3%である。円形のものは径58～168cmで100cm前後のものが主体。長方形（A）は長さの差が大きく265～704cm、幅42～75cmで、長さ450cm、幅50cm程が主体。長方形（B）は長さ96～228cm、幅44～120cmで、長さ180cm、幅90cm前後が主体であった。

これら古墳時代以降の土坑の、他の遺構との重複関係を見ると、第3号土坑は、古代と考えられる第2号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた（第2節参照：竪穴住居跡との重複は以下同）。第5号土坑は、古墳時代後期前半の第1号墳と重複し、これを切る（第3節参照）。第7号土坑は、古墳時代前期の第13号竪穴住居跡と重複し、これを切る。第8号土坑は、平安時代の第14号竪穴住居跡と重複し、これを切る。第9号土坑は、古墳時代後期の第32号竪穴住居跡と重複し、これを切る。第10号土坑は、平安時代の第37号竪穴住居跡と重複し、これを切る。第12号土坑は、古墳時代前期の第71号竪穴住居跡と重複し、これを切る。第14号土坑は前述の通り。第38・39号土坑は、中世以降と考えられる第20号竪穴住居跡と重複し、これを切る。第45号土坑は、中世以降と考えられる第22号竪穴住居跡と重複し、これを切る。第46号土坑は、第40号溝跡と重複し、これに切られていた。第66号土坑は、中世以降と考えられる第30号竪穴住居跡と重複し、これを切る。第78号土坑は、中世以降と考えられる第29号竪穴住居跡と重複し、これを切る。また、土坑同士の重複関係では次の通りである。長方形（B）の第27号土坑は、円形の第28号土坑と重複し、これに切られていた。長方形（B）の第49号土坑は、長方形（A）と思われる第49B号土坑と重複し、これを切る。円形の第51・52号土坑は長方形（B）の第80号土坑と重複し、これに切られていた。円形の第56号土坑は、長方形（B）の第57号土坑と重複し、これに切られていた。円形の第59号土坑は、円形の第60号土坑と重複し、これを切る。円形の第63・64号土坑は、長方形（A）の第62号土坑と重複し、これに切られていた。数の多い円形土坑同士の切り合いは当然の事であるが、概ね円形土坑を長方形（A）（B）土坑が切っているようである。なお、近隣住民の方の談によれば、長方形（A）（B）土坑は水田化される前の畑作を行っていた頃に根菜類の貯蔵に利用していたもので、B類よりA類の方が新しいとの事であった。かつては搬出しやすい農道脇に設けられていたとの事である。水田化に際してその当時から土地の区画が変更されたものと考えられる。円形のものは、他地域の例では近世以降に同様の目的で利用されており、類似の変遷を示していると思われる。

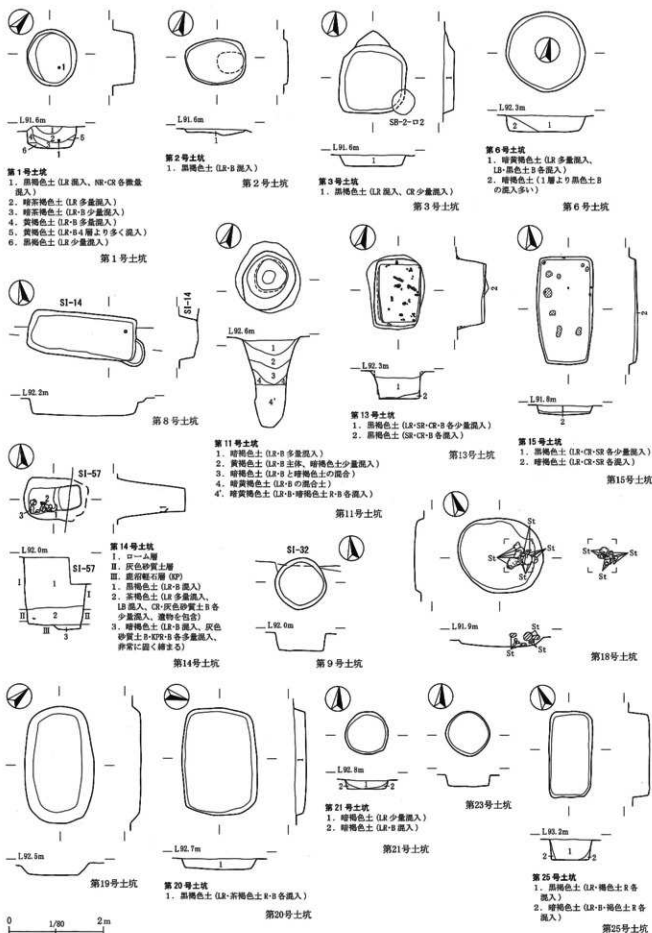
今次調査で確認された各種土坑の中に、畑作時に設けられた根菜類の貯蔵穴が多数存在したことは事実であろうが、覆土中より土師器や炭化物、籾などが出土した土坑は遺構としての性格を追求すべきものとして、今後の課題としたい。また、円筒形土坑については、インターパーク周辺の調査において古墳時代中期以降の集落に伴う動産（食料）の貯蔵施設との見解がなされ、多数の調査例がある。しかし、今回の調査で確認された円形土坑は径がやや小さく浅いものが大部分で円筒形とは言えず、覆土の面からも同列に見るべきものではなかった。

第3表 土坑一覧表

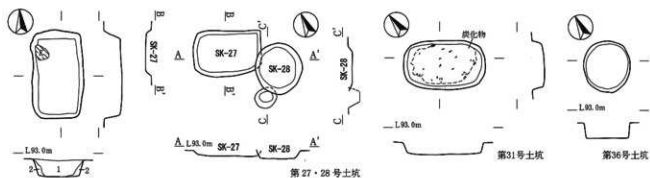
番号	位置	平面形	長軸×短軸	深さ	長軸方位	重複関係	補図番号	図原番号	旧<新 単位 cm () 推定値、[] 現存値	
									備	考
1	9C	槽円	122×102	49	N-40° 30' -W	—	198-201・210	—	土師器坪(1)、人為的埋没、古墳後期	
2	9D	槽円	127×98	7~13	N-70° 30' -E	—	198-210	—	人為的埋没	
3	9F	不整方	145~175×140	23	N-10° -W	<SB-2	198-210	—	炭化物粒少量混、人為的埋没	
4	8G	不整槽円	245×192	98	—	<SD-18	197・210	19	人為的埋没の後自然埋没、縄文	
5	8D	長方(A)	336×42	20~37	N-9° -W	SZ-1<	193・196・210	—	人為的埋没	
6	16M	円	径168	35	—	—	198-210	—	人為的埋没	
7	14M	円	径78	42	—	SI-13<	16・210	—	礎1点、人為的埋没	
8	15L・15M	長方(B)	225×95	30~35	N-75° -W	SI-14<	198-210	4	自然埋没	
9	13M	円	径110	25~35	—	SI-32<	198-210	—	自然埋没	
10	12M	長方(B)	96×44~48	62	N-74° -W	SI-37<	36・210	6	人為的埋没	
11	12L	円	150×140	190	—	<SI-10	198-210	19	人為的埋没、縄文	
12	24S	長方(B)	166×97~117	18	N-60° -W	SI-71<	71・211	19	人為的埋没	
13	24S	長方(B)	157×115~120	58	N-70° 30' -W	—	198-211	19	ローム粒・焼土粒・炭化物粒・塊各少量混、人為的埋没	
14	21Q	長方(B)	134×88	143	N-85° -W	<SI-57	198-201・211	19・29	土師器蓋(1)・甕(2・3)、人為的埋没、古墳前期	
15	20Q	長方(B)	228×119	15~20	N-6° -E	—	198-210	—	ローム粒・焼土粒・炭化物粒各混、人為的埋没	
16	26T	円	86×80	25~37	—	—	162-211	—	人為的埋没	
17	26T・26U	円	[80]×120	32	—	—	162-211	17	人為的埋没	
18	33S・33T	槽円	185×155	13	N-37° -W	—	198-211	19	大小の礎17点、人為的埋没	
19	34S	槽円	246×147	19	N-45° 30' -W	—	198-211	19	自然埋没	
20	28T	隅丸長方	220×160	24	N-75° -E	—	198-211	19	人為的埋没	
21	28S	円	径91	19	—	—	198-211	—	自然埋没	
22	27T	円	径71	22	—	—	206-211	—	SDR-2内、自然埋没	
23	32J	円	径92	20	—	—	198-211	—	礎1点、人為的埋没	
24	32K	円	径110	26	—	—	166-211	17	SB-9内、人為的埋没	
25	32K・32L	長方(B)	180×96	43	N-25° -E	—	198-211	20	人為的埋没	
26	31L	長方(B)	182×115	35	N-7° -E	—	199-211	20	自然埋没	
27	33L	長方(B)	145×96	6	N-63° -W	<SK-28	199-211	—	自然埋没	
28	33L	円	径106	16	—	SK-27<	199-211	—	人為的埋没	
29	34L	長方(B)	[180]×82	42	N-24° -E	—	168-211	—	SB-11内、南は耕作関係の土坑に切られる、人為的埋没	
30	32N・33N	長方(A)	590×75	12~15	N-27° -E	—	199-211	—	人為的埋没	
31	31P	槽円	173×103	20~25	N-51° -W	—	199-211	19	炭化物粒・塊混、人為的埋没	
32	32P	円	76×70	12~17	—	—	199-201・211	—	土師器坪(1)、炭化物粒・塊混、人為的埋没、古墳後期	
33	30M	円	164×157	22~36	—	—	199-211	—	人為的埋没	
34	34T	円	径95	43	—	—	199-211	—	人為的埋没	
35	31P	槽円	186×156	80	N-78° -E	—	199-211	19	炭化物粒・塊少量混、人為的埋没	
36	32Q	槽円	185×185	32	—	—	199-211	—	自然埋没	
37	36W	円	61×58	18	—	—	174-212	17	SB-20内、人為的埋没	
38	36W	円	90×81	12~15	—	SB-20<	174-212	17	自然埋没	
39	36W	長方(B)	184×97~102	50~65	N-87° -W	SB-20<	174-212	17	人為的埋没	
40	41W	槽円	150×125	130	N-12° -W	—	199-212	19	人為的埋没、縄文	
41	41W・41X	槽円	170×100	150	N-29° 30' -W	<SD-36A	199-212	20	北西端狭り込み、人為的埋没、縄文	
42	38W	長方(B)	175×70	61	N-86° 30' -W	—	199-212	17	底面ビット数多数、人為的埋没、縄文	
43	35U・36U	不整方	192×177	18	N-32° -E	—	199-212	—	人為的埋没の後自然埋没	
44	38U	円	100×95	10	—	—	175-212	17	SB-21内、人為的埋没	
45	38U	円	径82	6	—	SB-22<	175-212	17	SB-21内、自然埋没	

目<新 単位 cm () 推定値、[] 現存値

番号	位置	平面形	長軸×短軸	深さ	長軸方位	重複関係	採掘番号	同様番号	備考
46	38Q	長方(B)	(180)×90	24	N-3°-E	<SD-40	199・212	—	人為的埋没の後自然埋没
47	38P	円	径120	45	—	—	200・212	20	壁の一部内傾、人為的埋没
48	38P	円	125×118	52	—	—	200・212	20	壁内傾、人為的埋没
49A	38Q・39Q	長方(B)	218×75	21	N-21°30'-E	SK-49B<	200・212	20	人為的埋没
49B	39Q・39P	長方(A) ?	[190]×75	17	N-21°30'-E	<SK-49A	200・212	20	人為的埋没
50	38P	円	126×118	18~24	—	—	200・212	20	壁内傾、人為的埋没
51	39P	円	径[118]	24	—	<SK-80	200・212	20	壁内傾、人為的埋没
52	39P	円	径[106]	14	—	<SK-80	200・212	20	壁沿いに細い溝掘る、人為的埋没
53	39P	円	径90	28	—	—	200・212	20	人為的埋没の後自然埋没
54	39Q	円	径100	12	—	—	200・212	20	人為的埋没の後自然埋没
55	39Q	円	径84	22	—	—	179・212	17・20	SB-26内、自然埋没
56	39Q	円	126×118	22	—	<SK-57	182・212	—	SB-28内、自然埋没
57	39Q	長方(B)	208×60~68	6	N-22°30'-E	SK-56<	182・212	—	SB-28内、自然埋没
58	39Q	円	径98	16	—	—	182・212	17	SB-27内、西は耕作関係の土坑に切られる、人為的埋没
59	37S	円	径100	28	—	SK-60<	200・212	20	人為的埋没
60	37S	円	径116	24	—	<SK-59	200・212	20	壁内傾、自然埋没
61	37S	円	径108	18	—	—	200・212	20	人為的埋没
62	41Q	長方(A)	450×50	6	—	SK-63・64<	200・212	—	人為的埋没
63	41Q	円	(104)×(95)	6	—	<SK-62	200・212	—	自然埋没
64	41Q	円	径105	32	—	<SK-62	200・212	18	SB-30内、人為的埋没
65	41Q	円	径85	36	—	—	181・212	18	SB-30内、自然埋没
66	41Q	円	径136	17	—	SB-30<	181・212	—	自然埋没
67	41Q	円	径90	10~16	—	—	200・212	18	自然埋没
68	40Q・41Q	円	径97	22	—	—	200・212	—	自然埋没
69	39Q・39B	長方(A)	265×45	24	N-67°-W	—	182・212	—	SB-28内、人為的埋没
70	41Q	円	径88	16	—	—	184・212	18	SB-32内、人為的埋没
71	41Q	円	径100	21	—	—	184・212	18	SB-32内、自然埋没
72	40Q・41Q	円	径88×80	5	—	—	200・212	—	人為的埋没
73	41Q	円	径90	6	—	—	200・212	—	人為的埋没
74	42P・42Q	長方(B)	210×70~90	35	N-11°30'-W	—	200・212	20	炭化物粒・塊・木材片各混、人為的埋没
75	41Q	円	径96	5	—	—	181・212	—	SB-30内、自然埋没
76	42P	円	径113	16	—	—	200・212	20	壁内傾、人為的埋没
77	43S	長方(B)	190×63	41	N-19°-E	—	200・212	20	北に段(出入口用?)、側壁内傾、人為的埋没
78	41R	長方(A)	704×46~52	8~11	N-69°-W	SB-29<	183・212	18	自然埋没
79	42T	円	径70	8	—	—	186・212	18	SB-31内、自然埋没
80	39P	長方(B)	164×96~110	25	N-20°-E	SK-61・62<	200・212	20	人為的埋没
81	43S	不整形円	114×88~96	10	N-9°-W	—	200・212	—	自然埋没

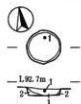


第 198 圖 土坑類 (1)



- 第26号土坑
1. 暗褐色土 (L.R.少量混入)
 2. 褐色土 (L.R.-B.少量混入, 暗褐色土R混入)

第26号土坑



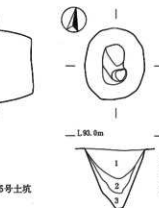
- 第32号土坑
1. 黑褐色土 (L.R.-C.R.各混入)
 2. 暗褐色土 (L.R.-B.褐色土R各混入)

第32号土坑



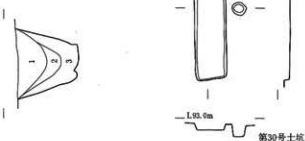
- 第33号土坑
1. 黑褐色土 (L.R.-褐色土R各混入)
 2. 暗褐色土 (L.R.-黑褐色土R-B各混入)

第33号土坑



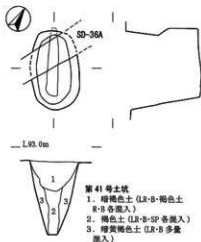
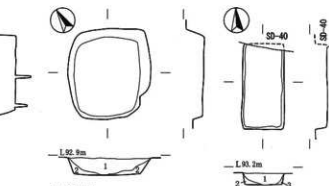
- 第34号土坑
1. 暗褐色土 (L.R.-B.少量混入)
 2. 黑褐色土 (L.R.-灰褐色土R-B各混入)
 3. 灰褐色土 (黑褐色土R-B混入)

第34号土坑



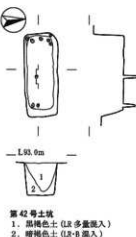
- 第40号土坑
1. 暗褐色土 (L.R.-B.褐色土R各混入)
 2. 暗褐色土 (L.R.少量混入, 褐色土R-B混入)
 3. 褐色土 (L.R.-B.少量混入, 暗褐色土R-B混入)

第40号土坑



- 第41号土坑
1. 暗褐色土 (L.R.-B.褐色土R-B各混入)
 2. 褐色土 (L.R.-B.-SP各混入)
 3. 暗黄褐色土 (L.R.-B.少量混入)

第41号土坑



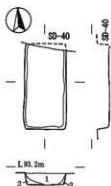
- 第42号土坑
1. 黑褐色土 (L.R.少量混入)
 2. 暗褐色土 (L.R.-B.混入)

第42号土坑



- 第43号土坑
1. 暗褐色土 (L.R.少量混入)
 2. 暗黄褐色土 (L.R.-B.少量混入, 褐色土R-B混入)

第43号土坑

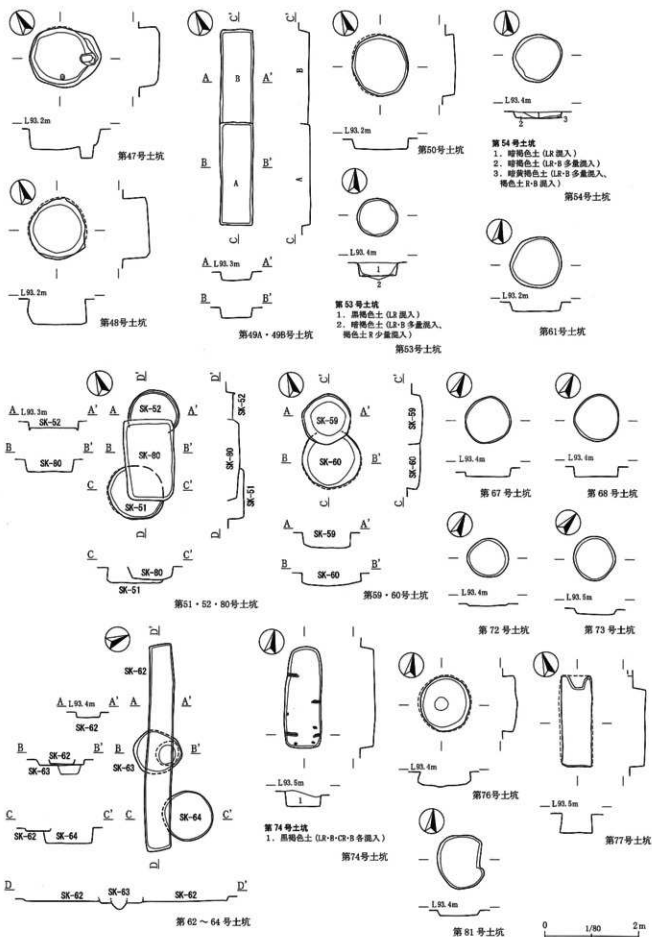


- 第46号土坑
1. 暗褐色土 (L.R.少量混入)
 2. 暗褐色土 (L.R.-B.少量混入)
 3. 暗黄褐色土 (L.R.-B.少量混入, 褐色土R-B混入)

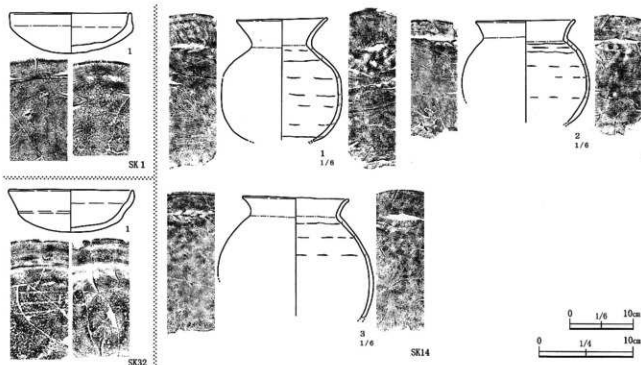
第46号土坑



第199图 土坑类 (2)



第200图 土坑类 (3)



第201図 第1・14・32号土坑出土遺物

第5節 井戸跡

今次調査では8基の井戸跡が確認された。第1号井戸跡が古代と考えられる他は中世以降のもつと推察される。古代と考えられる第1号跡がA区南寄りて確認された他はA区北端で1基（第2号井戸跡）、B区4基（第3～6号井戸跡）、C区2基（第7・8号井戸跡）といずれも調査区北部に集中している。

第1号井戸跡（第202・210図、図版21）

遺構 13Mグリッドに位置する。西半部が第12号堅穴住居跡と重複し、これを切っていた（第1節参照）。規模・形状は開口部が東西120～140cm、南北135cmのほぼ方形。確認面より60cm程下降した付近で径90×100cmの円形となる。確認面より150cm程で掘削を中止したが、そこでの径は68×75cmの円形であった。覆土は5層に分層され、下位は人為的埋没、上位の第1層は自然埋没と考えられる。

遺物 覆土より土器の破片が出土したもの、図示し得るものはなかった。

第2号井戸跡（第202・211図）

遺構 32Tグリッドに位置する。規模・形状は開口部が径116×102cmの楕円形。壁は僅かに外傾し、確認面より190～200cm下降した付近で径80cm程の円形となり、さらに10～15cm下降すると径25cmの円形の底面に至る。覆土は下位が人為的埋没で、上位は自然埋没であった。確認面より10～15cm下降した。標高91.50m付近で湧水の上面となった。遺物の出土はなかった。

第3号井戸跡（第202・209・211図、図版21）

遺構 34Iグリッドに位置する。規模・形状は開口部が径145×128cmの楕円形。開口部より40～60cm下降した付近までの壁は外傾し、径105cm程の円形となる。これより下は壁が僅かに外傾する程度で、開口部より約150cm下降した所では径80cm程の円形となり、ここで掘削を中止した。覆土は開口部より100cm下降した付近までが自然埋没で、これより下位は人為的埋没であった。

遺物 覆土上位より出土の石製の砥石（第209図18）1点を図示した。現存長5cm、幅2cm、厚さ1cmと小振りて扁平割。

第4号井戸跡（第202・211図）

遺構 34Kグリッドに位置する。規模・形状は開口部が径118cmの円形。開口部より35～45cm下降した付近までの壁は外傾し、径95cm程の円形となる。これより下の東側の壁はほぼ直立するものの、他の三方はやや外に膨らみ、開口部より230cm下降した付近では径約120cmの円形となり、ここで掘削を中止した。覆土は開口部より130cm程が自然埋没で、これより下位は人為的埋没であった。開口部より185cm程下降した標高91.20m付近が湧水の上面であった。

遺物 覆土より土器の破片が出土したもの、図示し得るものはなかった。

第5号井戸跡 (第202・209・211図、図版21)

遺構 320グリッドに位置する。規模・形状は開口部が径220×195cmの楕円形。開口部より110～125cm下降した付近までの壁は大きく外傾し、ここでは径90cm程の円形となる。開口部より320cm程下降した付近までの壁はほぼ直立し、径75cmの円形。これより25～28cm下降すると、径20cm程の円形の底面に至る。覆土は開口部より120cm程が自然埋没で、これより下位は人為的埋没と考えられる。開口部より140cm下降した標高91.60m付近が湧水の上面であった。

遺物 覆土上位より出土の石器の鉢 (第209図9) の体部片を図示した。常滑窯産で14～15世紀。

第6号井戸跡 (第202・209・211図、図版21)

遺構 300・310グリッドに位置する。規模・形状は開口部が径140×132cmのほぼ円形。壁はやや外傾し、確認面より約220cm下降した付近で径90cm程の円形となり、ここで掘削を中止した。また、西側の壁は開口部より30～100cm程の所で外に15cm程挟れて張り出していた。覆土は開口部より110cm程が自然埋没で、これより下位は人為的埋没であった。開口部より136cm下降した標高91.44mが湧水の上面であった。

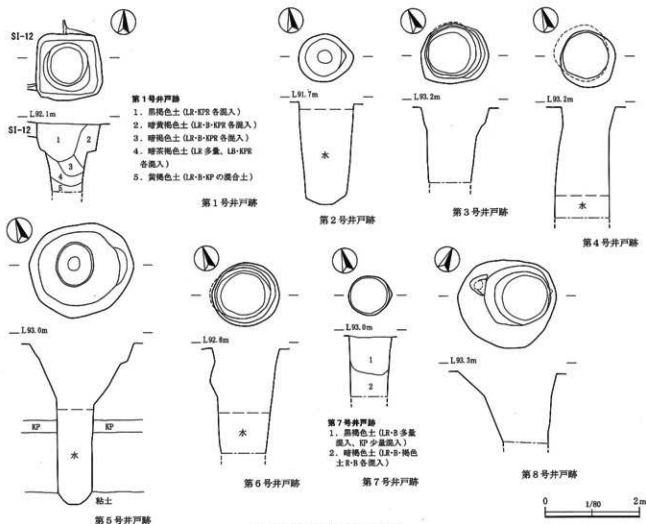
遺物 覆土中より土師器小片と石器の甕の胴部下端の破片が出土し、石器甕 (第209図6) を図示した。常滑窯産の甕で直径16cm、14～15世紀。

第7号井戸跡 (第202・212図、図版21)

遺構 39Wグリッドに位置する。規模・形状は開口部が径90×82cmのほぼ円形。壁は直立し、開口部より130cm程下降した付近で径75cmの円形となり、ここで掘削を中止した。覆土は2層に分層され、全体が人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第8号井戸跡 (第202・212図、図版21)

遺構 38Rグリッドに位置する。規模・形状は開口部が径210×185cmの楕円形。壁は南から南西部にかけて大きく外傾し、開口部より50cm下降した付近で径140×120cmの楕円形となる。約146cm下降した付近では径90cmの円形となり、ここで掘削を中止した。覆土は開口部より90cm程は自然埋没で、それより下位は人為的埋没であった。遺物の出土はなかった。



第202図 井戸跡 (SE1～8)

第6節 方形竪穴

調査区の北西部、B区の西端で3基の方形竪穴が近接及び重複して確認された。付近には同時期と思われる竪立柱建物跡や井戸跡が点在する。

第1号方形竪穴（第203・211図、図版21）

遺構 32H・32I・33H・33Iグリッドに位置する。規模・形状は南北226cm、東西256～265cmの長方形で、長軸方位はN-78°-Wを示す。壁は現存高65～70cmで、ほぼ直立する。竪穴の中央（P1）と北・南・西・東各辺の中程の壁下にピット（P2～P5）、北辺P2の西にP6、南辺P3の西にP7の計7基のピットが確認された。ピットは径16～22cm、深さ10～30cmで、中央のP1は直立するが、他はいずれも内傾していた。東辺の北寄りに径40×20cmの半月状に残り残した出入口用と思われる段が設けられていた。段は竪穴の内側に張り出しており、床面との比高は50cm程である。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。また、床面の東寄りに径100×50～60cmの範囲で草本類の炭化物が遺存していた。覆土は自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第2号方形竪穴（第204・211図、図版21）

遺構 33Iグリッドに位置する。北西部が第3号方形竪穴と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北240cm、東西200～210cmの長方形で、長軸方位はN-73°30'-Wを示す。壁は現存高76～80cmで、やや内傾する。床面の中央（P3）及び壁下にピットが見られた。ピットは北半部に集中しており、前述のP3を含めP1～P8の計8基確認された。P1～P7は径18～35cmと規模の差が大きく、平面が楕円形と長方形のものが見られる。深さ15～25cmで、中央のP3は直立するが、他は内傾していた。南辺の中央やや東寄りに、径30×20cmの楕円形に張り残した出入口用の段が設けられていた。段は竪穴の内側と外側に跨るように設けられ、床面との比高は45cm程である。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。また、床面の南西隅には径60×50cmの長方形で深さ16cm程の浅い掘り込みP8が設けられ、長さ40cm、幅20～40cm、厚さ8cm程の板状の石材が2点置かれていた。本跡の南端部の床面上に径約200×70cmの範囲で草本類の炭化物が遺存し、これに前記の石材も覆われていた。覆土は人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第3号方形竪穴（第203・211図、図版21）

遺構 33Iグリッドに位置する。南東部が第2号方形竪穴と重複し、これに切られていた。規模・形状は南北240cm、東西307～320cmの長方形で、長軸方位はN-70°-Wを示す。壁は現存高65～70cmで、やや外傾する。竪穴の中央（P3）と北辺寄りの床面及び北・東・西辺の壁下にピットが設けられ、前述のP3を含めP1～P10の計10基確認された。ピットは北半部に限られ、径16～22cm、深さ15～20cmで、平面が楕円形と方形のものが見られる。南辺の中程に、出入口用の段が設けられており、段は竪穴の内側と外側の2段認められる。内側の段は径30×10cm程で、床面との比高は27cm、外側の段は径60×40cmの半円形で、床面との比高は30～65cmであった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。また、南半部の床面上には径180×110cmと径40cmの2か所に草本類の炭化物が遺存していた。覆土は人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第7節 円形・方形周溝遺構

今次調査では、円形周溝遺構2基と方形周溝遺構1基が確認された。A区の南端で確認されたものは、周溝内側の中央部に埋設施設と思われる土坑が確認されたことから、第2号墳として報告した。

第1号円形周溝遺構（第205・211図、図版21）

遺構 29M・29N・30M・30Nグリッドに位置する。南端部は試掘トレンチにより削平され、周溝が失われていた。また、第12号竪立柱建物跡と重複し、これに切られていた（第2節参照）。規模・形状は内径が東西4.0m、南北推定4.3mのほぼ円形。周溝は幅35～47cm、現存の深さは15～20cmで、壁は僅かに外傾する。外径は東西4.9m、南北推定5.2mのほぼ円形。周溝の覆土は自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第2号円形周溝遺構（第206・211図）

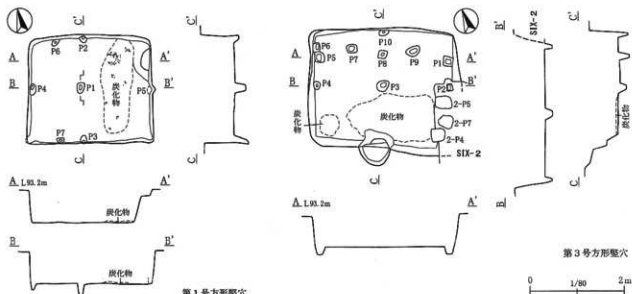
遺構 27Tグリッドに位置する。南東部は試掘トレンチにより削平され、南西部は第95号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた（第1節参照）。また、周溝の内側に確認された第22号土坑は燃焼時期が不明であるものの、本跡を切っていると考えられる。なお、トレンチと第95号跡の間の部分では周溝が確認されておらず、圍繞していたか否かは疑問の残る所である。このような状況から、本来の規模・形状は明確に難しいが、遺存部分より内径が4.2m程の円形と推定される。残存する周溝は、幅30～42cm、現存の深さは10～16cmで、壁はやや外傾する。外径は5.1m程の円形と考えられる。周溝の覆土は自然埋没と考えられる。

遺物 周溝の覆土中より土師器の小片が出土したものの、図示し得るものはなかった。

第1号方形周溝遺構（第207・212図、図版21）

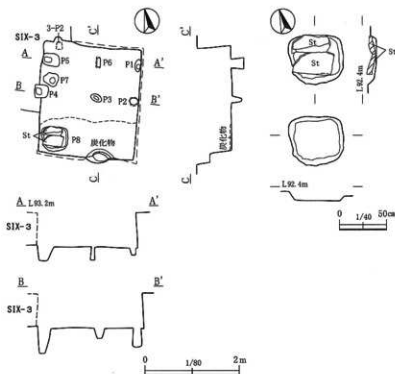
遺構 44R・44S・45R・45Sグリッドに位置する。南側が第43号溝跡と重複し、これに切られていた（第8節参照）。また、南東部は耕作等

に伴う擾乱によって失われていた。規模・形状は完存する北辺の内法が7.6m、現存する東辺の内法も同じ7.6mで弧状にやや外に膨らむ。西辺は5.6mで、第43号跡と重複し、これより南側には延びていなかった。北辺と東辺が同距離であり、本跡が方形の区画であったとすれば、西辺の南端部から南辺の西寄り部分が第43号跡の南側に所在することになるが、確認されなかった。また、区画内には関連すると思われる遺構は認められなかった。したがって、本跡は当初よりこれに近い形状であったと考えられ、あるいは独立した遺構ではなく、本来は第42号溝跡と関連するものであった可能性も全くは否めない。周溝は幅40～80cm、現存の深さは35～40cmで、壁はやや外傾する。周溝を含めた外法は、北辺8.4m、東辺8.0m、西辺6.0mである。周溝の覆土は人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

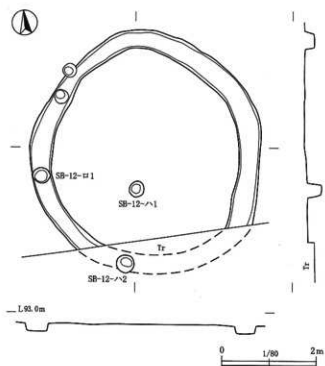


第1号方形壁穴

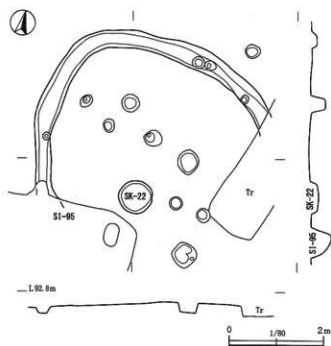
第203図 第1・3号方形壁穴



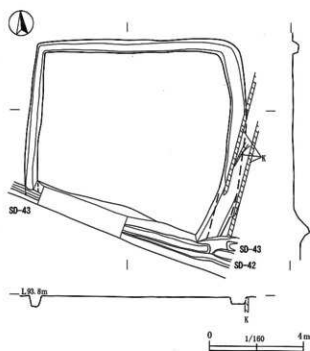
第204図 第2号方形壁穴・ピットB・石材



第205図 第1号円形周溝遺構



第206図 第22号土坑、第2号円形周溝遺構



第207図 第1号方形周溝遺構

第8節 溝跡

今次調査で確認された溝跡は、部分的なものも含め、48条である。調査区全体の分布状況を見ると、A区南端部が33条で全体の69%を占め、次がC区の14条で29%を占める。特にA区南西溝群と呼ぶ地点では、部分的な確認を含め計25条もの溝跡が複雑に分布していて、具数・形状の把握に困難した。また、通常の溝跡の形状とは異なり、波板状圧痕を伴う特殊な形状のものも複数認められた。C区で確認された溝跡は現在の木田の区画と合致するものとしないものと見られるもの、いずれも覆土や底面に水路として使用の痕跡が認められた。第26～29・34・38号溝跡は欠番。

第1号溝跡 (第193・196・210図、図版21)

遺構 8B・9Bグリッドに位置する。中央部は第2号溝跡と重複し、これに切られていた。北端は調査区外に延び、南に向かって東に膨らむ弧状に延び、南端は西側の調査区外に延びる。前述の通り中央部は第2号跡に切られているが、推定を含めた確認長は約12.0mである。幅105～120cm、現存の深さは20～25cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって僅かに下降する。覆土は人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第2号溝跡 (第193・196・209・210図、図版21)

遺構 8B・9Bグリッドに位置する。中央部で西の第1号溝跡、東の第17号溝跡、北部で第3A・3B号溝跡、南東で第12・14A号溝跡と重複し、これらを切る。北端は調査区外に延び、南端は西に屈曲して西側調査区外に延びる。確認長は約16.5m。幅90～120cm、現存の深さは45～80cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって下降し、北と南の比高は40cm程であった。覆土は人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。

遺物 本跡から第4号溝跡にかけての遺構確認作業中に出土した、青磁の碗 (第209図中・近世1)、白磁の碗 (同前3)、灰器の甕 (同前7)、石製品の砥石 (同前19) を図示した。1は青磁の鉢蓋弁文碗、龍泉窯系、13～14世紀。3は白磁の劃花蓮花文碗、定窯系、12～13世紀。7の甕は常滑窯産、14～15世紀。19の砥石は凝灰岩製の小形である。

第3A・3B・3C号溝跡 (第193・194・196・210図、図版21)

遺構 8C・9B・9Cグリッドに位置する。南半部で第1号墳、第7・8号溝跡、北半部で第2・4・17号溝跡と重複し、第1号墳、第17号跡を切り、第2・4・7・8号跡に切られていた (第3節参照)。第3B号溝跡は、北端が第2号跡の東側に接し、南下して第4号跡に切られた後、第1号墳の北側周溝付近より再び確認される。ここで第8号跡が東に分岐する。約2.0m南下した所で第3C号溝跡が分岐して30cm程で第8号跡に連絡する。さらに5.0m程南進して東側の第8号跡、西側の第13号溝跡に接し、第16号溝跡と重複する付近で不明となる。確認長は推定部分を含め約4.5m程である。第3A号溝跡は第3B号跡の西側に部分的に確認されたもので、詳細は不明。第3B号跡は、幅50～70cm、現存の深さは15～25cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって僅かに下降していた。第3C号跡は、幅70cm、現存の深さは20cm程で、壁は外傾する。覆土はいずれも人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。

遺物 第2号跡で記した通りで帰属は判然としない。

第4号溝跡 (第193・194・196・210図、図版21)

遺構 8C・9Cグリッドに位置する。北端は調査区外に延び、南端は第13B号溝跡と重複してその先は不明となる。この間、中央部で第1号墳と第3B・7号溝跡、中央やや北寄りで第17号溝跡と重複し、これらを切る (第3節参照)。確認長は約13.0m。幅40～80cm、現存の深さは6～34cmで、壁は外傾する。覆土は人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。

遺物 第2号溝跡で記した通りで帰属は判然としない。

第5A・5B号溝跡 (第193・196・209・210図、図版21)

遺構 7C・7D・8C・9Cグリッドに位置する。中央部が第1号墳、第10A・10B・11号溝跡と重複し、第1号墳、第11号跡を切るが、第10A・10B号跡との新・旧関係は判然としない (第3節参照)。北端と南端は調査区外に延びる。確認長は約22.5m。幅1.0～1.4m、現存の深さは40～70cmで、壁は2段になり、下部は僅かに外傾、上部は大きく外傾する。底面の北と南はほとんど高低差が見られなかった。第5B号溝跡は第5A号跡の東側に一部が遺存したもので、底面が7～8cm高い。覆土は人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。

遺物 覆土中より出土の灰器の甕 (第209図中・近世5) を図示した。5の甕は常滑窯産、推定口径が30cmと大形、14世紀代。

第6号溝跡 (第193・194・210図、図版21)

遺構 7D～10D・8Cグリッドに位置する。北端、南端は調査区外に延びる。中央部が第1号墳と重複し、これを切る (第3節参照)。幅70～170cm、現存の深さは3～17cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって下降する。覆土は人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第7号溝跡 (第193・194・196・210図、図版21)

遺構 8B・8C・9Cグリッドに位置する。西寄りで第1号墳、中央部から東寄りで第3A・3B・4・8号溝跡と重複し、第1号墳・第3A・3B号跡を切り、第4・8号跡に切られていた(第3節参照)。通常の溝跡とは形状が異なるもの、溝跡群内に所在し、覆土の状況が他の溝跡と類似することから溝跡と名称した。南北1.3m、東西4.4mの不整形円形の範囲に、径20～50cmの円形もしくは楕円形で硬化面を伴う浅い凹みがあり、北に連続して並び、所謂波板状丘疹と呼ばれる状況に類似している。一般には道路状遺構として認識されているが、本跡の位置及び覆土から溝跡に含めた。本来は性格不明遺構として区別するべきものであったかも知れない。覆土は人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第8号溝跡 (第193・194・196・210図、図版21)

遺構 7C・8C・9Cグリッドに位置する。北半部が第1号墳及び第3B・3C・7・9A・13B号溝跡と重複し、第1号墳、第3B・3C・7・13B号跡を切るが、第9A号跡とは連絡し、新・旧関係は判然としない(第3節参照)。北端は第1号墳の周溝と重複部分から分岐して南進し、南端は調査区外に延びる。確認長は約16.0m。途中、第3C・9A号跡が合流するとともに、第3B号跡と接する。幅70～80cm、現存の深さは37～52cm、壁は外傾する。底面は北から南に向かって下降する。覆土は人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第9A・9B号溝跡 (第193・194・210図、図版21)

遺構 8Cグリッドに位置する。第9A号溝跡は全体が第1号墳、北寄りで第11号溝跡と重複し、これらを切る(第3節参照)。北端は第8号溝跡より分岐し、南端は5.5m程南進して第8号跡に合流する。幅35～40cm、現存の深さは22～50cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって僅かに下降する。第9B号溝跡は第9A号跡の東側に部分的に確認されたのみで詳細は不明。覆土は人為的埋没であった。遺物の出土はなかった。

第10A・10B号溝跡 (第193・194・196・210図、図版21)

遺構 8Cグリッドに位置する。全体が第1号墳、第5A・11号溝跡と重複し、第1号墳を切り、第5A号跡に切られていたが、第11号跡との新・旧関係は判然としない(第3節参照)。前述の重複関係で本来の規模・形状は明確にしないが、遺存部分は東に向かってやや膨らむ弧状で、長さ2.3m、内側を延長すると半径1.2m程の円形となるが、当初より弧状に敷けられていたと推察される。また、全体の幅60cm、外側の深い部分(第10B号溝跡)の幅が20cm、内側の浅い部分(第10A号溝跡)の幅は40cm、現存の深さは内側が50cmで、外側が34cmであった。前述の通り第10A・10B号溝跡としたが、土層観察では明確に分層されなかった。覆土は人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第11号溝跡 (第193・194・210図、図版21)

遺構 7C・8C・9Cグリッドに位置する。全体が第1号墳、南半部は第5A・5B・9A・10A・10B号溝跡と重複すると考えられるが、第1号墳を切り、第5A・5B・9A号跡に切られていた他は新・旧関係を明確にし難い(第3節参照)。北端は第1号墳の北側の周溝付近より確認され、緩やかに西に向かって延び、第1号墳の主体部を横断した後、第9A号跡に切られていた。また、第1号墳の南側周溝付近より再び南進し、南端は調査区外に延びる。推定部分を含めた確認長は約16.5mとなるが、第1号墳の南側周溝の外(南)側の部分は第9B号溝跡であった可能性も全く否定しない。幅38～65cm、現存の深さは10cm程、壁はやや外傾する。底面は北から南に向かって僅かに下降する。覆土は人為的埋没の後、自然埋没であった。遺物の出土はなかった。

第12号溝跡 (第193・210図、図版21)

遺構 8B・8Cグリッドに位置する。北西端の第2号溝跡、南東端の第14A・14B号溝跡との間に3.8m程が確認され、両端はこれらに切られていた。幅50cm、現存の深さは10～15cm、壁は外傾する。底面は中央部から北西、南東に向かって僅かに下降していた。覆土は人為的埋没。遺物の出土はなかった。

第13A・13B号溝跡 (第193・194・210図、図版21)

遺構 7C・8Cグリッドに位置する。第13A号溝跡は北西端が第2号溝跡、北部が第4号溝跡、南寄りで第16号溝跡、南端部で東側の一部が第13B号溝跡と重複し、これらに切られていた。北西端より1.5mで第13B号跡が分岐し、それぞれ島状の部分を持ちながら南東流するが、島状の部分の南東で第16号跡と重複し、これに切れ、その先は調査区外に向かうが、東側の一部が第13B号跡に切られる。確認長は推定部分を含めて約11.5m、幅30～100cm、現存の深さは10cmで、壁は外傾する。底面は北西から南東に向かって僅かに下降する。第13B号跡は前述の通り、第13A号跡の東側を南東流し、南端は調査区外に延びる。この間、中程で第3B号溝跡と接して、南部では第13A号跡を切り、第8・16号跡に切られていた。確認長は約10.5m、幅90～120cm、現存の深さは20cm程で、壁は外傾する。底面はほぼ平坦で、北西と南東の高低差はほとんど見られなかった。覆土はともに人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第14A・14B・14C号溝跡（第193・210図、図説21）

遺構 7B・7C・8B・8Cグリッドに位置する。第14A号溝跡は、北西端が第2号溝跡と重複しこれに切られる。重複部分より2.7m程南東で底面が明瞭となり、これより2.0m南下して第14C号溝跡と分岐する。そこから、第14A・14B号溝跡は第12号溝跡と重複してこれを切り、南西に向かって併走するが、途中で島状の部分があり、これを挟むように南下した後、両者は合流し再び第14A号跡のみとなる。第14A号跡の確認長は12.0m、幅30～80cm、現存の深さは13～17cmで、壁は外傾する。また、北西側に長さ70～170cm、幅20～30cm、現存の深さは5～10cmの溝状の掘り込みが4条確認されたが、性格は不明。第14B号跡の確認長は4.1m、島状の部分の南で第14A号跡に合流し、その先は不明。第14C号跡は、前述の第14A・14B号跡との分岐点から1.5m程で第16号溝跡と接して消滅する。幅80～100cm、現存の深さは10～15cm、壁は外傾する。覆土はいずれも人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第15号溝跡（第193・210図、図説21）

遺構 7Cグリッドに位置する。北端は第16号溝跡との接点から、南端は調査区外に延びる。第16号跡との新・旧関係は判然としない。確認長は約2.0m、幅60～120cm、現存の深さは5～6cm程で、壁は外傾する。底面は中央部から南・北両端に向けて僅かに下降する。覆土は人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第16号溝跡（第193・210図、図説21）

遺構 7C・8Cグリッドに位置する。北東部が第3B・13B号溝跡、中央部で第13A・14C号溝跡と重複し、これらを切る。南側で接する第15号溝跡との新・旧関係は判然としない。本跡は他の溝跡とは形状が異なり、北東・南西を長軸とし、長さ4.4m、最大幅3.0m、南西に向かって順状に広がる。また、底面から壁面にかけて径10～60cmの円形もしくは楕円形の硬化面を伴う浅い凹みが多数認められた。しかし、第7・17号溝跡のように規則性をもって並ぶものではなかった。底面は中央部に向かって凹み、現存の深さは20～25cm程であった。覆土は人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第17号溝跡（第193・196・210図、図説21）

遺構 9B・9Cグリッドに位置する。南西部が第2号溝跡、中央部で第3B・4号溝跡と重複し、これらに切られていた。本跡は他の溝跡とは形状が異なり、北東・南西を長軸とし、長さ8.3m、最大幅約3.0m、南西に向かって順状に広がり、中程で西半部がやや南寄りになる。また、底面から壁面にかけて径25～60cmの円形及び楕円形の硬化面を伴う浅い凹みが確認された。これらの凹みは長軸と直交するように直線的に連続して並び、現存の最大長は2.7m。また、これらは北東端では硬化面が単体であったが、他は複数の直線的に並んでおり、各列の間隔は60～70cmで設けられていた。所謂波板状瓦版の形状を呈する。また、全体的に北東から南西に向けてやや下降していた。覆土は人為的埋没の後、自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第18号溝跡（第197・208・210図、図説19）

遺構 8G・8Hグリッドに位置する。北西部が第2号溝跡、第4号土坑と重複し、これらを切る（第3・4節参照）。また、中央やや西寄りで第24号溝跡と接するが、新・旧関係は不明。調査区南端より西に延びた後、丸床をもって南に折れて南進する。両端はそれぞれ調査区外に延びる。確認長は約13.5m、本跡の南東側が一段低くなっており、上幅70～90cm、現存の深さは溝の外側が40cm、内側が15cmで、壁は外傾する。底面は東から南西に向かって僅かに下降する。覆土は自然埋没の後、人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第19号溝跡（第208・210図）

遺構 8J・8K～10Kグリッドに位置する。北東端は調査区内にあり、南西端は調査区外に延びる。途中僅かに南東に膨らむ弧状となる。確認長は約24.0m、本跡の南東側が一段低くなっており、上幅100～180cm、現存の深さは溝の北西側が42cm、南東側が15cmで、壁は外傾する。底面は北東から南西に向かって下降する。覆土は自然埋没の後、人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第20号溝跡（第208・210図）

遺構 17L～17Nグリッドに位置する。中央部が第20号竪穴居跡と重複し、これを切る（第1節参照）。西端は調査区外に延び、東側はこれより約17.0mの位置で消滅する。確認長は17.0mであるが、第3次調査においても本跡の延長と思われる溝跡が西側（E区）で調査されており、合わせた確認長は約60.0mで、西はさらに調査区外に延びていた。幅60～70cm、現存の深さは20cmで、壁は北側にほぼ直立し、南はやや外傾する。底面は西から東に向かって緩やかに下降する。覆土は自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第21号溝跡（第208・210図）

遺構 8I～10Iグリッドに位置する。北端は風倒木痕付近で確認され、南端は調査区外に延びる。確認長は12.0m、幅90～120cm、現存の深さは18～50cmで、壁は2段になっており、下部はやや外傾し、上部は大きく外傾している。底面は北から南に向かって下降する。覆土は自然

埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第22号溝跡 (第208・210図)

遺構 8I～10Iグリッドに位置する。北部が第7号竪穴住居跡と重複し、これを切る (第1節参照)。北端は第7号跡の中央やや西寄りの覆土中で確認され、南端は調査区外に延びる。確認長は約14.0m。幅36～50cm、現存の深さは10～25cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって下降する。覆土は自然埋没の後、人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第23号溝跡 (第10・208・210図、図版3)

遺構 8I～10Iグリッドに位置する。中央部が第7号竪穴住居跡と重複し、これを切る (第1節参照)。北端・南端ともに調査区外に延び、第7号跡の中央部を南北に縦断していた。確認長は約19.0m。幅100～220cm、現存の深さは15～60cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって下降する。覆土は自然埋没の後、人為的埋没と考えられる。

遺物 土師器の小片が少量出土したものの、図示し得るものはなかった。

第24号溝跡 (第197・209・210図、図版19)

遺構 8G・9Gグリッドに位置する。第2号墳の周溝の内側に確認され、第2号墳の主体部を切る (第3節参照)。南端は第18号溝跡と重複するが、新・旧関係は判然としない。確認長は約4.5m。幅10～90cm、現存の深さは5～30cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって下降する。覆土は自然埋没と考えられる。

遺物 覆土中より出土した近世・近代の陶器の皿 (第209図中・近世14) を図示した。14は鉄輪を施した径12.4cmと小振りの皿で、瀬戸・美濃産、19世紀。灯明具の可能性がある。

第25号溝跡 (第5・208・210図、図版3)

遺構 8E～10Eグリッドに位置する。南側で第3号竪穴住居跡と重複し、これを切る (第1節参照)。北端は調査区外に延び、南端も第3号跡の中央部を通して調査区外に延びるが、覆土中であって判然としない。確認長は約21.0m。幅60～70cm、現存の深さは20～30cmで、壁はやや外傾する。底面は北から南に向かって下降する。覆土は自然埋没の後、人為的埋没と考えられる。

遺物 土師器の小片が出土したものの、図示し得るものはなかった。

第30号溝跡 (第212図、図版16)

遺構 35U～37Uグリッドに位置する。北端は東側の第32号溝跡と重複し、これを切り、西側の第31号溝跡と連結する。また、南端は調査区外に延びるが、中央やや北寄りで第121号竪穴住居跡、南端部で第119号竪穴住居跡と重複し、これらを切っていた (第1節参照)。確認長は約25.0m。幅70～100cm、現存の深さは30cm程で、壁は外傾する。底面は北から南に向かって下降する。覆土は自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の小片が認められたものの、図示し得るものはなかった。

第31号溝跡 (第208・212図、図版16)

遺構 37T～37U・38N～38Uグリッドに位置する。東端は前述の第30号溝跡と連結し、西端は調査区外に延びる。中央やや西寄りの南辺が第39B号溝跡と重複し、これを切る。また、東端部で第21号竪柱建物跡と重複し、これを切る (第2節参照)。確認長は約67.5m。幅90～140cm、現存の深さは60～75cmで、壁は2段になり下部はやや外傾、上部は大きく外傾する。底面は西から東に向かって下降する。覆土は自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第32号溝跡 (第212図)

遺構 37U～37Wグリッドに位置する。西端は第30・31号溝跡との連結部分、東側は約16.5mの所で第33号溝跡に切られるが、その東側に分岐して延びる溝跡がある。位置的に本跡の延長と考えられ、確認長は約25.5mとなり東端は自然消滅していた。また、中央部で第37号溝跡と連結し、中央やや東寄りで第36A・36B・37号跡と重複し、これらを切っていた。なお、西端も第30・31号跡によって切られているが、38Tグリッドより西側の第31号跡の南側で断続的に確認された第39A・39B・40号溝跡などが本跡の延長であった可能性も否めない。残存部分で幅70～180cm、現存の深さは5～10cmで、壁は外傾する。底面は西から東に向かって下降する。覆土は自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第33号溝跡 (第208・209・212図、図版17・21・29)

遺構 35V・36V・36W・37W～40W・40X～42X・42Y～47Y・47X・48Xグリッドに位置する。南端は西に屈曲して第37号溝跡と重複し、これを切り、調査区外に延びる。北進して44Yグリッドで一旦東側の調査区外へ出るものの、再び45Yグリッドから調査区内に戻ると推察され、

北端は調査区外に延びる。この間、南半部で第20・23号独立建物跡、第32号溝跡、中央やや北寄りで第36A号溝跡と重複し、これらを切る。確認長は推定部分を含め約135.0mで、今般調査区では最長となる。幅70～200cm、現存の深さは20～30cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって僅かに下降していた。覆土は自然埋没と考えられる。

遺物 土師質土器の皿（第209図中・近世11）、鉢（同前13）、器種不明の石製品（同前20）を図示した。11の皿は底径4.8cm、底部切り、在地産、15世紀代。13の鉢は在地産、15～16世紀代。20の石製品は底面が径3.5×4.0cmの長方形、高さ5cm、上面が径3.0×3.6cmの不整形円で、幅4cm、長さ12cm、深さ18cmの凹みを設けている。凝灰岩製で6面が磨かれており、上面の凹みに何かを差し込んで立てる、台のような用途と思われる。その他、図示しなかったが、近世以降の陶片が出土している。

第35号溝跡（第208・212図、図版17）

遺構 38W・38X～42X・42Y・43Y～47Yグリッドに位置する。北端は46Y・47Yグリッドで第33号溝跡より分岐し、南端は第23号独立建物跡との重複部分より南側が判然としなが、第32号溝跡の延長部分に連結していたと推察される。また、前述の第33号跡と同様に43Yグリッドで一旦東側の調査区外に出るが、45Y～47Yグリッドにおいて再び確認された。なお、41X～42Xグリッドにおいて一旦分離しているが、第33号跡の東側を併走する点及び規模・形状などから、同一の溝跡と判断した。南半部で第23・25号独立建物跡と重複し、これらを切る（第2節参照）。確認長は推定部分を含め約88.0mであった。幅30～70cm、現存の深さは10～20cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって僅かに下降していた。覆土は自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第36A・36B号溝跡（第208・212図）

遺構 37W～41W・41X～43X・43Yグリッドに位置する。第36A号溝跡は南端が第32号溝跡、北端は第33号溝跡と重複し、これらに切られていた。また、第42・43号溝跡の延長と推定される溝跡と交差するが、新旧関係は判然としない。さらに、南半部で第23号独立建物跡、中央やや北寄りで第41号土坑と重複し、これらを切る（第2・4節参照）。確認長は約61.0mで、東端に第36B号溝跡が断片的に確認された。第36B号跡から第36A号跡に繋り直しが行われたと推察される。幅40～90cm、現存の深さは5～10cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって下降していた。覆土は自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第37号溝跡（第212図）

遺構 35V～37Vグリッドに位置する。北端は第32号溝跡と重複しこれに切られる。南端は調査区外に延びるが、一部第33号溝跡と重複し、これに切られる。確認長は約26.0m、幅70～100cm、現存の深さは10～15cmで、壁は外傾する。底面は北から南に向かって下降する。覆土は自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第39A・39B号溝跡（第208・212図）

遺構 38N～38Qグリッドに位置する。第39B号溝跡は、第31号溝跡の南端を併走し重複してこれに切れ、東側に第40号溝跡と重複して、第39A・39B号跡ともに第40号跡に切られていたことから部分的な確認に留まる。西端寄りで第122号竈穴居跡と重複し、これを切る（第1節参照）。確認長は約28.5m、幅30～50cm、現存の深さは10～20cmで、壁は外傾する。底面は西から東に向かってやや下降する。第39A号跡は第39B号跡の南側に部分的に確認されたのみで、詳細は不明。第39A号跡から第39B号跡への繋り直しが考えられる。覆土はともに自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第40号溝跡（第208・212図）

遺構 37S・37T・38Q～38Sグリッドに位置する。西端寄りで、第39A・39B号溝跡と重複し、これらを切る。西端は38Qグリッドの西端付近、東端は調査区内に設けられた調査区外地向かって延び、その先は判然としない。確認長は約30.0m、幅30～70cm、現存の深さは8～20cmで、壁はやや外傾する。底面は西から東に向かって僅かに下降する。覆土は人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第41号溝跡（第212図）

遺構 37P・37Qグリッドに位置する。北西端は第123号竈穴居跡と重複し、これを切る（第1節参照）。南東に向かって緩やかな弧状に延びて止まる。確認長は約12.0m、幅50～70cm、現存の深さは15～20cmで、壁は外傾する。底面はほぼ平地で、北西と南東の高低差はほとんど見られなかった。覆土は自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第42号溝跡（第208・209・212図）

遺構 43S～43U・44Sグリッドに位置する。西端は第43号溝跡と重複し、これに切られる。なお、第1号方形周溝遺構は、第43号跡に切られているが（第7節参照）、その性格、焼成時期が不明であり、本跡と同時に設けられたものが第43号跡の隅削で本跡が切られたことにより、別の遺構に見えている可能性もある。東端は調査区内に設けられた調査区外地向かって延び、その先は不明となる。なお、42Xグリッドで確

認められた第36A号溝跡と直交する溝が本跡及び第43号跡の延長の可能性がある。確認長は約28.5m、前述の推定地を含めると、約55.5mとなる。幅70～100cm、現存の深さは30～40cmで、壁は外傾する。底面は西から東に向かって僅かに下降する。覆土は人為的埋没と考えられる。

遺物 器種不明の鉄製品（第209図中・近世17）を図示した。17の鉄製品は長さ8cm、断面は4.0×4.5mmのほぼ方形、一方の先端が尖り釘状であるが、頭部が見られず器種不明とした。その他、図示しなかったが、近世以降と考えられる磁器片が出土している。

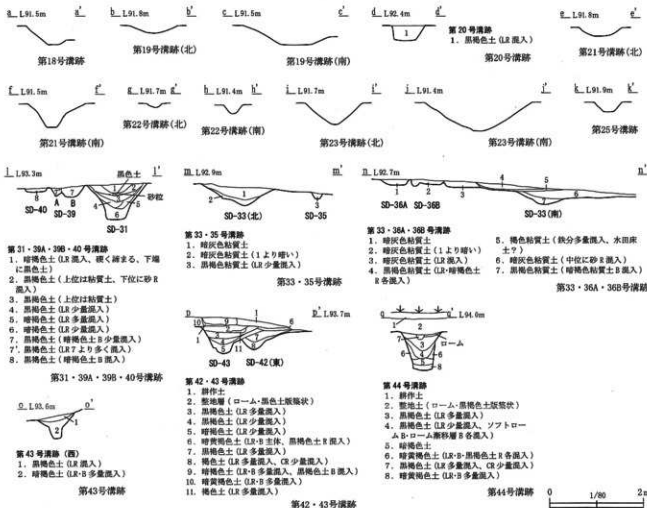
第43号溝跡（第208・212図）

遺構 43S～43U・44Q～44Tグリッドに位置する。中央やや西寄り第1号方形周溝遺構、第42号溝跡と重複し、これらを切る（第7節参照）。西端は調査区外に延び、東端は調査区内に設けられた調査除外地に向かって延び、これより東は不明となる。なお、前述の42Xグリッドで確認された第36A号溝跡と直交する溝が本跡及び第42号跡の延長の可能性がある。それを含めた確認長は約78.5m、幅90～130cm、現存の深さは50～80cmで、壁は2段になり、下部はやや外傾、上部は大きく外傾する。底面は西から東に向かって下降する。覆土は自然埋没であった。遺物の出土はなかった。

第44号溝跡（第208・212図、図版21）

遺構 46P・46Q・47Qグリッドに位置する。北東端及び南西端はそれぞれ調査区外に延びる。本跡の上部には平行して東西に並ぶ4条の溝状の擾乱が確認された。確認長は8.5m、幅90cm、現存の深さは70cmで、壁は急傾斜で立ち上がり、上部は大きく外傾する。底面はほぼ平坦で、北東と南西でほとんど高低差が見られなかった。覆土は人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

以上の溝跡のうち、A区南西に確認された第1～17号溝跡群は、一般的な形状の溝跡の他に第7・16・17号跡のように波板状底とみられるものもあるが、覆土はいずれも水流があったことを示している。しかし、北側と南側が調査区外の為、これらの溝跡の用途は不明と言わざるを得ない。また、中世の遺物が数点出土しているが、溝跡の縄文時期と直結するかどうかは判然としない。さらに、第18～44号溝跡においても、第24号跡から近世・近代の陶器、第33号跡から中世の土器、時期不明の石製品及び近世以降の陶片、第42号跡から時期不明の鉄製品や近世以降と考えられる磁器片が出土した程度で、各溝跡の縄文時期を特定し得る状況にはなかった。他の遺構との重複関係を見ても、古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、中世以降と推定される掘立柱建物跡や土坑などよりも後出である。同様の位置もしくは類似の位置に繰り返し溝が開削されていることから、耕作地の区画及び水田の水路等の用途であったと推察され、これらは近世・近代の所産と考えられる。



第208図 第18～23・25・31・33・35・36A・36B・39A・39B・40・42～44号溝跡

第9節 その他の遺物 (縄文・中・近世)

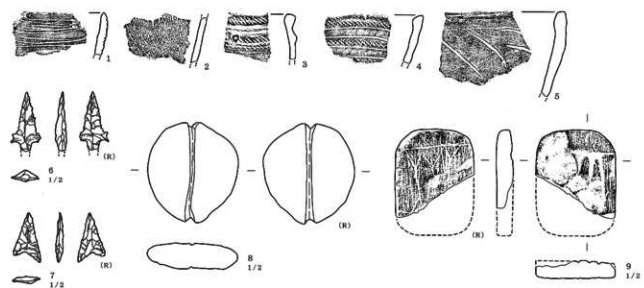
縄文時代の遺物はいずれも後世の遺構からの出土である。中・近世の遺物は遺構外及び井戸跡・溝跡出土のものを集約して図示した。

1. 縄文時代 (第209図)

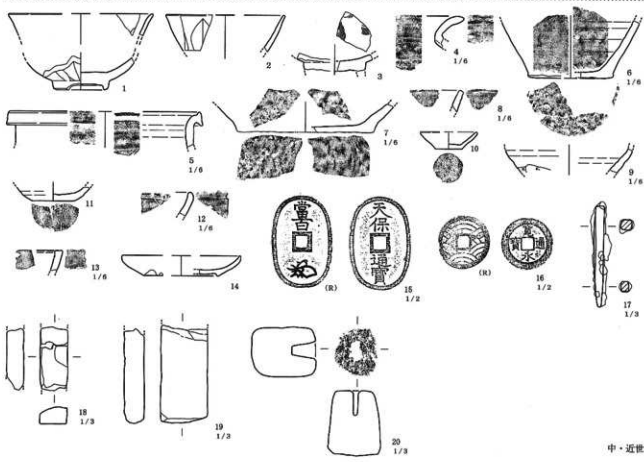
1～5は後期～晩期の深鉢形土器の口縁部・体部の破片である。1は竹筥による集合状織文を施す。2は機糸による網目状文。3・4は帯織文を施す精巧製土器。5は粗い沈線に施した粗製土器。6は有茎の石甕、チャート製。7は無茎の石甕、チャート製。8は両面に溝を刻む石甕、泥質ホルンヘルズ。9は岩板で両面の中央に直紋文を刻むが、片面は鏡状の状態であり、未成品と思われる。泥岩製。1は第55号、2は第72号、3は第118号、4は第6号、5は第39号、6は第20号、7は第98号、8は第100号、9は第85号壁穴住居跡より出土した。

2. 中・近世 (第209図、図説29)

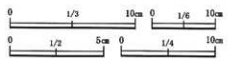
1・2は青磁の鉢蓋・文筒、龍泉窯系、13～14世紀。3は白磁の劃花蓮花文碗、定窯系、12～13世紀。4は拓器の甕、甕系窯産、12～13世紀。5～7は拓器の甕、8は壺、9は鉢、常滑窯産、14～15世紀。10・11は土師質土器の皿、在地産、15～16世紀。12は内耳土器、13は鉢、在地産、15～16世紀。14は陶器の皿、灰釉を施す、瀬戸・美濃窯、19世紀。15は天保通寶百銅銭、初年天保6(1835)年。16は寛永通寶四文真鍮銭、背文21波、初年天明和5(1768)年。17は器種不明の鉄製品。18・19は石製品、磁石、磁灰岩製。20は器種不明の石製品、磁灰岩製。1・3・7・19は第2～4号溝跡、2はA区表探、4は1次Bトレンチ(A区)、5は第5号溝跡、6は第6号井戸跡、8は31Qグリッド、9は第5号井戸跡、10・12・15・16はC区表探、11・13・20は第33号、14は第24号、17は第42号溝跡、18は第3号井戸跡より出土した。



縄文時代



中・近世



第209図 その他の遺物（縄文、中・近世）

第4章 総括

第1節 土地利用の変遷の概略

今次調査区は、第1・2次合わせて約31,000㎡で、第3次調査分を含めると約41,000㎡を調査したことになる。しかし、地形などから推定される遺跡全体の2分の1程と考えられる。ここでは、今次調査成果に、第3次調査の成果及び近隣遺跡の状況を採用しつつ、本遺跡における土地利用の変遷を概観する。

旧石器時代 今次調査では遺構・遺物とも確認されなかったが、第3次調査では後世の遺構の掘土中より、ナイフ形石器、石刃などが出土し、該期からの土地利用が知られる。

縄文時代 今次調査では、早・前期頃の陥し穴と考えられる土坑（第11・40～42号）、性格不明の土坑（第4号）などが確認された。第40～42号土坑は遺跡の東側に所在する小支谷（沢）の落ち際に位置する。また、竪穴住居跡は確認されなかったが、後期末葉から晩葉頃の土器片や石鏃、石鏃、岩版などが出土している。第3次調査では、中期前期（五領ヶ台式期）1軒、後期末葉（安行式期）3軒の竪穴住居跡が確認されている。また、早期（野島式）、中期（加曾利E1式）、後期～晩期（堀之内式、加曾利B式、安行式、大溝式）の土器、石器が出土している。したがって、規模の大きな集落は形成されなかったものの、当地が長い間にわたって利用されていたことが知られる。

弥生時代 この時期の遺構・遺物とも確認されなかったが、第3次調査では中期（野沢式）、後期（二軒式）の土器片が出土した。

古墳時代 前期には集落が形成され、今次調査では、計28軒の竪穴住居跡が確認された。該期の竪穴住居跡の分布状況を見ると、A区の中央部からその西側と、E区の南半部からA区の南東部の2群に集中する状況が認められる。また、それぞれ径100m程度の範囲にまとまりが見られる。竪穴住居跡は最大が第13号竪穴住居跡の62.32㎡、推定では第86号竪穴住居跡の68.06㎡である。最小は第45号竪穴住居跡の6.89㎡である。仮に25㎡以上を大型、15～25㎡を中型、15㎡以下を小型と大別すると、大型13軒、中型5軒、小型10軒の割合となり、大型と小型が多数を占める。また、第3次調査では14軒の竪穴住居跡が確認されており、合計42軒となる。未調査部分を含めると60軒以上の軒数が推測され、該期の集落跡としては市内でも最大級の集落跡と思われる。近隣では、北西方約350mの花の木町遺跡で8軒の竪穴住居跡が確認されており、本遺跡よりやや遅れて形成された集落と思われる。また、当地におけるこの時期の首長墓は南東方約5.6kmの茂原古墳群と考えられている。大日原古墳（墳丘長約35m）、愛宕塚古墳（墳丘長約50m）、榎山古墳（墳丘長約60m）の3基の前方後方墳が所在する。田川右岸のこの古墳群周辺は前期の集落跡の存在が多数知られるものの、いずれも調査で確認された竪穴住居跡の軒数は少ない。その中で、南南東方約5.6kmの西下谷遺跡では計16軒の竪穴住居跡と掘立建物跡1棟（宇都宮市調査分）が確認され、二次期の集落として据えられている。いずれにせよ、当地における前期の集落跡は田川と淀川の間に南北に延びる宝木台地上に密に所在するようであるが、東側の田川沿いが多い。

中期の遺構・遺物とは確認されなかった。第3次調査においても同様である。この時期は集落が地へ移転したと推察される。市内における該期の動向を概観すると、市域の中央部を南流する田川の左岸では、東谷・中島地区において大規模開発に伴い広大な面積の発掘調査が実施され、貴重な成果が挙げられている。殊に、古墳時代中期中葉以降の複数の豪族館舎を含む、大集落の存在が確認されている。また、その近隣には双子塚古墳（墳丘長約73m）、笹塚古墳（墳丘長約105m）など大型前方後方墳の首長墓が所在する。後塚古墳は二重周溝に外堤が設けられ、祭壇（墓）域は200mを超えるもので、中期としては県内最大級である。時を同じくして、田川右岸には大型前方後方墳の塚山古墳（墳丘長約98m）が築かれ、その後塚山西古墳（墳丘長約63m）や塚山南古墳（墳丘長約58m）などが築かれている。当然この時期には、東谷・中島地区と同様に該期の集落が多数存在したと思われるが、大規模開発に伴う発掘調査の機会に恵まれておらず、断片的な知見に留まっている。周辺の該期の集落遺跡としては、雷電山遺跡、おしめ尽遺跡、関道遺跡、北若松原遺跡、若松原遺跡などが知られる。いずれの遺跡からも所謂古式須恵器が出土しており、雷電山遺跡や北若松原遺跡では多数の石製祭具（模造品）の出土があった。これらの田川右岸の遺跡は、塚山古墳群より200m～2.5km程度の位置に所在しており、今後も周辺地域の発掘調査に際して副産物の増加が見込まれる。この時期に淀川と田川に挟まれた宝木台地上の集落分布に変化が生じたものと推察される。なお、北方約700mの柿の内遺跡において中期後半と末葉の住居跡が各1軒確認されており、当該地域から該期の集落がすべて移転したとは言い難い。また、本遺跡の北方約400mの辻の内遺跡南部において、5世紀後半もしくはこれを若干遅る時期と考えられる墳丘が1基確認されている。墳丘及び主体部は既に削平されたと考えられ、周溝内より土師器、須恵器等がまとまって出土している。集落がすべて移転していながら古墳が築造されるというのも理解し難い事である。したがって、周辺に未確認の該期の集落跡の存在を想定するのが妥当であろう。

古墳時代後期になると本遺跡に再び集落が形成される。今次調査では計46軒の竪穴住居跡が確認された。竪穴住居跡の分布を見ると、調査区全体に分布が見られるものの、C区の北寄りに集中している。この辺りが集落の北限と思われる。竪穴住居跡は、最大が第26号竪穴住居跡の47.6㎡、最小が第115号竪穴住居跡の7.43㎡、前述の25㎡以上を大型、15～25㎡を中型、15㎡以下を小型とすると、大型12軒、中型18軒、小型10軒で、大型がやや少ない。大型は建て替え拡張が見られるものもあり、中型のものが多かったと考えられる。第3次調査においては14軒確認されており、合計60軒となる。西側の未調査部分への広がりやを考慮すると100軒以上の竪穴住居跡の存在が推察される。しかし、時間幅を考えると、同時に存在したものは20軒以下であったと思われる。現在確認されている周辺の該期の集落跡は、前述の辻の内遺跡や柿の内遺跡などが挙げられるが、やはり田川右岸寄りになりようである。淀川左岸には知られていない該期の集落跡がまだ存在すると考えられる。

また、A区南端部において、後期前半と考えられる円墳が2基確認された。第1号墳は、後世の溝渚群との重複により、墳丘や周溝、主体部なども削平されていて、遺物もほとんど出土しなかった。唯一、部分的に遺存した主体部より鉄製の馬具（轡）が1点出土している。内溝槽円形

鏡板を伴うが、鏡板がやや大振りであることから古墳時代後期前半と推察される。また、第1号墳の東約28mに第2号墳が確認された。遺物の出土はなかったが、遺構及び覆土の状況から該期のものと考えられる。なお、第1号墳の北・西・南側に調査区外となっており、これら以外に古墳が存在したか否かは不明である。近隣の古墳としては、前述の辻の内遺跡の円墳が半世紀以上前に築かれたと考えられる。また、本墳の北東方約150mに西川田里宮神社古墳が所在するが、こちらは未調査であり、詳細は明確にしない。あるいは、これらが1つの群を構成していた可能性も全くはない。

奈良・平安時代 この時期の集落跡は周辺地域においても急増し、第1図に示した計40ヶ所の遺跡のうち、25ヶ所が該期の集落遺跡であった。今次調査区で奈良時代の住居跡は21棟確認された。竪穴住居跡の分布状況は、調査区全体に認められるが、B区の中央から西寄り、C区の中央から北寄りには見られず、それぞれ集落の北西限、北限であったと考えられる。竪穴住居跡は、最大が第6号竪穴住居跡の24.03㎡（推定では第119号竪穴住居跡の25㎡）、最小は第56号竪穴住居跡の6.76㎡である。前述の15～25㎡の中型が9軒、15㎡以下の小型が12軒で小型がやや多い。第3次調査では13軒の竪穴住居跡が確認されており、計34軒となる。未調査部分を含めると50～60軒程度と推定される。

平安時代の竪穴住居跡は26棟確認された。分布状況を見ると、A区に限られる。竪穴住居跡は最大が第76号竪穴住居跡の22.04㎡、最小は第47号竪穴住居跡の7.54㎡である。前述の15～25㎡の中型が10軒、15㎡以下の小型が16軒で、小型の竪穴住居跡の占める割合がより多くなる。第3次調査では9軒確認されており、合計39軒となるが、その分布状況はD区とE区の南半部に限られる。奈良時代に比べて竪穴住居跡の分布範囲が狭く、密度が高い。未調査部分を含めると60軒以上と推定される。

なお、該期の遺構としては、この他に井戸跡1基（第1号井戸跡）、竪立柱建物跡10棟などがある。第1号井戸跡は、出土遺物から帰属時期を特定出来なかったが、古墳時代後期の第12号竪穴住居跡を切って掘り込まれており、上部が方形、下部が円形という掘削形状から、該期の遺構と判断した。竪立柱建物跡は、B・C区では中・近世と思われる竪立柱建物跡が主体を占めるものの、A区で確認された竪立柱建物跡は、柱間方や建物跡の形状から古代のものと考えられる。第4号竪立柱建物跡は、遺構確認時に須恵器の長頸壺が出土しており、該期の遺構と推定された。建物跡の規模・形状は1×1間、2×1間、2×2間、2×3間の他、桁行の一方が2間で、もう一方が3間という変則的なもの（第4・7号跡）も見られた。出入口を設ける為に柱間を変更したと考えられる。第3次調査では、21棟の竪立柱建物跡が確認されたが、該期のものは6棟程度である。

なお、周辺の該期の遺構は、前述の辻の内遺跡の他、北方約700mの西の内遺跡、東方約70mの葛田境遺跡、同約100mの上ノ畑遺跡、南西方約120mの合ノ畑遺跡など多数存在する。また、北東方約600mの宇都宮環状線と栃木街道バイパスに伴う旧辻の内遺跡の調査では、100軒以上の竪穴住居跡に加え、四面庇の三方に孫庇をもつ広堂と見られる大型の竪立柱建物跡が確認されて注目された。今次調査で確認された建物跡は側柱式が主体であるものの、小規模なものも多く集落内の倉庫的な用途の建物と推察される。

中・近世以降 該期の遺構としては、竪立柱建物跡26棟、土坑74基（時期不明含む）、井戸跡7基、方形竪穴3基、円形・方形円溝遺構3基、溝跡48条（時期不明含む）などが挙げられる。竪立柱建物跡は、出土遺物から帰属時期を明確にし得なかったが、柱間方や建物跡の規模・形状などから想定した。柱間方は古代の建物に比べて小振りで柱間が不均等、柱並びが不揃いなものが多い。しかし、小振りな柱間方であっても、比較的整った形状の建物跡も見られ、4×1～2間、3×2間、3×1間とやや規模の大きなものが見られる。多くは1×1間、1×2間、2×2間が主体で、これらは古代の竪穴住居跡の分布が疎となるB・C区に多く認められた。第3次調査では15棟確認され、合計41棟になる。井戸跡は計7基確認されたが、A区の北端からB区、C区の南端部に集中して見られた。また、これらのうち5基（第3～6・8号井戸跡）は上部が外傾し、下部が円筒状となる断面であったが、他の2基（第2・7号井戸跡）は全体が円筒状で、東側の斜面寄りに所在する。前者は中世と考えられるが、後者は近世以降のものと考えられる。方形竪穴は3基（第1～3号方形竪穴）確認された。いずれもB区の西端に所在し、第1号と第3号は重複していた。遺物の出土はなかったが、遺構の形状などから該期の遺構と判断した。土坑は計74基確認されたが、その多くは近世・近代のものと考えられる。これらは、A区の北寄りからB・C区に集中的に認められた。溝跡は計48条確認されたが、A区南西溝群は中世の可能性のあるものの、大部分は近世以降のものと考えられる。なお、第20号溝跡は第3次調査の際に中世の遺物が出土しており、該期のものと考えられる。円形円溝遺構は時期を特定出来なかったが、この項で報告したが、時期が異なる可能性がある。また、方形円溝遺構は近世以降と思われる。第3次調査では20条確認され、10条は近世～近・現代、他の10条は中世と推定されている。F区で確認された溝跡の多くは南東方向に伸びていて、その延長線上には今次調査区の第39A・39B・40号溝跡があり、連続する可能性がある。しかし、これらの溝跡は東側で近世以降と考えられる第33号溝跡と重複し、これに切られていることから、第3次調査区の溝跡も近世以降の可能性はある。周辺で該期の遺跡としては、辻の内遺跡から竪立柱建物跡や竪穴が多数確認されている。また、南方約700mに樋口城跡、北方約2.4kmには犬飼城跡が所在し、ともに宇都宮氏の有力家臣の居城であった。なお、遺跡の南東方約100mを南西・北東に延びる栃木街道は古くから利用された道であり、北東方約800m付近には宿場町が形成されていた。本遺跡から前述の辻の内遺跡にかけて確認された中・近世の遺構は一般集落ではなく、宿場に伴う遺構であった可能性もあろうが、本遺跡の状況からは前者の可能性を想定したい。

第2節 遺構・遺物について

古墳時代前期の堅穴住居跡は28軒確認された。第1・8・10・13・22・30・35・45・48・50・52・53A・58・60～64A・68・71・73・79・82・84・86・90・94・120号堅穴住居跡である。前述の通り大型が13軒、中型が5軒、小型が10軒となる。平面形は大型を主体とし、長方形のものも数軒見られる。これらのうち、炉跡は16軒で確認されたが、その内訳は大型10軒、中型2軒、小型4軒で、大部分は地床炉であったが、第8号跡は火床面に灰白色粘土を敷いてあった。炉の一端に棒状の礎を枕石として設置したものが8軒程見られ、第50号跡は枕石の代用として粘土塊を使用した。主柱穴は4本で大型のものでは11軒で確認されたが、中型は3軒、小型は2軒と少ない。なお、柱穴が円形ではなく方形もしくは長方形のものが大型の堅穴住居跡で若干（第30・50・52・68号跡）認められ、これらの貯蔵穴も方形もしくは長方形となる。貯蔵穴は、大型で1軒、中型で3軒、小型で2軒確認された。大型では2基設けられたものが3軒見られた。また、その度合いに違いはあるものの、焼土や炭化物・灰が遺存し火災住居と思われるものは計12軒で、大型が7軒、中型2軒、小型3軒と大型が半数を占める。これらの堅穴住居跡は、A区の中央からその西側とA区南東部とE区の南半部にかけてそれぞれ100m程の範囲にまとまって分布していたが、C区の南東部に確認された第120号跡は周囲に該期の堅穴住居跡が認められず、単独で所在する。一辺3.0mと小型で、柱穴は確認されなかったが、炉跡が確認され、枕石が据えられていた。火災に遭っていて、完形の土器類が一括して出土した。該期の他の堅穴住居跡の出土土器とは様相を異にしており、他所からの移住者と思われる。また、A区の南端で確認された第1号跡は、北側に未調査部分があり断定は出来ないものの、周囲に該期の堅穴住居跡が認められず、集団から離れて所在すると思われる。しかし、こちらの出土土器類は他の住居跡と同種のものであり、如何なる事情で他と離れて所在するのかは判然としない。

該期の遺構として第14号土坑が確認された。上部の半分程が第57号堅穴住居跡に切られていたが、開口部が134×88cmの長方形で、深さ143cm。底面付近より完形に近い土器類の壺1点、甕2点が出土した。人為的に埋められており、墓塚の可能性もあるが、副葬品にはそぐわない土器類のように思われる。

古墳時代後期の堅穴住居跡は計46軒確認された。第3・7・9・11・12・18・20・25～27・32～34・36・39～41・44・53B・54・57・59・66・67・72・74・75・81・83・85・87・88・92・95～97・99・101・107～109・111・114・115・124・125号堅穴住居跡が該期のものと考えられる。前述の通り大型が12軒、中型が10軒、小型が16軒となる。平面形は大型は推定を含めいずれも方形で、中型は方形7軒で、長方形が1軒で長方形がやや多く、小型は方形が11軒、長方形が4軒、方形から長方形が1軒で方形が主体を占める。該期の堅穴住居跡は北辺にカマドが設けられたものが大部分であり、東カマドが大型で1軒、同じく小型で3軒認められた。柱穴は大型ではすべて4本柱であったが、中型で6軒、小型は1軒しか確認されなかった。貯蔵穴は大型では8軒、中型が8軒、小型で2軒に設けられており、大型と中型では2基設けられたものが各1軒見られた。出入口のピットは大型で6軒、中型で7軒、小型で2軒に確認された。カマドは壁を切り込んで白色粘土で築かれていたが、堅穴住居跡の焼跡に際して儀礼的破壊（部分）を行ったと思われる。いずれも遺存状態が良好とは言えない。堅穴の掘削に際して、カマドのあった部分のロームを若干掘り残して芯としたものが5軒程見られた。また、袖部の補強材として礎や燧灰岩の切石を使用したもの、他、焚口の底部分に燧灰岩の切石を用いたもの（第39号跡）、土器類の壺類を使用したもの（第109号跡）も見られた。また、支脚は棒状の礎を使用したものの他に土製品を用いたもの（第95・99号跡）が見られた。大型及び中型の住居跡の中には間仕切溝が設けられたものがあり、大型で4軒、中型で1軒見られ、東西の壁溝から主柱穴もしくは補助柱穴に向かって掘られていた。

A区南端部において円墳が2基確認された。第1号墳は前述の通り、墳丘及び内溝の南西部、主体部まで後世の溝跡群によって削平を受けていて、遺存状態は不良である。墳丘は径10.5mの円形と推定される。内溝は幅0.6～1.4m、現存の深さは20～40cmであるが、北東部に幅0.7～1.0m、長さ5.8m程の張り出しが確認された。墳丘は円形であるが、内溝のみが北東に突出した形状である。当初は古墳とは別の遺構と思われたが、覆土は近似しており、内溝の一部と見ること可能と考えられる。あるいは内溝のみ帆立貝型を意識した可能性も全く否めない。主体部は地山に深く掘り込まれていて、部分的に遺存している。墓床の底面に木棺の痕跡が遺存し、南西の小口部分に白色粘土が遺存したことから割竹形の木棺と推察される。木棺部分の南東寄りで鉄製品の馬具（轡）が1点出土した。他には本墳に伴う遺物は皆無である。轡は内溝南側縁板が見られる。本墳は埋葬後に封土を盛り上げたと考えられるが、前述で述べた辻の内遺跡の古墳は墳丘とともに主体部が失われたと推察され、埋葬方法の違いが明瞭である。本墳の轡は縁板が大振りで、内溝部分の両端が鋭角であることから後期前半と推察され、辻の内遺跡の古墳より半世紀以上後出と考えられる。市内では東谷・中島地区の埴原古墳群の9号墳から同種の轡が出土しており、本墳出土のものの方が簡素な造りである。こちらも後期前半と考えられており、ほぼ同時期の所産と思われる。

さらに、遺物の出土が皆無で帰属時期を特定し難いが、第1号墳の東約28mで小形の円墳が1基（第2号墳）確認された。第2号墳は墳丘の径が7.0～7.2m程で中央部に埋葬施設と考えられる土坑が確認されたことから、低墳丘の円墳と判断した。他にも円形に溝が廻る遺構は見られるが、埋葬施設と思われるものが認められず、それらは円形内溝として掲載した。

また、該期の遺構としては第1号墳の北端で確認された第32号土坑から完形に近い土器類の壺が各1点出土している。第1号土坑は南円形、第32号土坑は円形と形状の違いはあるものの、墓塚の可能性を想定したい。

奈良時代の堅穴住居跡は計21軒確認された。第6・46・55・56・65・76・91・98・100・102・103・105・106・110・112・116～119・121・123号堅穴住居跡がこの時期と考えられる。前述の通り、大型はなく、中型9軒、小型12軒で小型がやや多い。平面形は中型が方形2軒、長方形が6軒、不明1軒、小型が方形3軒、長方形9軒で長方形が多数を占める。カマドは、中型、小型ともいずれも北カマドであった。カマドは壁を切り込み白色粘土で築かれていたが、堅穴住居跡の焼跡に際して儀礼的な破壊が行われたと思われる。全体的に遺存状態が悪い。支脚は棒状の

礎を使用したものや底に凝灰岩の切石を使用したもの（第105号跡）が見られた。柱穴はほとんど確認されなかったが、中型で4本柱が1軒、2本柱から4本柱としたものが1軒見られた。貯蔵穴が設けられていたのは中型で2軒、小型で1軒であった。また、出入口ピットは中型と小型で各1軒見られた。火災に遭遇したと思われるものは同じく中型と小型で各1軒である。また、第123号跡は東西4.3～4.4m、南北3.2～3.3mの中型に近い小型住居跡であるが、この堅穴の周囲に幅40～50cmの平坦面が設けられていた。床面より55cm程高く、壁と上屋の間に設けられた棚状の施設と考えられる。なお、遺物の出土が無く時期不明の第69・122号堅穴住居跡は遺構の形状から該期の可能性がある。

平安時代の堅穴住居跡は計6軒確認された。第2A・2B・4A・4B・5・14・17・19・21・23・24・29・31・37・38・42・43・47・49・51・64B・70・77・78・80・89号堅穴住居跡が該期のものと考えられる。前述の中型が10軒、小型が16軒で小型が主体である。平面形は、中型は方形が4軒、長方形5軒、不明1軒、小型は方形が8軒、長方形が7軒、不明1軒でそれぞれ同数であった。カマドは中型が北カマド9軒、北東カマド1軒、小型は北カマド15軒、北東カマド1軒であった。いずれも壁を大きく切り込み白色粘土で構築されていたが、堅穴住居の焼絶に伴う儀礼的破壊を受けて遺存状態は良くなかった。支脚に棒状の礎を使用するものやその上に須恵器の坏を重ねたもの（第77・80号跡）が見られた。また、両袖部補強材として礎や凝灰岩の切石を使用したもの、釜口の袖と底に凝灰岩の切石を使用したもの（第37号跡）が見られた。柱穴は中型、小型ともに2本柱と4本柱が各1軒であった。出入口ピットや貯蔵穴も各1～2軒に見られた程度である。

縄文時期は明確にしないが、この他に竪立建物跡や井戸跡が確認され、概ね奈良・平安時代と推察される。詳細は前節で述べた通りである。

古墳時代前期の出土遺物の中で、龍目痕（被蝕）の土器が3点出土している。第52・68・86号堅穴住居跡から出土した土器類の蓋の胴部に認められた。第52号跡は東西5.2m、南北4.8mの大型に近い中型の住居跡で、火災に遭遇して多数の土器類が出土した。貯蔵穴と考えられるピットより出土した。第68号跡は東西推定5.25m、南北5.5mの大型の住居跡で床面と貯蔵穴出土の破片が接合し、ほぼ完形である。火災に遭遇した痕跡は見られなかった。しかし、比較的大きく土器類が出土している。第86号跡は東西8.0～8.5m、現存南北長5.4mの大型の住居跡である。床面直上より出土し、ほぼ完形に復元された。火災に遭遇した痕跡が見られる。近隣では、花の木町遺跡のSI-07からの出土が報告されている。こちらは3.3×3.0mと小型の堅穴住居跡で、床面直上から出土している。火災に遭遇し、他に多くの土器類が出土している。胴部上半に2個の小孔があることから、液体ではなく粉などの種子類の貯蔵・保管が想定されている。本遺跡出土の2点の土器は洗浄中に室内の土を被覆した際には内容物は認められなかった。また、本遺跡の第86号跡や花の木町遺跡のSI-07は火災に遭遇しており、火災による被蝕を受けた痕跡が残ったものと推測したが、第68号跡は火災に遭遇しておらず疑問であった。しかし、堅穴住居跡の床面ではなく、屋根組の空間を利用した貯蔵・保管の為に被蝕の状態でも長期使用すれば直接強い被蝕を受けなくとも痕跡が残る可能性は高いと思われる。花の木町遺跡での見解に従いたい。

また、今次調査区では、第50号堅穴住居跡から勾玉、管玉、白玉が各1点、第58号堅穴住居跡からは管玉が1点出土している。第58号跡は火災に遭遇しているものの、第50号跡はその痕跡は認められなかった。日常生活でこのようなものを紛失すれば、限られた空間内で探し出すことは可能と思われる。とすれば、意図的に置いたことになる。さらに、古墳時代後期の第33号堅穴住居跡で白玉1点、第57号堅穴住居跡から銅製の耳環1点、ガラス製の丸玉1点、白玉2点が出土しており、同様の行為の所産と見るべきものと思われる。なお、かつて筆者が調査した東谷・中島地区西所部西原遺跡では古墳時代後期の堅穴住居跡でカマド周辺より白玉がまとまって出土し、堅穴の焼絶に伴う祭祀行為と推察された。したがって、これらも何らかの事情による焼絶に伴う祭祀行為の存在を想定したい。

古墳時代後期の第26号堅穴住居跡は、一辺6.3mの大型の堅穴住居跡である。火災に遭遇しており、比較的大きく土器類が出土した。この中で注目したいのが、所謂須恵器模倣型の土器器坏・蓋の存在である。一般に須恵器は坏と蓋の区分は明確であるが、土器器坏の場合は坏と蓋の相方を模倣したと思われるが、どちらも坏として扱われている。事実、本報告でも実測図は同様に口縁部を上にして示した。しかし、この堅穴住居跡の出土状況を見ると当時の人々の意識の中では使用方法も模倣していたことが判る。図版5-1・Mで示したように、模倣型坏と模倣型坏蓋セットで使われている。須恵器の場合セットで焼成されるが、土器器坏の場合は別々に焼成されて、焼成後に組み合わせていると思われる。この住居跡では模倣型が5点、坏蓋（蓋）模倣型5点の他、半球形が7点出土している。模倣型は5セット存在したことになる。この種の土器器坏（使用）した当初の人々は、使用方法も忠実に模倣したと思われるが、時間の経過とともに本来の使用形態が忘れ去られ、坏模倣型、蓋模倣型ともに同じ用途で使用されるようになったと推察される。したがって、本書では坏模倣型と蓋模倣型の名称を使用した。つまり、これらは本来の使用形態が変化したこと、類似資料の発見を期待するとともに、検討は先学諸賢に委ねたい。

第1号墳の唯一の副葬品は、主体部から出土の鉄製内湾筒形鏡板付飾である。遺存状態は良好とは言えないが、ほぼ形状を確認し得る。破壊して分離した一方の鏡板は、最大幅が12.3cm、現存高は8.6cm。立脚部分が破損しているものの立脚がすべて欠損したようには見受けられない。あるいは、上部に小孔を穿って直接吊鉤金具を取り付けたものかもしれない。なお、片面に幅1.8cm、長さ5.8cm程（鏡と付着物で判然としにくい）の小孔をもつ鉄片が付着しており、これが吊鉤金具の可能性が高い。また、外縁に鋸打は見られない。もう一方の鏡板は、遺存状態が不良で比較にいいが、最大幅は10.5cm程と思われるが、高さはやや低いようである。左右で異なる大きさの鏡板であったことから、補修の可能性がある。一方の引手には、別造りの圓形の引手臺が残っていた。この種の器は古墳時代中後期半頃から見られるようであるが、本墳のものは引手臺が別造りであり、鏡板がやや大振りで、下縁部が鋭角をなして挟り込むことなどから、後期前半に下るものと思われる。



A. A区全景 (南東から)



B. A区全景 (南東から)



C. A区中央全景 (南東から)



D. A区南端全景 (東から)



E. A区南東部近景 (南から)



F. A・B区全景 (北東から)



G. A・B区全景 (東から)



H. A・B区全景 (東から)

図版 2



A. C区全景 (東から)



B. C区全景 (南東から)



C. C区全景 (北西から)



D. C区全景 (南から)



E. C区全景 (南から)



F. C区全景 (南西から)



G. C区全景 (南から)



H. C区全景 (西から)



A. 第1号竪穴住居跡、第1号溝完掘 (南から)



B. 第1号竪穴住居跡完掘 (南から)



C. 第1号竪穴住居跡・遺物 (南から)



D. 第1号竪穴住居跡遺物 (西から)



E. 第1号竪穴住居跡掘方 (南から)



F. 第2A・2B号竪穴住居跡完掘 (南西から)



G. 第2B号竪穴住居跡カマド遺物 (南西から)



H. 第3号竪穴住居跡、第25号溝跡完掘 (南から)



I. 第4A・4B号竪穴住居跡完掘 (南東から)



J. 第4B号竪穴住居跡カマド (南東から)



K. 第4A号竪穴住居跡カマド (南西から)



L. 第5号竪穴住居跡完掘 (南西から)



M. 第6号竪穴住居跡北東隅遺物 (北西から)



N. 第6号竪穴住居跡完掘 (南東から)



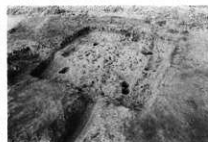
O. 第6号竪穴住居跡カマド (南から)



P. 第6号竪穴住居跡北東隅遺物 (南西から)



Q. 第7号竪穴住居跡、第23号溝跡掘方 (南東から)



R. 第7号竪穴住居跡、第23号溝跡掘方 (南東から)



A. 第8号竪穴住居跡完掘 (南から)



B. 第8号竪穴住居跡炉跡 (北東から)



C. 第8号竪穴住居跡貯蔵穴 (P5) (南から)



D. 第8号竪穴住居跡掘り出し状況 (南から)



E. 第8号竪穴住居跡南西隅遺物 (南から)



F. 第8号竪穴住居跡掘方 (南から)



G. 第8号竪穴住居跡掘り出し土層 (東から)



H. 第9号竪穴住居跡完掘 (南から)



I. 第9号竪穴住居跡遺物 (南東から)



J. 第10・35号竪穴住居跡完掘 (北から)



K. 第11号竪穴住居跡完掘 (南から)



L. 第11号竪穴住居跡カマド (南から)



M. 第11号竪穴住居跡カマド右脇遺物 (東から)



N. 第12号竪穴住居跡完掘 (南から)



O. 第12号竪穴住居跡カマド (南から)



P. 第13号竪穴住居跡完掘 (南から)



Q. 第14号竪穴住居跡、第8号土坑完掘 (南から)



R. 第17号竪穴住居跡完掘 (南から)



A. 第 18 号竪穴住居跡完掘 (南東から)



B. 第 19 号竪穴住居跡完掘 (南から)



C. 第 20 号竪穴住居跡完掘 (南から)



D. 第 21 号竪穴住居跡完掘 (南から)



E. 第 21 号竪穴住居跡カマド (南東から)



F. 第 23 号竪穴住居跡完掘 (南東から)



G. 第 24 号竪穴住居跡完掘 (南から)



H. 第 25 号竪穴住居跡完掘 (西から)



I. 第 25 号竪穴住居跡カマド (西から)



J. 第 25 号竪穴住居跡カマド掘方 (西から)



K. 第 25 号竪穴住居跡遺物出土状況 (北西から)



L. 第 25 号竪穴住居跡遺物-1 (北から)



M. 第 25 号竪穴住居跡遺物-2 (北から)



N. 第 25 号竪穴住居跡掘方 (南西から)



O. 第 26 号竪穴住居跡完掘 (南から)



P. 第 26 号竪穴住居跡カマド (南東から)



Q. 第 26 号竪穴住居跡遺物出土状況 (南西から)



R. 第 26 号竪穴住居跡掘方 (南東から)

図版 6



A. 第 27 号竪穴住居跡完掘 (南から)



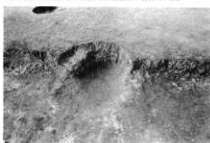
B. 第 29 号竪穴住居跡完掘 (南から)



C. 第 30 号竪穴住居跡完掘 (東から)



D. 第 31 号竪穴住居跡完掘 (南から)



E. 第 31 号竪穴住居跡カマド (南から)



F. 第 32 号竪穴住居跡完掘 (南から)



G. 第 33 号竪穴住居跡完掘 (南から)



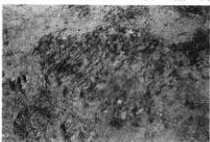
H. 第 33 号竪穴住居跡カマド焚口 (南から)



I. 第 33 号竪穴住居跡カマド焚口 (北上から)



J. 第 33 号竪穴住居跡カマド袖芯 (南から)



K. 第 33 号竪穴住居跡炭化物 (カヤ類) (南から)



L. 第 33 号竪穴住居跡掘方 (南から)



M. 第 34 号竪穴住居跡完掘 (南から)



N. 第 37 号竪穴住居跡、第 10 号土坑完掘 (南西から)



O. 第 37 号竪穴住居跡凝灰岩 (東から)



P. 第 38 号竪穴住居跡完掘 (南から)



Q. 第 39 号竪穴住居跡完掘 (南東から)



R. 第 39 号竪穴住居跡カマド (南東から)



A. 第40号竪穴住居跡完掘 (南から)



B. 第40号竪穴住居跡カマド (南から)



C. 第41号竪穴住居跡完掘 (南東から)



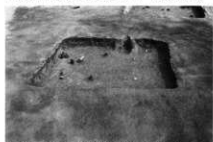
D. 第41号竪穴住居跡カマド (南東から)



E. 第42号竪穴住居跡完掘 (南から)



F. 第42号竪穴住居跡カマド (南から)



G. 第43号竪穴住居跡完掘 (南から)



H. 第43号竪穴住居跡鉄製品№13 (南から)



I. 第44号竪穴住居跡完掘 (南から)



J. 第44号竪穴住居跡カマド (南から)



K. 第45号竪穴住居跡完掘 (南東から)



L. 第46号竪穴住居跡完掘 (南東から)



M. 第48号竪穴住居跡完掘 (東から)



N. 第48号竪穴住居跡カマド (東から)



O. 第48号竪穴住居跡炭化物-1 (西から)



P. 第48号竪穴住居跡炭化物-2
(北西から)



Q. 第49号竪穴住居跡完掘 (南から)



R. 第50号竪穴住居跡完掘 (南東から)



A. 第50号竪穴住居跡炉跡 (南東から)



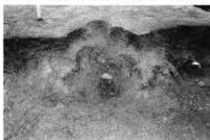
B. 第50号竪穴住居跡勾玉No.9 (南から)



C. 第50号竪穴住居跡掘方 (南から)



D. 第51号竪穴住居跡完掘 (南から)



E. 第51号竪穴住居跡北カマド (南から)



F. 第51号竪穴住居跡紡錘車No.11 (南から)



G. 第51号竪穴住居跡掘方 (南から)



H. 第52号竪穴住居跡完掘-1 (南から)



I. 第52号竪穴住居跡完掘-2 (南から)



J. 第52号竪穴住居跡炉跡 (南から)



K. 第52号竪穴住居跡貯蔵穴 (P5) (南から)



L. 第52号竪穴住居跡遺物出土状況-1 (南から)



M. 第52号竪穴住居跡遺物出土状況-2 (東から)



N. 第52号竪穴住居跡遺物出土状況-3 (北西から)



O. 第52号竪穴住居跡掘方 (南から)



P. 第53A・53B号竪穴住居跡完掘 (南から)



Q. 第53A・53B号竪穴住居跡掘方 (南から)



R. 第54号竪穴住居跡完掘 (南から)



A. 第 54 号竪穴住居跡カマド (南から)



B. 第 55 号竪穴住居跡カマド (南から)



C. 第 55 号竪穴住居跡カマド (南から)



D. 第 56 号竪穴住居跡カマド (南から)



E. 第 56 号竪穴住居跡カマド (南から)



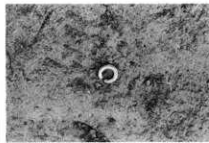
F. 第 57 号竪穴住居跡カマド (南から)



G. 第 57 号竪穴住居跡遺物出土状況-1 (北東から)



H. 第 57 号竪穴住居跡遺物出土状況-2 (西から)



I. 第 57 号銅製品№13 (東から)



J. 第 57 号竪穴住居跡掘方 (南から)



K. 第 58 号竪穴住居跡カマド (南から)



L. 第 58 号竪穴住居跡炉跡 (南から)



M. 第 59 号竪穴住居跡カマド (南から)



N. 第 59 号竪穴住居跡カマド (南から)



O. 第 60 号竪穴住居跡カマド (南から)



P. 第 60 号竪穴住居跡炉跡 (南から)



Q. 第 61 号竪穴住居跡カマド (南東から)



R. 第 61 号竪穴住居跡遺物出土状況 (南西から)



A. 第 61 号竪穴住居跡炉跡 (南から)



B. 第 62 号竪穴住居跡完掘 (南から)



C. 第 62 号竪穴住居跡炉跡 (南から)



D. 第 63 号竪穴住居跡完掘 (南東から)



E. 第 64A 号竪穴住居跡完掘 (南から)



F. 第 64B 号竪穴住居跡完掘 (西から)



G. 第 65 号竪穴住居跡完掘 (南から)



H. 第 66 号竪穴住居跡完掘 (南から)



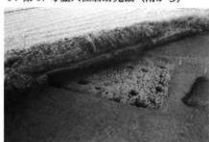
I. 第 67 号竪穴住居跡完掘 (南から)



J. 第 67 号竪穴住居跡カマド (南から)



K. 第 68 号竪穴住居跡完掘 (南から)



L. 第 68 号竪穴住居跡短方 (南から)



M. 第 69 号竪穴住居跡完掘 (南から)



N. 第 69 号竪穴住居跡カマド (南から)



O. 第 70 号竪穴住居跡完掘 (南から)



P. 第 71 号竪穴住居跡完掘 (南から)



Q. 第 72 号竪穴住居跡完掘 (南から)



R. 第 72 号竪穴住居跡カマド (南から)



A. 第 72 号竪穴住居跡掘方 (南から)



B. 第 73 号竪穴住居跡完掘 (南から)



C. 第 74 号竪穴住居跡完掘 (西から)



D. 第 74 号竪穴住居跡カマド (西から)



E. 第 75 号竪穴住居跡完掘 (南から)



F. 第 75 号竪穴住居跡カマド (南から)



G. 第 77 号竪穴住居跡完掘 (南東から)



H. 第 77 号竪穴住居跡カマド (南から)



I. 第 78 号竪穴住居跡完掘 (南から)



J. 第 78 号竪穴住居跡掘方 (南から)



K. 第 79 号竪穴住居跡完掘 (南から)



L. 第 79 号竪穴住居跡貯蔵穴 (P6) (南西から)



M. 第 80 号竪穴住居跡完掘 (南から)



N. 第 80 号竪穴住居跡カマド (南から)



O. 第 81 号竪穴住居跡完掘 (南から)



P. 第 81 号竪穴住居跡カマド (南から)



Q. 第 82 号竪穴住居跡完掘 (南から)



R. 第 83 号竪穴住居跡完掘 (南から)



A. 第 83 号竪穴住居跡カマド (南から)



B. 第 84 号竪穴住居跡完掘 (東から)



C. 第 84 号竪穴住居跡掘方 (東から)



D. 第 85 号竪穴住居跡完掘 (南から)



E. 第 85 号竪穴住居跡カマド (南から)



F. 第 85 号竪穴住居跡掘方 (南西から)



G. 第 86 号竪穴住居跡完掘・遺物出土状況 (東から)



H. 第 86 号竪穴住居跡遺物出土状況 (南西から)



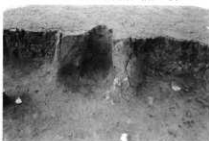
I. 第 87 号竪穴住居跡完掘 (南から)



J. 第 87 号竪穴住居跡カマド (南から)



K. 第 88 号竪穴住居跡完掘 (南から)



L. 第 88 号竪穴住居跡カマド (南から)



M. 第 89 号竪穴住居跡完掘 (南から)



N. 第 89 号竪穴住居跡カマド (南から)



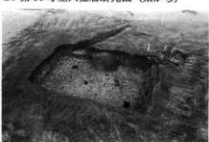
O. 第 90 号竪穴住居跡完掘 (東から)



P. 第 90 号竪穴住居跡炉跡 (東から)



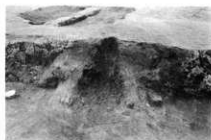
Q. 第 90 号竪穴住居跡掘方 (東から)



R. 第 91 号竪穴住居跡完掘 (南から)



A. 第 92 号竪穴住居跡完掘 (南から)



B. 第 92 号竪穴住居跡カマド (南から)



C. 第 92 号竪穴住居跡配置 (南から)



D. 第 94 号竪穴住居跡完掘 (南から)



E. 第 95 号竪穴住居跡完掘 (南から)



F. 第 96 号竪穴住居跡遺物出土状況-1 (北西から)



G. 第 96 号竪穴住居跡遺物出土状況-2 (北東から)



H. 第 96 号竪穴住居跡遺物出土状況-3 (南東から)



I. 第 96 号竪穴住居跡完掘 (南から)



J. 第 96 号竪穴住居跡カマド (南から)



K. 第 97 号竪穴住居跡完掘 (南から)



L. 第 97 号竪穴住居跡カマド (南から)



M. 第 98 号竪穴住居跡完掘 (南から)



N. 第 99 号竪穴住居跡完掘 (南から)



O. 第 99 号竪穴住居跡新・旧カマド (南から)



P. 第 99 号竪穴住居跡旧 (東側) カマド (南から)



Q. 第 99 号竪穴住居跡新 (西側) カマド (南から)



R. 第 100 号竪穴住居跡完掘 (南から)



A. 第100号竪穴住居跡カマド (南から)



B. 第101号竪穴住居跡完掘 (南から)



C. 第101号竪穴住居跡カマド (南から)



D. 第102号竪穴住居跡完掘 (南から)



E. 第102号竪穴住居跡カマド (南から)



F. 第103号竪穴住居跡完掘 (南から)



G. 第103号竪穴住居跡カマド (南から)



H. 第103号竪穴住居跡炭化物出土状況-1 (南から)



I. 第103号竪穴住居跡炭化物出土状況-2 (南西から)



J. 第103号竪穴住居跡炭化物出土状況-3 (南西から)



K. 第105号竪穴住居跡完掘 (南東から)



L. 第106号竪穴住居跡完掘 (南東から)



M. 第107号竪穴住居跡完掘 (南から)



N. 第107号竪穴住居跡掘方 (南から)



O. 第108号竪穴住居跡完掘 (南から)



P. 第109号竪穴住居跡完掘 (西から)



Q. 第109号竪穴住居跡カマド (西から)



R. 第109号竪穴住居跡西壁鼎群 (南から)



A. 第109号竪穴住居跡西壁附礎群近接 (南から)



B. 第109号竪穴住居跡遺物出土状況-1 (西から)



C. 第109号竪穴住居跡遺物出土状況-2 (西から)



D. 第110号竪穴住居跡完掘 (南から)



E. 第111号竪穴住居跡完掘 (南東から)



F. 第111号竪穴住居跡カマド (南から)



G. 第112号竪穴住居跡完掘 (南から)



H. 第112号竪穴住居跡カマド (南から)



I. 第114号竪穴住居跡完掘 (南から)



J. 第114号竪穴住居跡カマド (南から)



K. 第115号竪穴住居跡完掘 (西から)



L. 第115号竪穴住居跡カマド (西から)



M. 第115号竪穴住居跡遺物出土状況 (西から)



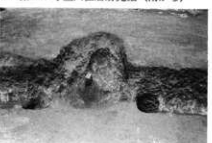
N. 第117号竪穴住居跡完掘 (南から)



O. 第118号竪穴住居跡完掘 (南から)



P. 第119号竪穴住居跡完掘 (東から)



Q. 第119号竪穴住居跡カマド (南から)



R. 第119号竪穴住居跡掘方 (東から)



A. 第120号竪穴住居跡完掘（西から）



B. 第120号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）



C. 第120号竪穴住居跡掘方（西から）



D. 第121号竪穴住居跡、第30号遺跡完掘（南から）



E. 第121号竪穴住居跡カマド（南から）



F. 第122号竪穴住居跡、第31・39A・39B号遺跡完掘（南から）



G. 第122号竪穴住居跡カマド（南西から）



H. 第123号竪穴住居跡完掘（南東から）



I. 第123号竪穴住居跡カマド（南から）



J. 第123号竪穴住居跡カマド遺物（南東から）



K. 第123号竪穴住居跡掘方（南東から）



L. 第124号竪穴住居跡完掘（南から）



M. 第124号竪穴住居跡カマド（南東から）



N. 第124号竪穴住居跡掘方（南から）



O. 第125号竪穴住居跡完掘（南から）



P. 第125号竪穴住居跡カマド（南から）



Q. 第125号竪穴住居跡掘方（南から）



R. 第1号掘立柱建物跡完掘（南西から）



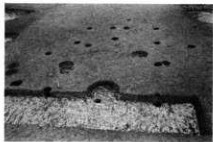
A. 第2号掘立柱建物跡完掘 (南から)



B. 第3A・3B号掘立柱建物跡完掘 (南から)



C. 第4号掘立柱建物跡完掘 (東から)



D. 第5号掘立柱建物跡、第17号土坑完掘 (北から)



E. 第6号掘立柱建物跡完掘 (南から)



F. 第7号掘立柱建物跡完掘 (東から)



G. 第8A・8B号掘立柱建物跡完掘 (西から)



H. 第9・10号掘立柱建物跡、第24号土坑完掘 (西から)



I. 第12号掘立柱建物跡完掘 (北から)



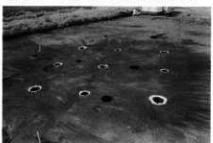
J. 第13号掘立柱建物跡完掘 (北東から)



K. 第20号掘立柱建物跡、第37～39号土坑、第33号土坑完掘 (北から)



L. 第21号掘立柱建物跡、第44・45号土坑完掘 (南東から)



M. 第22号掘立柱建物跡完掘 (南東から)



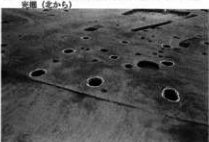
N. 第23号掘立柱建物跡、第42号土坑、第33号土坑完掘 (北から)



O. 第24号掘立柱建物跡、第33・35号土坑完掘 (北から)



P. 第25号掘立柱建物跡、第35号土坑完掘 (南から)



Q. 第26号掘立柱建物跡、第55号土坑完掘 (南から)



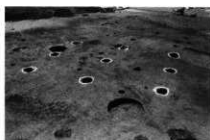
R. 第27号掘立柱建物跡、第58号土坑完掘 (東から)



A. 第29号掘立柱建物跡、第78号土坑完掘 (南から)



B. 第30号掘立柱建物跡、第64・65号土坑完掘 (南東から)



C. 第31号掘立柱建物跡、第79号土坑完掘 (北から)



D. 第32号掘立柱建物跡、第67・70・71号土坑完掘 (南から)



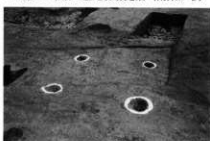
E. 第34号掘立柱建物跡完掘 (南東から)



F. 第35号掘立柱建物跡完掘 (南東から)



G. 第36号掘立柱建物跡完掘 (南東から)



H. 第37号掘立柱建物跡完掘 (南から)



I. 第1号墳完掘遺景 (南から)



J. 第1号墳完掘 (南から)



K. 第1号墳主体部確認時 (北から)



L. 第1号墳主体部確認時南半近接 (北から)



M. 第1号墳主体部完掘南半近接 (北から)



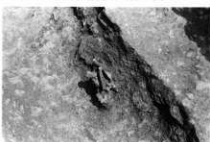
N. 第1号墳主体部完掘 (北から)



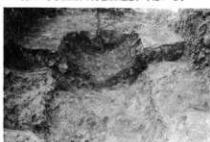
O. 第1号墳主体部完掘近接 (北から)



P. 第1号墳主体部遺物 (北から)



Q. 第1号墳主体部遺物 (南から)



R. 第1号墳主体部東西土層 (北から)



A. 第1号墳主体部掘り全景（北から）



B. 第1号墳主体部掘り底面工具痕（北から）



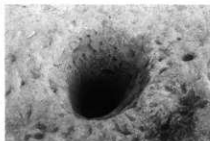
C. 第2号墳、第18・24号溝跡完掘（南から）



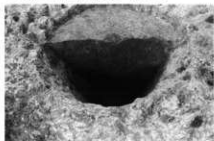
D. 第2号墳主体部完掘（東から）



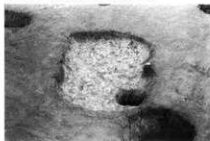
E. 第4号土坑完掘（南西から）



F. 第11号土坑完掘（西から）



G. 第11号土坑土層（東から）



H. 第12号土坑完掘近接（南西から）



I. 第13号土坑完掘（南から）



J. 第14号土坑完掘（東から）



K. 第14号土坑遺物出土状況-1（東から）



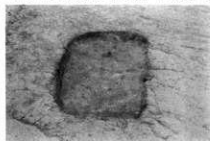
L. 第14号土坑遺物出土状況-2（東から）



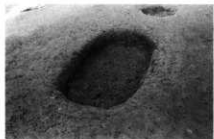
M. 第18号土坑完掘（北西から）



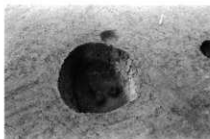
N. 第19号土坑完掘（北西から）



O. 第20号土坑完掘（東から）



P. 第31号土坑完掘（北東から）



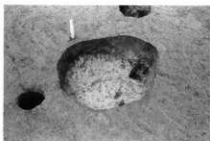
Q. 第35号土坑完掘（東から）



R. 第40号土坑完掘（北東から）



A. 第 41 号土坑完掘 (南西から)



B. 第 47 号土坑完掘 (南西から)



C. 第 48 号土坑完掘 (南から)



D. 第 50 号土坑完掘 (南から)



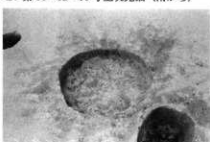
E. 第 51・52・80 号土坑完掘 (南から)



F. 第 53 号土坑完掘 (南から)



G. 第 54 号土坑完掘 (南から)



H. 第 55 号土坑完掘 (南から)



I. 第 59・60 号土坑完掘 (南から)



J. 第 61 号土坑完掘 (南から)



K. 第 74 号土坑完掘 (北から)



L. 第 76 号土坑完掘 (北から)



M. 第 25 号土坑完掘 (南から)



N. 第 26 号土坑完掘 (南から)



O. 第 49A・49B 号土坑完掘 (南から)



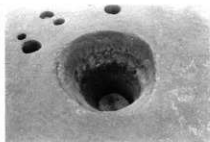
P. 第 77 号土坑完掘 (南から)



A. 第1号井戸跡完掘 (西から)



B. 第3号井戸跡完掘 (東から)



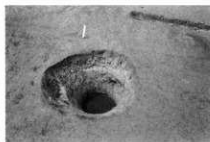
C. 第5号井戸跡完掘 (東から)



D. 第6号井戸跡完掘 (南から)



E. 第7号井戸跡完掘 (南から)



F. 第8号井戸跡完掘 (南から)



G. 41P・41Q・42P・42Qグリッド上坑跡近景 (東から)



H. 第1号方形竪穴完掘 (西から)



I. 第2・3号方形竪穴完掘 (北から)



J. 第2号方形竪穴ビット8・石材 (北から)



K. 第3号方形竪穴南東隅炭化物 (北から)



L. 第1号円形周溝遺構完掘 (南から)



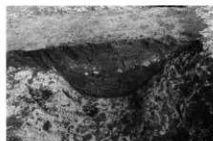
M. 第1号方形周溝遺構完掘 (北東から)



N. A区南西溝跡群完掘 (南から)



O. 第1号溝跡土層 (南から)



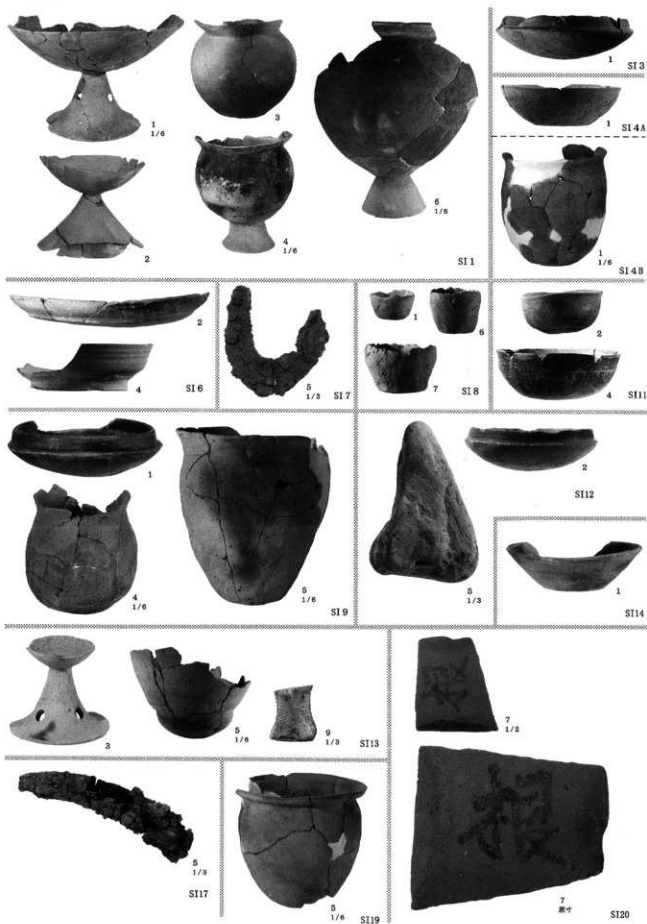
P. 第2号溝跡土層 (北から)



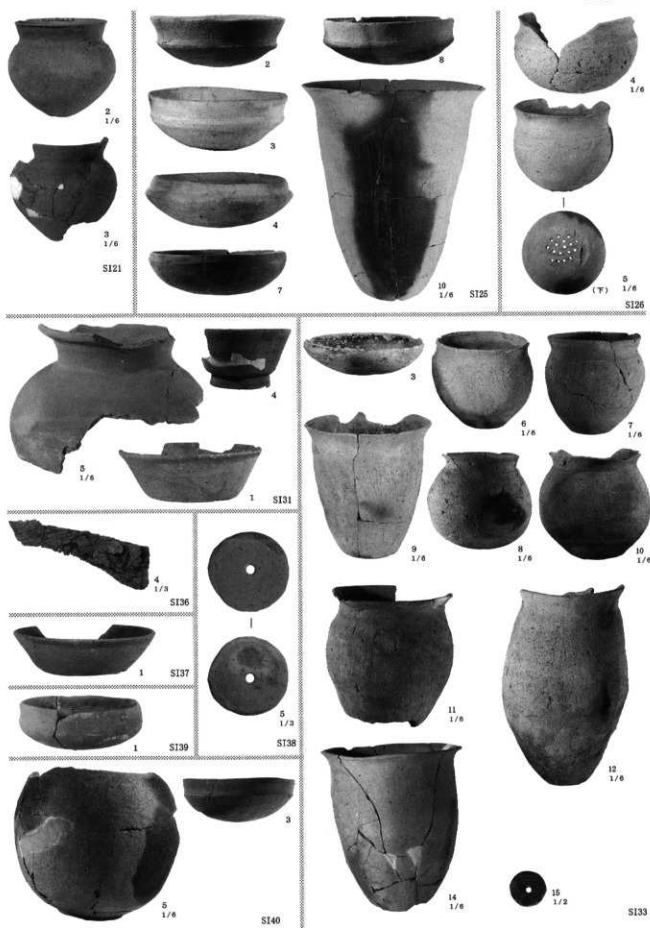
Q. 第33号溝跡土層 (南から)

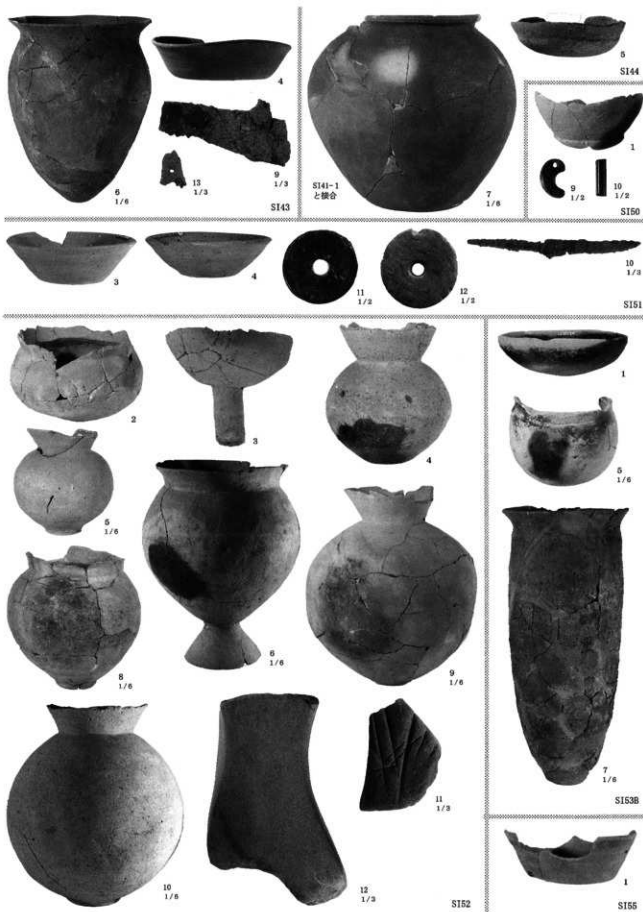


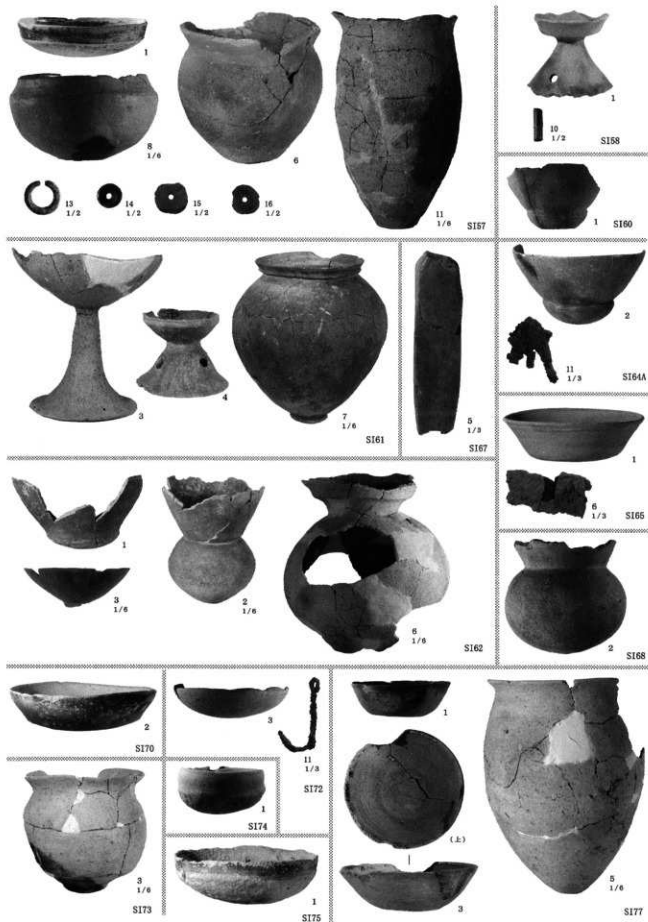
R. 第44号溝跡土層 (北東から)



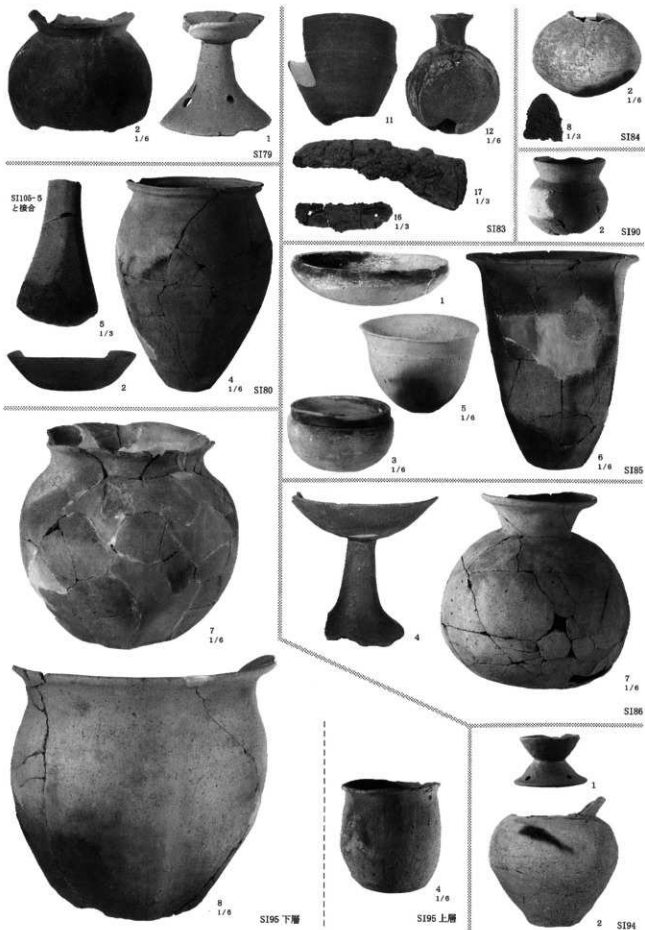
図版 23

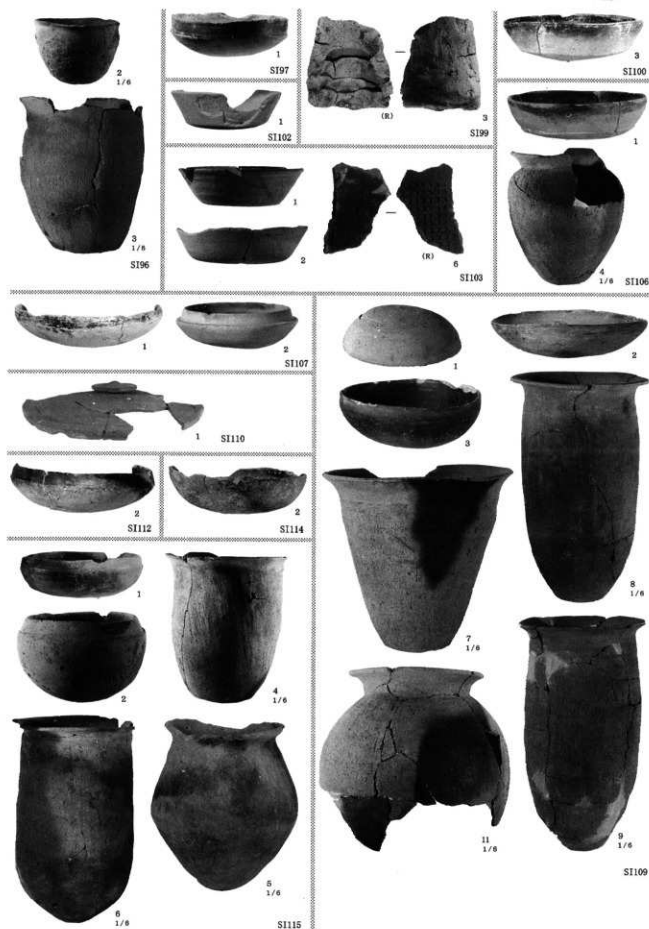




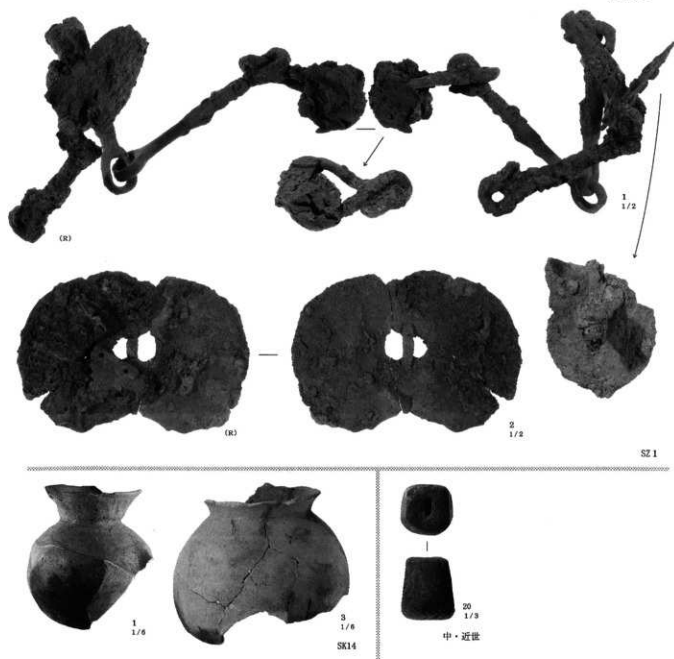


図版 26









第1号墳主体部、第14号土坑、中・近世出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すがたがわだいらししょうみなみせき							
書名	姿川第一小南遺跡							
副書名	第1・2次調査							
巻次								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第114集							
編著者名	水野順敏							
編集機関	株式会社日本竊史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112				TEL 0287-93-0711			
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5				TEL 028-632-2764			
発行年月日	西暦2023(令和5)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' "	東経 ° / ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姿川第一小南遺跡 (第1・2次調査)	うつのみやしにしかわだ まくたまち 宇都宮市西川田・幕田町 地内	9201	3321	36° 30' 35"	139° 50' 22"	19920520 } 19921220 19930205 } 19930725	31,000	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
姿川第一小南遺跡 (第1・2次調査)	集落跡	縄文時代	土坑5基		縄文土器、石器、石製品		・古墳時代前期の竪穴住居跡が28軒確認され、前期としては市内最大級の集落跡である。後期前半の円墳が2基確認された。	
	古墳	古墳～平安時代	竪穴住居跡123軒、掘立柱建物跡10棟、古墳2基、土坑3基、井戸跡1基		土師器、須恵器、鉄製品、銅製品、石製品、ガラス製品			
		中・近世 〔土坑・溝跡は近世以降を含む〕	掘立柱建物跡26棟、権跡1基、土坑74基、井戸跡7基、方形竪穴3基、円形・方形周溝遺構3基、溝跡48条		貿易陶磁器、国産陶磁器、瓦器、土師質土器、鉄製品、石製品、銭貨			
要約		・古墳時代前期に集落が形成され、同後期以降平安時代にかけて連続と集落が営まれた。この間、古墳時代後期前半には円墳が築かれている。また、掘立柱建物跡や方形竪穴、井戸跡、溝跡などが確認され、中世から近世にかけても集落が営まれたと考えられる。						

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第114集

姿川第一小南遺跡（第1・2次調査）

発行年月日 2023(令和5)年3月31日

編 集 株式会社日本竊史研究所

〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112

TEL 0287-93-0711

発 行 宇都宮市教育委員会文化課

〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5

TEL 028-632-2764

印 刷 株式会社松井ビ・テ・オ・印刷

〒321-0904 栃木県宇都宮市陽東5-9-21